

俗に、よく水を遊ぶものを、川だちと云ふ、「淮南子」に云、夫善游者溺、善騎者墮、各以其所好、反自爲禍、「管子」○「管子」善游者死于梁池、善射者死于中野、「堀川百首題狂歌集」川は川ではつるとしらなみや柀ヒナにうつとも又柳にて
川向ふの喧嘩

他人我に向つて、如何程の雑言し、又は無實を言ひ掛るとも、我に少しも心を動かして、争ひ訴へず、邪心を抱かざれば、終に怨を生ぜずとの心なり、「故事要言」

川の端に子を置く如し「毛吹草」

川越して宿をどれ「俳言集覽」

川止に遭た旅人のやう「全」

川流れの瓢箪（心の浮たる者をいふ）「全」

川に水をはこぶ

川口で船を破る

川流れの塵でくひにかゝる

何伯にも川流れ

「民のかまを」に「なれしとて頼むへきかは水底に住むウナギも知らじ行方を」「俳言集覽」

何伯に鹽を誂へたやう「全」

何童に尻を抜かる」

烏の頭の白くなるまで「毛吹草」同之

「事文類聚別集遠郷門」に遊歴紀聞を引て曰、燕太子丹爲質於秦、々不禮乃求歸、秦曰、待烏頭

白馬生角、當放子歸、太子仰天哭、感得烏頭白馬生角、秦王大驚遣丹歸、「風俗通」に云、據史

記爲之郷里俗説、其實無此事、原其所以有茲語者、丹寔好士無所愛愜也、故閭閻小論飾成之耳、

「後撰集」に太子丹か事を「山がらすかしらも白くなりけり我歸るへき時や來ぬらん」「歌草」

烏を鷲「毛吹草」○鷲を烏に争ふ

烏の鶺鴒の眞似「俳言集覽」

「風雅集」大井川のせきに来ぬる山からす鶺鴒のまねすとも魚はどらじな」

烏鶺鴒につかふが如し「毛吹草」和漢古歌

「和訓栞」山中にて猿ども、漁人の鶺鴒を放て魚を捕を見て、鶺鴒を捕へ、藤蘿をもて縛して、水に投するもの數次、後に倦て捨去るといへり、

鳥の口に繩だしがあまる〔俚言集覽〕○「だし」は草札カワレならん歟未詳）
鳥の口にけらがあまる

けらは木の名なり、けらの木の實は鳥喙にます〔全〕

鳥の紙をくはへたやう〔全〕

鳥のいけ栗又「かけすの埋栗」〔全〕

鳥は、栗子を食べて甘しとし、土中に埋て之を貯ふ、其去るに及び、仰きて浮雲を見、之を記すといへり、

鳥鳴き

俗に、鳥の鳴くを凶事として、忌む事とす、〔容齋隨筆〕云、北人以鳥聲爲喜、鵲聲爲悲、南人聞鵲噪則喜、聞鳥聲則睡而逐之、至於弦管挾彈擊使遠去〔雜草〕○〔太平清話〕に云、楊柳山先生、喜鵲而惡鵲、鵲報凶鵲報吉、鵲近忠鵲近諛、

鳥に反哺の孝あり〔俚言集覽〕○鳩は三枝の禮あり鳥に云云（は之部參看）
鳥の行水

〔大戴禮夏小正〕に、十月黑鳥浴、黑鳥鳥也謂乍上乍下也、又日向國にては鳥浴を以て雨候とす

〔俚言集覽〕

鴉金を借る

江戸の諺なり、曉鴉の鳴く時金を借り、暮鴉の鳴く時返すといふ、細民の生活を想ふべし、
堪忍の忍の字か百貫する

〔開元遺事〕王守和といひし人、曾て人と争ふ事あらず、常に几案の間まで、大に忍の字をしるす、或は幌幃の類まで、悉くぬひものにして之をなす、玄宗其名を聞て曰、汝己に守和と名く、しかも和を守るといふ時は、争はざる事を知る、今又好て忍の字をかくは何ぞや、守和對て曰、我聞く物さひしき時は必ず絶え、こわき時は必ず折る、人も又此の如し、萬の事忍の一字に過ぎざるといふ、玄宗悦ひたまふとなん、是等の事、與しき諺なれども、據あるにや、

〔世語支那草〕

堪忍五兩

世俗、堪忍五兩を、金幣の兩目と云ふは非なり、此は豊臣秀吉公の、加減關白丹と云ふ藥方を、戲作し玉へるにあり、左の如し、

正直五兩、堪忍四兩、思接三兩、分別二兩、用捨一兩、右毎朝一服つゝ、可被用之、子孫

か之部

延命丹也、○「禁物」無理、慮外、過言、油斷、

右各々日々三度宛、定を立て可有用心也、〔俚言集〕

堪忍五兩負て三兩

兩は、元來藥の量目なるを、金銀の數量とするより、此諺出ると見ゆ、〔全〕

堪忍に價なし〔全〕

價なしは、價のしれぬ、高價の義也、

堪忍は萬寶に換へがたし〔今引北條時宗書〕

〔栗山文集〕に云、忍怒招笑、忍欲昌年、小忍成大、言忍得仁、盛矣忍也、致此百順、

堪忍義の緒がされる

〔堀川狂歌集〕「今はとて忍ひし緒がされて内情をや人に見られん」又「しつかりとこらへ袋の緒をしめて口には出さし包みはつとも」〔全〕○〔愚案〕堪忍を知るといへども、堪忍に處するの道を知らざれば、終に全さを保つこと能はず、即堪忍袋の緒が切るゝなり、〔箏鳴〕に云辱之一事最所難忍、自古豪傑之士、多由此敗也、竊意、辱之來也、察其人如何、彼爲小人耶、則直在我何怒之有、彼爲君子耶、則直在彼何怒之有、と益忍に處するの要道なり、

堪忍辛抱は立身の力綱

古歌「堪しのぶ心しなくは皆人のなと身を立る事のあるへき」

堪忍は無事長久の基

かくす事はあらはるゝ○かくす事千里

〔玄帝垂訓〕に云、人間私語天聞若雷、暗室虧心神目如電、〔本朝俚語〕

かくす事の信はあらはれての徳

〔義貞記〕に、隠しての信は、顯れての徳と云事あれば、愚人の前なりとも、心中に終に隔あらし、賢智高貴はいふも更なり、〔俚言集〕○是陰徳陽報の義なり

〔前漢書〕に云、欲人勿聞莫若勿言、〔本朝俚語〕

かくさば穴をほれ〔世語集〕

かくすは罪〔民のかまど〕

かくれ辨慶

隠れ簀隠れ笠

世俗に云傳ふ、寶畫の中に、隱義といふもの有、隱身の藥術より、云出し、事なりと云ふ、
 原來隱身の説は、佛者の言ひ弘めしものか、「華嚴經」に云、有藥名安善那、塗目隱身、令人不見、
 といへり、其藥といふは、千年を経たる柏木の根は、人の坐せるか如し、長七寸あり、切れ
 は其根より血を出す、其血を目にぬれば身を隱すと、然れども虚説なるへし、又誰か能く柏木
 の、千年を経しを知るものあらんや、信すへからず、「閑窓叢談」○「玉かつま第十四」世にかくれ
 みの、かくれ笠といふ事あり、拾遺集十八の卷に、しのひたる人のもとに遣はしける、平公誠
 「かくれみのかくれ笠をもてしがなきたりと人にしられざるべく」と有云云「躬恒集卷下」し
 はずのつこもりの夜、那の鬼を「鬼すらも都の内と篋笠をぬぎてやこよひ人に見ゆらん」「主
 従心得草」に福神の歌とて「主に忠親に孝行あるならば篋笠もやる棧も袋も」「愚按」隠れ篋、隠
 れ笠、延命小袋、打出の小棧等は、皆福神の寶物なりとて諸説多し、皆實言なるべし、
 借る八合濟す一升（内二割増に返すを云）「俳言集覽」
 借る時の地藏顔濟す時の閻魔面
 「鶉衣」借物の辨に、鬼のやうなるものゝふも、霜月頃よりは、地藏顔して、人にたのものか
 りかねは、尾羽打からして云々、「全」

借着の袖ちはやふる「全」

借着より洗ひ着「全」

借家榮えて大母屋倒る「民のかまど」

借て来た猫のやう

金持金をつかはず又「金持金をつかはず、鉈持鉈をつかはず、辨當持辨當つかはず」

金持と灰吹はたまるはどきたない

「荷子」引民語曰、欲富乎忍恥矣、

金のなる木

是にも似たる事あり「事物異名」に許子和爲媾、臨卒謂母曰、錢樹子倒矣、言爲媾得錢如樹著

錢也「瓦礫雜考」

金うけするとも人請するな

金は火で試み人は酒でこころむ

金がかたきの世の中

「常言道」云、人為財死、鳥爲食亡、

金のされ目が縁のされ目
孝子孔子に似ず

〔和歌民のかまど〕に、孝子孔子に似す、子親に似ぬ例あり、傳へ聞同し聖の心ながらも、〔偃

言集覽〕

孝行のしたい時分に親はなし

〔孔聖全書〕に云、曾子每讀喪禮、泣下沾襟曰、往而不可還者親也、子欲養而親不待、是惟牛而祭、不如雞豕之速親存也、初吾爲利祿不及釜、尙欣然而喜者、非以爲多也、樂其速親也、既

沒之後、吾嘗南遊於楚得尊官焉、猶北面而涕泣者、非爲賤也、悲不逮吾親也、

孝行も子に依る〔世語彙〕

孝經で親の面を撲つ

〔秘藏寶輪〕諺曰、擊孝經打母頭、〔温故要畧〕妙文句に云、如人讚孝經而打擲父母、〔偃言集覽〕

○是亦論語よみの論語しらずと云ふが如し、萬卷の書を読むと雖も、孝道の一行修らざる時

は、何ぞ費ふに足らんや、不孝の罪却て書を読まざる者に十倍せり、蓋此諺ある所以なり、

孝は百行の本

〔孝經〕云、夫孝德之本也、又曰天地之性人爲貴、人之行莫大於孝〔論語〕云、孝弟也者、其爲

仁之本歟、

餓鬼の斷食

因、偃爲恭、○茲〔爲愚痴物語〕に、かきのだんじき悪女の賢者ぶり、〔偃言集覽〕

餓鬼の物をひむしがせゝる〔民のかまど〕

餓鬼の花争ひ〔世語彙〕

餓鬼の目に水見ぬす ○餓鬼の目に水〔民のかまど〕

何によらず、物を探す時、心のせくまゝに、足本にある物をも、見出す事能はずして、外を
求むるなぞに云ふ詞なり〔六波羅密經〕に云、鬼あり食水と名づく、飢渴の苦み火の如く起り
て、身を焼く故、周章て水を求むるに、困じて得る事なし、長髪目を覆ひて、河の邊を走れ
ども、水を見る事なく、漸く浮世の人の渡り行く、足の頓を急ぎ手に受て呑み、又人の父母
に手向る水の餘りを受て呑むと説けり是より出たる詞也〔故事要言〕

餓鬼も人數〔毛吹草〕同之
是は物の數にも成らぬものといへども、時あつては便となる事ありと云心也〔故事要言〕

か之部

餓鬼も千人

蛙は口からのまる〔毛吹草〕和漢古語同之

〔藤原清輔家集〕「ちかひしを思ひかへるか人しれず口から物をたもふ頃かな」〔皇朝古語〕
蛙の面に水かくるが如し〔毛吹草〕

〔吾吟我集〕「つれなきはかへるのつらにかくるてふ水くさ一度あひさつもなし」

蛙の立願〔俳言集〕引北條時分語也

蛙の行列で向ふが見ぬ〔俳言集〕

蛙の子は蛙になる

〔新井家日記〕に、信長は、底意のむごき大悪人に候、信忠の世になり候はゞと、兼て存じ暮しても、蛙の子は、魚に似て蛙になるを見れば、頼なし、〔全〕
上を學ぶ下〔毛吹草〕同之

〔孟子〕に、上有好者下必有甚焉者矣、〔左傳〕臧武仲曰、夫上之所爲民之歸也、〔後漢書〕吳王好劍客、百姓多瘡痍、楚王好細腰、宮中多餓死、〔釋尊〕○周史に稱す、文王の西伯たりし時、虞芮二國の君、田を争ふて久く決せず、乃ち相俱に周に往て、西伯に質さんとす、既に其域に入

れは耕す者は皆畔を遶り、行く者は皆道を讓る、二人懸て相謂て曰く、吾争ふ所は周人の耻る所なりと、遂に西伯に見えずして歸り、俱に其田を讓て、問田となすといへり、上其徳を修むれば、下自然と之に化す、善惡ともに影響の如し、蓋謔の意も、在上人を警むるにあるが如し、
上はよく下を見る下は上を見ず〔俳言集〕
上たる道を學んで中たる道を得

〔微書記物語〕に、予か存し侍るは、上たる道を學んで、中たる道を得ると申侍れば云々、〔全〕

上方者は氣が長い關東者は氣が早い〔全〕

髪の毛を八ッ裂にしたやう〔全〕

〔理齊隨筆〕に普阿彌と云へる者の口號とて小さきもの「髪すぢを千すぢにわりて面とりて其かげにすむ君を戀しむ」

髮結の茶筌髮〔全〕○髮結髮結はす

〔通俗編〕變古の條に云、〔淮南子説林訓〕屠者棄糞、陶者用缺盆、匠者處狹廬、今變之曰、賣油娘子水梳頭、賣肉兒郎敲骨頭、とあり皆商賈をしながら、其物を用ひぬ事なり、此謔と合へり、紙すきの手鼻、紺屋の白袴、皆同意なり

髮結の正月でゆふばかり〔全〕
髮結のねひし糾屋のあさつて〔全〕

壁に馬を乗かけたやう〔全引森幸玉山書〕○馬を壁に乗かくる（う之部参看）
壁の物言ふ世〔世語盡〕

壁に耳あり○壁に耳石に口〔皇朝古語引源經卷十九〕○壁に耳〔毛吹草〕

〔詩經小雅小弁篇〕云、君子無易言、耳屬于垣〔事文類聚後集〕戴桃元崇口箴、其畧云、多言多失、多事多害、聲繁則淫、音希則大、室本無暗、垣亦有耳、〔管子〕云、古者有二言、牆有耳伏冠在側、〔羅草〕○〔和訓栞〕に云、〔平治物語〕に「かべに耳天に口」と云ふ事ありと見ゆ、俗に人事いはし目代をおけと云ふ意、○〔博聞錄〕云、壁有耳牆有縫、と見ゆたり、

壁越し推量
風枝をならさぬ御代

〔西京雜記〕云、董仲舒云、大平之世風不搖條、〔論衡〕云、大平之世五日一風、十日一雨、風不鳴條、雨不破塊、この心を千載賞に 崇徳院御製 「ふく風も木々の枝をばならさぬと山は久しき聲ぞ聞ゆる」〔羅草〕

風は吹けども山は動かさず〔民のかまど〕
風は百病の本

〔圓機活法〕風者百病之始、清淨則内腠閉拒、雖有奇毒弗能害、故病久則傳化、上下不並良醫弗爲也

風下へ衆〔民のかまど〕
好物に崇りなし〔世語盡〕〔便言集引悔草〕

〔北山叢話下〕俗諺有好物無崇之説、蓋謂愛嗜之食多食而無害也、進園〔李笠翁閒情偶寄〕曰、平生愛食之物即可養身、不必再查本草、春秋之時並無本草、孔子性嗜葷者、即不茹葷食、不得其醫不食、皆隨性之所好、非有考據而然、孔子于葷醬二物每食不離、未聞以多致疾、可見性好之物、多食不爲崇也、但有調劑君臣之法、肉與食較、則食爲君肉爲臣、葷醬與肉較、則又肉爲君而葷醬爲臣矣、推有好之分、然君臣之位不可亂也、故怕食者可少食、世間只有限眩之藥、豈有限眩之食乎、凡食凝滯胸膈、不能消化者、強半皆所惡也、即當少食而不食、更莫李氏之言、尤得飲食之要亦可取、〔類聚名物考〕

好事門をいでず悪事千里を行く〔毛吹草〕同之

〔北夢瑣言〕に云、好事不出門、惡事行千里、〔韻草〕
好事もなきにしかじ

〔陳眉公十書多少箴〕に云、好事不如無、〔全〕〔傳家寶〕に云、庭前生瑞草、好事不如無、
好事魔を出す
陰は御門の上

此諺は、此國に主たる帝王の御身にさへ、御親の天照大神の、御めぐみの蔭を蒙り給ひ、國
を治めさせたまふ事、天の萬物を恵み、日月の光至らぬ所なきが如く、御門の上にも、宗廟
の御蔭を受嗣玉ふ、況や其外の人をや、君父の恩惠の蔭に隠れながら、其恩を思はざらんや
と云心也、大稜の詞に、天乃御蔭日の御蔭と隱坐天とあるも此意也、〔故事要言〕
陰言ははれてはなひる ○噂をいへば噂する

〔詩經那風終風篇〕云、寤言不寐、願言則嚏、註云、我甚憂悼而不能寐、汝思我心如是、我則
嚏也、今俗人嚏云、人道我、此古之遺語也、〔野客叢書〕云、隨筆曰、今人噴嚏不止者必囑
嚏祝云、有人説我、〔韻草〕
かげの形にしたがふが如し

〔太上感應編〕云、禍福無門、惟人自招、善惡之報如影隨形〔法句經〕云、福樂自追、如影隨形、
〔本朝便覽〕○〔尙書大禹謨〕に惠迪吉、從逆凶、惟影響、傳に若影之隨形響之應聲、
かげの様にやする

〔夫木抄〕印禪「日にくへてすがたぞかげになりけりやせの里なるいもを戀ふとて」〔全〕
瘡も我瘡鍋も我鍋 〔世語畫〕
瘡もさはらねば移らぬ 〔全〕
瘡わたまをかきちらしたやう
瘡としらみはかくすとふゑる
雁が飛へは水龜もじだんだふむ 〔毛吹草〕〔和漢古語〕全之

これは我身のはともしらすして、よき人のまねをなすに喩ふる諺なり、〔莊子〕に云、西施病心
而顰其里、醜人見而美之、歸亦捧心而顰、其里之富人見之、堅閉門而不出、貧人見之、挈妻子而
去之走、彼知美顰而不知顰之所以美〔韓文〕云、無鹽與西施並遊、〔本朝便覽〕○〔橘窓茶話〕に云、
以庸騷之資、遽欲慕而效之、所謂鴻鵠跳、
雁も鳩も食はねはしれぬ 〔便言集引森寺玉山書〕○雁も鴨も喰た者がしる〔民のかまど〕

雁は八百矢は三文〔毛吹草〕 ○雁は八百矢は三文〔民のかまど〕 ○雁は八百矢は一筋〔俳言集引カナ、ホシ〕

雁木にやすり

癩カサネと棒打〔民のかまど〕 ○癩と棒ちぎり〔俳言集〕

〔拾芥抄〕云、聖武天皇、施薬、悲田、の二寺を建て、施薬院は大人の病を療し、悲田寺は、小兒及乞食の病を治す、後終に乞食の寓となるよし見ゆたり、今に於て、癩病人の、親族に捨らるゝもの、般若坂に集り、往來の人に物を乞ふ、〔物類辨呼〕○〔和名抄〕に、乞兒をかたいとよみ〔伊勢物語〕に、かたい翁〔土佐日記〕に、このかちどりは日もあるはからはぬかたいなり、とあり皆人を罵る詞に用ふ、すべて乞丐人を云ふべし、今俗に癩病人を呼でかたいといふは誤なり、以上〔原草〕 ○〔愚按〕癩病人をかつたいといふは癩病人の乞食するより、相混して呼ひなせらるべし、

癩の徹カサネうらやみ ○癩のかさをがみ〔全〕

癩の子カサネでなり次第〔全〕

勝て胃の緒をしめよ〔源平盛衰記〕〔毛吹草〕〔和漢古語〕同之

何事も爲さんとする折には、深く思ひめぐらし、心留めて物するからに、誤は少なきを、成し得たる時には、心ゆるびてあやまるものなれば、さる心したらんぞ、げによろしかるべき、病のれこたりさまなるをり、今はなでふ事かわらんと、ねもひかるしめて、浴み櫛けづりなどしては、立歸り、俄に重なる事もある如し云云〔淺淵のゝるど〕 ○〔荀子〕に身貴而愈恭、家富而愈儉、勝敵而愈戒、とあり此意なり、

勝てば負ける〔俳言集引北條時分勝留〕

勝つ事よりまけぬ事を勘考せよ

〔呂子春秋〕欲勝人者、必先自勝、〔徒然草〕に双六の上手といひし人に、其手だてを問ひ侍りしかば、かたんと打つべからず、まけじと打つべき也、いづれの手か、とくまけぬべきと案じて、其手をつかはずして、一目なりとも、遅くまくべき手につくべしと云ふ、道をしれる教へ、身を修め國をたもたんだ道も、又しかなり、淺香氏の註にかたんとたれもふは、我をたのみて、敵をあなざるなり、敵をあなざれば、自然と油斷あるべし、まけじとたれもへば、敵を恐れて油斷せず、我手前を慎む理あり、

片口聞いて理をつけな ○片口聞いて公事わくるな兩を聞て下知をなせ〔和漢古語〕

是は人の争論毀譽も、片口ばかり聞きては、是非を定むるなど云ふ事也〔前漢書〕邾陽曰、偏聽生姦、獨任成亂、魏徵曰、兼聽則明、偏信則暗、是皆諺の意に通せり、〔唐書〕片腕をもがれたやう〔俳言集覽〕

〔北史薛道衡傳〕に、帝愴然曰、今爾之去、朕如斷一臂、〔唐書薛收傳〕に、帝幸東都、留元超輔太子監、手勅曰、朕留卿、若失一臂、

かたやかしてねもやどらるゝ〔毛吹草〕和漢古語〇此をかして母屋をどらるゝ

〔和訓栞〕に云、おもや、竹取物語にみゆ、母屋の義、もやとのみも云ふ、おもやの畧なり、
鐵椎論

〔世話尽〕寄椎戀「堂宮にのるひことしてうつ釘はかなづち論のりんささるかひ」〔鷹筑波〕思ひに釘の音をかへしぬる」と云句に「君と我が中はかなづち論にして」〔俳言集覽〕

鐵椎の川流れ（首のあがらぬ論）〔全〕
鐵の足駄て尋てもない〇鐵のわらじで云々とも

〔隋史遺文〕に云、踏破鐵鞋無覓處、得來全不費工夫〔全〕〇〔吾吟我集〕に「君のかたへかよふ心の道をふまはかねのわしだのはもたまるまじ」

肩のたしにも裾のたしにもならぬ

〔鷹筑波〕に「京の親類たりにころなれ」羽二重を肩つきはとももらひけり」〔俳言集覽〕
肩衣を夜の物〔毛吹草〕和漢古語〔全〕

〔清水物語〕此しまりさへあれば、國の大小に應して、大身なる人あるころよけれ、小身なる者ばかりにては、肩衣夜着とやらん歎、〔全〕〇〔尤之双紙〕せばき物の品々にかた衣をよるの物、肩て風をさる

權勢の者の人に驕る貌〔全〕〇元稹の連昌宮詞に、楊氏諸姨重戰風、と云ふも是の意なり、頭が動けば尾も動く又頭が動かねば尾が動かぬ

〔孫子〕に、卒然は常山の蛇なり、其首を撃ては尾至り、其尾を撃ては首至ると云、此語より出たり、又人の頭たる者、身を以て先たつ時は、下たる者令せずして鞠むとも云〔全〕、頭かくして尾を出す 〇本朝俚諺に「わたまかくして尻かくさす」

〔小町踊〕夏虫「頭かくし尻はかくさぬ螢かな」〔塵世〕全
頭の火を拂ふ

〔拾玉集麻離白首〕雜「朝夕にかしらの火をもはらふかなうき世のことを思ひけり」とて〔類聚

歸るには錦着てゆく〔毛吹草〕○故郷には錦をかざれ（この部参看）
歸る馬をのりかけ

〔和歌民のかまど〕「とせをわたにくらして隙の駒一夜の關を越る苦しむ」〔俳言集〕
反て獵人わなにかゝる〔全〕
歌人は貴からずして高位に交はる〔毛吹草〕

〔吾吟我集〕「歌の徳よ貴からねど鶯も高位に交る竹の園生は」
歌人は居ながら名所を知る〔全〕

〔世事百談〕に、歌人は居ながら名所をしると云ふ諺あり、ふるく云へる事と見えて、平家物語に、こゝに武藏國の住人平山の武者所すゝみ出て、すゑしげころ、此山の案内、よく存知仕て候へと申ければ、御曹子、わどのは東國そだちの者の、けふ始て見る、西國の山案内者、大に誠しからすとの給へは、すゑしげ重て申けるは、こは御ぢやうともればは候はぬものかな、吉野初瀬の花をば見ねども、歌人が知り難き敵の籠りたる、城のうしろの案内をば、剛の武者が知り候と申けるとあり、又近きものながら、豊臣勝俊の〔九州道記〕に、まことに歌人はゆ

かすして名所を知るといふ、諺にいへる如くとも見ゆ、又一條太閤〔連歌千句序〕に、歌の道なかりせば、いかにして足を動かさずして、千里のさかひをわくるへき、なども見えたり、

齊樂れ婆 又内またかうやく〔俳言集〕
齊樂武者（敵にも身方にもつくと云ふ事）〔全〕
渴にのろみて俄に井をほる ○渴にのろみて井をほる〔毛吹草〕〔和漢古塵〕

〔素問四氣調神大論〕云、譬猶渴而穿井〔說苑雜言篇〕譬之猶渴而穿井〔醫草〕○（S之部）
見て矢はぐの條参看）
渴しても盗泉を喰はず〔俳言集〕

〔家語〕云、孔子忍渴於盗泉〔陸機の詩〕に渴不飲盗泉水、熱不息惡木蔭、
枯木も山のにぎはひ〔和漢古塵〕○枯木も山のかざり〔毛吹草〕
枯木にも花さく ○枯木に花

〔易大過象傳〕云、枯楊生華何可久也〔文選魏曹植文〕辨言之絶、使窮澤生流枯木發榮〔續博物志〕昔有一人、好道而不知求道之方、唯朝夕拜跪、向一枯樹報云、乞長生、如此二十八年不倦、枯木一旦忽然生華、華又有汁甜如蜜、有人教令食之、遂取此華及汁並食之、食訖即仙、

形は産めども心は産まず。〔毛吹草〕〔和漢古語〕〔漢開大和故事〕
形見の雲形見の雨。

〔和訓栞〕に、かたみの雲かたみの雨は、巫山神女のご事也、〔傳言集〕
堅石避醉人〔古事記中應神天皇〕

〔袋草紙〕に、夜行途中誦文の歌に「かたしはやわかせくりにくめる酒手醉足醉我醉にけり」
これは〔古事記〕に諺曰「堅石避醉人也」といへるによれる歌なるへし、今も俗諺に「のけて
通せ酒のるひ」といふめる、せくりにけりはすくりにけり也、知釀酒人也と古事記に見ゆ、くめるも
すくりにかめるの轉訛せるなるべし〔和訓栞〕

堅まり法華に徒黨門徒〔傳言集〕
かはゆい子はうて〔世語〕

〔明心寶鑑〕云、嚴父出孝子、嚴母出巧女、〔李義山雜纂〕不得已條に、忍意打兒女、〔愚按〕諺
の意は甘やかさぬにあり、敢て笞撻せよと云にあらす、家語にも、鞭朴之子不從父之教、刑
戮之民不從君之政、といへり、嚴なるも、思をうこなふに至らざるを要とすへし、
かはゆいあまつて憎と百倍〔傳言集〕

蟹は甲に似せて穴をほる〔毛吹草〕同之

此は人の爲す事、願ふ事、大小廣狹、皆已か分はとなるを云ふ、是に類せる事あり、〔事文類
聚後集〕云、有客相從、各言所志、或願揚州刺史、或願多資財、或願騎鶴上昇、其一人曰、腰纏

十萬貫、騎鶴上揚州欲兼二者矣、〔塵草〕

蟹の爪もがれたやう〔傳言集〕

蟹の死狭み〔民のかまど〕

蟹は死しても、其狭みたる物を放さぬといへり、
癢き所に手の届くが如し。

〔杜牧之詩〕云、杜詩韓集愁來讀、似倩麻姑癢所抓〔塵草〕○〔常語叢〕麻姑方平之妹也、其手似鳥

爪、蔡經以爲背痒以麻姑之手搔之則佳也、

かゆき所に手のとどかぬが如し〔毛吹草〕同之

〔唐詩評〕云、詩不著題、如隔靴搔痒、〔續燈錄〕云、上堂更或拈拂拭床、大似隔靴抓癢〔無

門關〕云、抑棒打月、隔靴爬痒、〔本朝傳〕

鐘も撞木のあたりから〔傳言集〕

〔文選〕に以筵撞鐘、響終不可發、と見ゆ、
鐘鏘るまでの土鏘形

顔に似ぬころ〔毛吹草〕

〔家語〕孔子曰、以貌取人吾失之子羽、子羽は澹臺滅明也、貌あしくて行よろし、故に宣へり、又〔班固漢書贊〕に、人面獸心の語あり、是は小人姦吏は、顔へ人なから、心は獸の如しと云事なり云々、〔蘇草〕

顔のあつきもの

不義不善をなしても、耻る事をしらざるものを云、〔開元遺事〕に、揚光遠か、其身の醜惡を耻さる事を、時の人ろしりて、揚光か悪顔は、あつき事十重の鐵甲の如しと云へり、諺に相類せり、〔全〕○〔書の五子之歌〕に顔厚有恇悒〔詩の小雅〕に顔之厚矣、諺これらの語に本づけり

剃刀にさやなし

〔さ〕のふはけふの物語〔昔よりかみそりにさやなしとやらん云々〕〔俚言集〕

剃刀の刃をわたる 又〔刀の刃をわたる〕又〔劍の刃をわたる〕〔全〕

蚊の脚に巢をくふ虫〔全〕

蚊の目に山椒の紋所〔全引鳥籠物語〕

睡て巾着を截るやう〔全〕

睡が茶をわかす〔全〕

家老と雪隠へは行かねはならぬ 又ゆくかよとも〔全〕

家内和合が福神祭り

家内不和合は貧乏神の宿

驅くるも引くも折による〔太平記補出張天王寺〕〔毛吹草〕〔和漢古語〕

かけ馬に鞭〔毛吹草〕 ○駈る駒にも鞭

〔吾吟我集〕「強き方に助言いひぬる將菜ころかける馬にもむちとしらるれ」

甘露の日より〔全〕

甘草丸呑〔世語〕 ○胡椒丸呑とも云〔こ之部参看〕

かくの前に書きたる〔毛吹草〕〔和漢古語〕

かくやにて聲をからす〔和漢古語〕 ○樂屋で聲〔民のかまど〕

樂屋からはめる
寶刀主を擇ぶ

德なく位なきもの、若し名刀を佩ふれば、其身に害ありと云へり、〔事文類聚續集〕云、徐州

刺史呂虔、檄王祥爲別駕、有佩刀工者相之以爲三公之器、虔謂祥曰、苟非其人或爲害、卿有

公輔之量、故以相與、位至太保、臨薨以刀授弟覽曰、汝後必興、〔世說故事〕

刀は男の魂

鏡は女の魂

鏡は災難を除ふ

俗に鏡を見れば、其日の災を免ると云、是れ殷仲文に本つけるなるべし、〔晉書列傳六十九〕

に晋の殷仲文、毎日鏡を照して覩る嘗て暇なくして、三日鏡を見ざれば、禍起りて誅せらる

と見へたり、又〔抱朴子内篇四〕に明鏡の邪魅を穢ふことを説き〔五雜俎十二〕に、古鏡の邪魅

を辟け、火災を攘ふことを出す、又〔陸粲庚己編〕を引て、古鏡を照して瘧鬼を去りし事を出

せり、〔世說故事〕

邯鄲の夢〔本朝傳〕 ○邯鄲の枕

〔李泌枕中記〕開元十九年、道者呂翁、于邯鄲邸舍中、值少年盧生、自嘆其困、翁操囊中枕、

授之曰、此當令子榮適如意、生于寐中娶清河崔氏女、舉進士登甲科、官河西隴右節度使、破

戎虜開地九百里、勅石紀功、尋拜中書侍郎同中書門下平章事、掌大政十年、封趙國公、有子

五孫十餘人中兩顯貴表、再登鼎鉉、三十餘年出入中外、崇盛無比、老乞骸骨、不許卒于官、

欠伸而寤、初主人蒸黃梁爲饌、時尚未熟也、呂翁笑謂曰、人世之事亦猶是矣、生曰此先生所

以窒吾欲也、敢不受教、再拜從而去、

邯鄲にあゆみをうしなふ

〔莊子秋水篇〕云、子獨不聞夫壽陵餘子之學行於邯鄲與、未得國能又失其故行矣、〔此事後漢書班

固傳、及抱朴子にも見ゆたり、〔全〕○邯鄲は趙國の首都にして、歩行の様子も自然にみやび

やかなる故、是を學ぶと見ゆたり、此諺は學問の成らざるにいへり、

紙子の水かけあひ〔世語〕

紙子着て川たち〔民のかまど〕○紙子着て川へはいる又紙子着て川へはいらうどかまはぬ〔便言集

〕

紙子にも襟祝ひ〔全〕

雷臍をぬく

雷が臍を取るといひて、小兒などを警むるは、雷霆の時は、俯伏する者は死せず、仰仆する者は必ず死するによりてなり、失火の烟たちこめて、息をつき難き時は、土を紙れと云も同じをしへなり、「筆のすまひ」

雷に梅雨あく

かしこさが子はかしこからず

〔愚管抄卷三〕賢が子は賢ならずとこそいへ、〔皇朝古語〕

かしこからずが水田に子をうむ

籠の中の鳥

人に制せられて、我身の、吾思ふ儘にならぬを云、漢陽傳か詩に、爲坐籠中苦、空懷樹上嬉、

と云意也〔故事警言〕

籠にて水を汲む

高木は風に折らる

高野六十那智八十

是は男色の事のやうに世にいへど、左にはあらず、高野の紙谷と云ふ所より漉き出せる紙は、

壹帖六十枚なり、今浪花に専ら傘を張る紙なり、又熊野牟婁郡小塚村より、漉き出す紙は壹

帖八十枚なり、依て斯くいへり、後に之に類せし紙を、吉野國栖字陀那より出す、皆高野に

摸寫せし故、何れも六十枚壹帖と定む、大体奉書、杉原、美濃の類、壹帖八十八枚とす、然る

を後世利にさどく、唯見聞をよろしくして、利を謀るか故、片折半紙の類、又省畧して、四

十枚を壹帖とせり、按するに、片といひ、半といふもの、皆八十枚壹帖を、省畧せし名なる

へきか、〔橋庵漫筆〕

高野ひじりに宿かすな

鴨の足はつがれぬ

〔莊子外篇駢拇〕長者不爲有餘、短者不爲不足、是故、免胄雖短絙之則憂、鶴胫雖長斷之則悲、

故性長非所斷、性短非所續、無所去憂也

鴨寒うして水に入る

かへし矢おろるへし

〔日本書紀二〕天照大神、天稚彦に勅して、豐葦原、中國を平げしめ、天鹿兒弓、天真鹿兒

矢を授け賜ふ、天稚彦勅を受けて下降し、八年を經れども復命せず、依て天神カミコを使はして之を窺はしむ、天稚彦之を射る、其矢雉の胸をとほして、遂に天神の御許に至る其段に云、天神見其矢曰、此昔我賜天稚彦之矢也、今何故來、乃取矢而呪之曰、若以惡心射者則天稚彦必當遭害、若以平心射者則當無恙、因遠投之、即其矢落下中于天稚彦之高胸タカムネ、因以立死、此世人所謂返矢可畏之緣也、
かみつけの馬かどひ

かどふとは〔新撰字鏡〕に詠をよめり、折曲なりと見えたり、後撰正義に勾引也といへり、今人を勾引するを、かどはかすと云是也、略人も同じ〔後撰某〕に「山風の花の香かどふ」といへるは、韋莊か詩に、勾引花枝笑凭牆、といへる意なるへし、〔和訓栞〕門脇の姫にも用あり〔毛吹草〕同之

〔清少納言枕草紙〕物の哀知らせ顔なる物と云條に、師走の十四日に雪最高う降たるを、仰せ事にて、主殿司の人官司など参りて、庭に雪の山を造らせられしが、是いつまで有りなんと仰られしに、餘の女房達は、只十餘日はあらんと啓せしに、清少納言は、獨此雪ムツキ呢月の十五日迄は候ひなんと、啓しけるまゝに、同じくは言ひあてたくて、木守といふて、御庭の木

どもを造る役のいやしと者、御筑地のはとに、庇さし掛て居たるを呼て、此雪の山いみしく守りて、童などにふみちらさせずして、十五日まで侍らせよと、くれ〜頼みたる事あり云々、〔故事要言〕
かすがひ思案

右の事も左の事も、はづさぬ思案と云、〔和字正鑑抄〕に「鑑」カヌガヒ、〔催馬樂〕にいへるは今のかむかね也、〔俳言集覽〕
學者の不行儀 ○學者の不身持

〔淮南脩務篇〕に儒有邪辞者云云〔全〕
かせぐに追ひ付く貪乏なし〔毛吹草〕同之

〔左傳〕云、民生在勤、勤則不匱〔說苑〕云力勝負、謹勝禍、〔禮記〕
かさにも物の盛がら〔民のかまど〕（かさは椀蓋の類にて淺き器）
瓦も磨けは玉となる〔毛吹草〕

〔實語教〕に玉不磨無光、無光爲石瓦、と云に同じ心なり、人生れなからにして、賢人となる事なし、學問の功を積みてころ、智慧の光も出るなれ、但玉も磨かざれば瓦に同じと云ふべ

きを、後人俚語の顛倒なり、〔故事要言〕

皮を引けば身がわがる。又皮を引けば身が痛む。〔俚言集覽〕

飼犬に足をくはる。〔和漢古語〕○飼犬に手をかまると

かひかふ虫に手をくはる。〔毛吹草〕

蝸牛のからたき

蝸牛、兩角を扣きて聲をなすと云ふ、早の時にある事なりといへり、〔和訓栞〕

かてゝ加へて又かてゝませ

〔和訓栞〕にかてる日本紀に交をよみ、物類稱呼に雜るをよめり、

鶴の一啄鶴の一はね

鶴和名カフ、假字未考、案するに中國にて鶴をカフツルと云ひ、又ツルとも云ふ、〔漢音阿彌陀經〕に白鶴傍假字カフとわれは鶴の音をもて、和名をせる歟、鶴音洞、〔俚言集覽〕○〔愚案〕

〔新選和訓部類〕に鶴水鳥似鶴巢樹者也と見ゆ、蓋同類ならん、因に記す〔梅村載筆〕云、信長

の時、佐々氏といへる鷹師あり、鷹を放て、鶴の鳥を取、其後又出獵する時に、雲中に鶴の

鳥舞翔る、佐々氏仰て見れども分明ならず、鷹をすゑながら、編笠をぬきて、空を急度見た

れば、鶴の鳥真直に飛下りて、佐々氏か鼻を、啄を以てつきさきたり、佐々氏鷹を捨鶴の鳥

をつかんで捕といへども、其鼻欠たる故に、遂に鼻くさりて死けり、先に捕ける鳥と雌雄な

りけるにや、畜類なれども、仇を報る志、却て人倫にまされり、されは鶴の鳥の啄は強くし

て、其怒るときは、鉄八枚をつき通すと傳へたり云々、

偕老同穴の契

〔詩經擊鼓篇〕 死生契濶、與子成說、執子之手與子偕老、又〔大車篇〕 歿則異室、死則同穴

前の偕老は貞女の道なり、後の同穴は男女淫奔の詩なり、諺に偕老同穴とつゞくるは、相應

せず、〔醫方〕○〔吾吟我集〕に「かいらうとなきて妻とふ小男鹿のよりあふ山のはらや同穴」

剛者に矢たらず〔世話集〕

胃をぬきて降参する

人の美事に伏すを喻へて云、〔書言故事〕に、樹降旗豎降旛〔風俗文選〕瓢辭「胃にもならては

てたるふくべ哉」云々、此男のにくさに、わざと返しとはなくて「かまきりに降参したる

くべ哉」〔俚言集覽〕

かなはぬ時の神たのみ又「かなはぬ時の神扣き」又「せつない時の神たのみ」〔せ之部参看〕〔全

か之部

二百十五

郷に入つては郷にしたがへ。○郷に居ては郷に従へ。〔毛吹草〕

〔曲禮〕云、禮從宜、使從俗、又云、入竟而問禁、入國而問俗、〔禮記〕○〔莊子〕云、且吾聞諸夫子、曰、入其俗從其俗、〔淮南子〕云、入其國不從其俗、入其家者避其諱、〔風俗通〕云、禹入裸國欣起解衣、

鑰の穴から天をのぞく。〔毛吹草〕同之。○管の穴から天をのぞく。○葭のすゐから天をのぞく。○針のみすから天をのぞく。

〔莊子〕云、用管窺天、用錐指地、不亦小平乎。〔說花〕云、以管窺天、以針刺地所窺者甚大、所見者甚少、〔全〕

鹿島發の義、首途をかくいふは、鹿島香取の明神は、天孫降臨の時に、先往て葦原の中國を、平けたまふ故事による詞なるべし、〔万葉集〕に「われれふりかしまの神をいのりつゝすめらみくさに我はさにしを」又〔北山抄〕に二月上申日、春日祭事、同日鹿島使立事、と見えたれば、春日の祭の頃、鹿島は遠國にて、使も先早く發遣するをもて、いひ出したる謬にや、春日社も鹿島神を第一とす、〔和訓栞〕

鍛冶の晩げ。〔紺屋のあさつてと同意〕〔俚言集〕

釜の前の三助。〔此釜は籠の事をいふ〕〔全〕

かふ張高くて家はたす。全。○かう張強くて家倒す。〔全訂北條時宗傳〕民のかまど。○かふばりつよくて家倒す。〔世語基〕

〔吾吟我集〕に「ひらかせてちる迄ふれる花の雨はかふばりつよき家櫻哉」〔愚按〕かふ張は勾張なるべし、勾音コウなれば呼聲の似たるを以て、かふ又はかうに訛りしならん、

〔玉泉子〕蝠蝠不自見、笑他梁上燕

宦將軍。〔毛吹草〕同之

何の辨へも會釋もなく、無智無材にして、生れたる儘の心任せに、諸事を取行ひ、常に我家に居て、妻子や下人を、氣儘に遣ひたる格を以て、他の貴人の前に出ても、放いまゝなるをいふ也、〔通鑑綱目〕に云、劉聖公、趙萌が女を納て后とす、寵愛の餘りに、趙萌を以て、國の政を關り聞かしむ、或夜趙萌家人を集めて、後庭に宴す、群臣事の奏すべきあつて、萌にまみゑんと乞ふ、時に萌出て群臣を見たれども、大いに酔て事を聞く事能はず、只末座に居たる、小

膳夫の料理人まで、濫に官爵を授けたり、其頃長安の諺に、宦下養中郎將、爛羊胃騎都尉、など云ひしと也、中郎將は日本の近衛の中將にして、將軍の屬官なれば、是より出たる語なり、〔故事叢書〕

宦の神はお荒神〔民のかまど〕
庚申の夜の俗歌

〔武徳編年集成十一〕元龜元庚午の年十二月十六日、信長佐和山の城邊、磯野郷に至り、丹羽長秀水野信元に對顔し、今度の和睦は、庚申の夜の俗歌と思ふべしとのたまふ、是れ和睦せぬが如しといふ心なり、〔類聚名物考〕
厠にて始めて杜鵑を聞くを思ひ

〔閑談筆記上〕或問云、世の人皆厠に行き始めて杜鵑を聞くをいひ、思ひへさや否や、余か曰、但本朝のみならず、唐の時段威式が〔酉陽雜俎〕云、厠上に杜鵑を聞くと不祥也、法當に大聲に之に應ずる事をなすべしといへり、〔全〕
かなしき時は身ひとつ〔毛吹草〕
辛き膽をつぶす〔十訓抄〕

かゝり者未とげず〔俳言集〕
可もなく不可もなし〔論語に出づ〕
看板に偽りなし〔風來山人六々部集〕○看板に隠れなし
勘定合ふて錢足らず
かみあふ犬は呼びがたし
甲州べいと牛の糞には油断するな
寒の師走も日の六月も〔日一に暑とも云ふ〕
怨に乗る人擔ぐ人

◎よ之部

世みじかく意多し

〔鶴林玉露〕古詩云、人生不滿百、常懷千歲憂、淵明以五字盡之、曰世短意常多、是也、東坡曰、意長日月促、倒用陶詩〔塵草〕
世はもとしのび〔毛吹草〕同之

〔爲家々集〕「何事もふるき世のみぞしたはしきおもひわはするけふぞかなしき」〔新古今〕

成「行末は我をもしのぶ人やあらんひかしをおもふ心ならひに」〔全〕

世は七さがり七あがり〔毛吹草〕和漢古歌

世の取沙汰はにんにいはせよ〔毛吹草〕○世の取沙汰は七十五日

世は人の持ちにあらす道理の持ちなり〔俳言集引活版盛衰記世四〕

世を捨つれども身を捨てず〔全訂平家物語三日本氏〕

世は千年の畜ひ〔俳言集覽〕

世の中は九分が十分〔全〕

〔晋書羊祜傳〕祜歎、天下不如意、恒十居七八〔陸放翁詩〕不如意事常八九、可與人言無二三、

世の中はいばあひもち

世の中はまはりもち

世の中流れ渡り

〔蓮月の歌集〕に、「よしや世を流れて渡るみづからもにこらぬかたにすまんどぞおもふ」

よきたくみもおきし刀さびなきにあらず

俗に上手の手より水のもる、又弘法にも筆のあやまりといふに近し〔古本今昔物語卷十二〕十

六條吉工といへども、指し刀鏽無きにあらず、吉工繪師といへども、丹の色に必ず谷あり、

〔皇朝古歌〕

よき繪師も丹の色に谷あり〔全〕

よき佛師もそのつまつさあり

〔水鏡文武〕たどひよき佛子にあひたまふども、そのつまつさあること、〔全〕

よき中には垣をする〔世語〕○よき中は垣をせよ、又親しき中に垣をせよ〔俳言集覽〕

〔省心雜言〕隣里欲高牆、親情欲遠方、

よき中の小さいかひ、又おもふが中のいさかひ〔俳言集覽〕

よき事ニツなし〔全〕

よきもあしきも七十五日〔全〕

よくのるものは馬より落つ〔和漢古歌〕（川立は川てはつるの條參看）

よをないものにはんなし〔毛吹草〕○用ないものにはんなし〔俳言集覽〕

夜目遠目傘の中〔毛吹草〕〔大和故事〕同之

〔倭訓栞〕に、夜目遠目笠の中といへる諺は、歐陽公詩に、紅粉尤宜燭下看」と見え〔袖中錦〕に

牆上、馬上、旅中、醉中、日中、月下、簾下、と見ゆたり〔小町踊〕チラシ、月「夜目遠目傘の内よし月のかけ」〔俚言集覽〕「大進夜語」に云、夜目遠目笠の内とは、物の色形、さたかに届かぬ故、さつと見ては、美しく見ゆるを云、兼好なをも、夜の物に艶ありて、見好ましき由をかゝれたり、云々、

夜長ければ夢みる〔俚言集覽引北條時分御草〕

夜道川寸馬鹿がする〔全〕

夜うつつぶて〔毛吹草〕〔和漢古語〕

夜の明けたるが如し〔全〕

夜聲八丁さゝやき八丁〔和漢古語〕

夜が明けたら巢をつくらう

俗に鷓鴣の聲なりといへり、鷓鴣如此に鳴けども、夜明くれば己が目見えぬ故、巢を作ることをならず、因て懈怠の人の喩とす、〔俚言集覽〕

夜道に日か暮れず

弱さものを夫にとる〔毛吹草〕〔和漢古語〕〔大和故事〕同之

智の人に勝れ、又は力の他に倍り、藝の人に秀でたるを憑んで、他の劣れる者を輕侮し、我が手下に付るやうの意を云ふ、〔故事要言〕○〔吾吟我集〕弱さものを夫にとるならひ秋風に分て柳の一片をそふく

弱き家につよき勾張〔毛吹草〕〔世語盡〕

弱馬道をいろぐ〔毛吹草〕

弱みの靈怪〔世語盡〕〔大和故事〕〔故事要言〕さそ ○弱みの怨靈〔俚言集覽〕

性怯懦なる者は、物に怖るゝを以て、妖魅ついひに乗り、狐狸之を誑かすを云ふ、〔鷹筑波〕「散

花に雨は弱みの靈怪哉」

よわめの水

弱き者を相手にする事に云へり、〔盛衰記卷四〕京都が、弱目の水とか笑ひ申さん事をは、争

でか可無御憚、〔皇朝古語〕

よわり目にたゝり目〔俚言集覽〕

弱いものいぢめ〔全〕

慾にいたゞきな〔毛吹草〕〔和漢古語〕○慾にはうづなし

〔吾吟我集〕もらさじと花をたづぬる山々のいたさきもなきよくの道哉
慾の山のいたさきを見ず

〔日本靈異記中卷 卅八丁〕雖見須彌、不得見欲山頂者、其斯謂之矣、〔皇朝古歴〕
慾の角鷹保をさく〔世語〕○慾のくまだかまたさくる〔毛吹草〕〔和漢古歴〕○慾の深い鷹は爪がぬける

昔一鵬あり、二猪兒の在るを見て、同時に之を獲んと欲し、兩手の爪を鋭くして二猪を攫む、
二猪忽左右に跳り去る、爲に其保を兩斷せられたりと、此話より出たる諺なり、
欲の釣針にかゝる

〔維摩經〕云或現作姪女、引諸好色者、以欲釣率後令入佛智〔本朝傳〕
欲には目見えす ○欲にふける者は目みえず〔和漢古歴〕○欲に目なし

〔呂氏春秋〕云、齊人有欲得金者、清旦被衣冠往鬻金者之所見人操金、攫而奪之、吏搏而束縛之、問曰、人皆在焉、子攫人之金何故、對吏曰、殊不見人、徒見金耳、〔省心鈔要〕云、攫金於市者、欲心勝而不知有羞惡、求珠於淵者、利心專而不顧其沉溺〔全〕
よくなしものゝ煮ぶくれ〔傳言集〕

慾のない者には鬪が當る
婦が姑になる〔毛吹草〕同之

〔學範〕古詩云、人命百年能幾何、後來新婦今爲婆、〔讀草〕○〔尤之双紙〕はやき物の品々に、
よめがしうどめになるそはどなき、〔傳言集〕に云、又姑の柔懦にして、媳の悍なるを、媳か姑とも云、

嫁姑の中よきは物性のふしぎ〔毛吹草〕○ふしぎに「中」に作る

〔莊子外物篇〕云、室無空虛、婦姑勃谿と、勃谿とは相争ふなり、古來婦姑の和せざるを言ふも
の多し、皆下賤の情弊を指摘して、之を矯正するの意に外ならざるへし、

媳と姑も七十五日〔傳言集〕

媳と名か付けば我が子もにくし〔全〕

媳の三日ばめ全

用心は臆病にせよ〔和漢古歴〕〔讀草〕同之

頼朝賜佐々木定綱狀に云、ふるま物語に云ひ傳たへるは、多田攝津守殿のもとに、四天王とて
聞へたる、れのことものの中に、公時といふ、おのつから智ありて宗としける、綱といふは、新

参にてあるが、公時に、心の剛になるやうを、をしえよといひければ、公時か返答に、心の剛をならはんとおもはし、臆病をならへといひたれば、綱むねをひらきけり、此事をおもひつゝくれは、いみじき才學にてあるなり、かならずしも臆病になれとは、をしへもせず、心ながく案じはからへと、用心をよくせよといへる心也、たゞうちある事たにも、大事をおもひはからひたるものは、物どがめをせず、事にならぬ事は、事になすとといふるか、と「詞不可疑」に見ゆ、「新編古今集」に佛國禪師「折えても心ゆるすな山櫻さそふあらしの有もこそすれ」是れ用心をよくせよといふころなり、世俗「やき鳥にもへをうつけよ」といへるも是なり「本朝俚言」

用心は前にあり「俚言集覽」

「詩鴟鴞篇」迨天之未陰雨、徹彼桑土綯繆戶、用心に繩を張れ「大和故事」民のかまど同之

是は物毎に、約やかに氣を付て、何の用もなき所までも、常に心を配る事、繩を以て綱とするか如く、せよとの意也、「著聞集」に云、西行法師、出家になりしより前は、徳大寺左大臣の家人にて侍りけり、他年修行の後、都に歸りて、年比の主君にて御坐す昵しさに、後徳大

寺左大臣の御許に参りて、先門外より内を見入れれば、寢殿の棟に、繩を引けり、怪くて人に尋ければ、あれは齋居るとして張られたりと、答へしを聞て、齋の居たらん何か苦しきとて、恨ける由あるを、兼好「徒然草」に引て、綾小路の宮の小坂殿の、棟に繩を張られしは、池の蛙を、鴉に取らせしとの、用意なる由を斷りたり、此の二つの文章より出たる詞也、「故事要言」用心に城口びす「俚言集覽」

用ある時の地藏顔用なき時の閻魔顔 全引「北條時分野記」

横紙さくが如し「毛吹草」同之 ○横紙やぶり

「源平盛衰記」に大臣盛のうせたまひぬるは、平家の運つきたるのみにあらず、爲世爲人にもあしかるべし、入道盛の横紙を破りたまふをも、なだめられしかばこそ、かくしてもありつるに、「本朝俚言」

横座辨慶（大坂の諺）「俚言集覽」○居辨慶

横に車 又横に車は押されぬ「全」

横の棒を豎にもせぬ（棒一に物に作る）

喜びの眉をひらく「毛吹草」和漢古語

喜びの中のなげき〔世話話〕○喜びの中の憂ひ〔俳言集引梅菜記〕
喜んで尻餅をつく〔俳言集〕

人生の過敗は、得意の時に多し、故に歡喜極まる時に在ては、其情を矯め、萬事抑損せされは、却て頓挫するをいふなり、

宵越しの金はつかはぬ〔全〕〔江戸ツ子の驕奢の有様〕

宵ばりの朝寝坊〔全〕

霞のすゐから天井を見る〔世話話〕

讀み書き算盤は男の一藝（一藝は第一のわざと云ふ意）

◎た之部

大名は大耳〔毛吹草同之〕○大名の大耳〔和漢古語〕

東方朔が答客難云、冕而前旒、所以蔽明、黈纆充耳所以塞聰（張平子東京賦）夫君人者、黈纆塞耳、薛綜註云、言以黃綿大如丸、懸冠兩邊當耳、不欲妄聞不急之言也、〔慎子〕云、不聽不明不能爲王、不聾不聵不能爲公、是皆大名は大耳と云意也、〔嚴尊〕○大耳とは、大目に見ると云に同じ、聞ても聞かぬふりをすへしと也、〔毛吹草〕に大名も大耳はせじ郭公〔案内者〕に

正月十五日左義長「大耳は大名竹やなぎつちやう」〔俳言集〕
大名の一人子

〔枕草紙〕用らるゝ物の品々に、鳥なき里のかははり大名のひとり子、〔俳言集〕

大名の懐兒のやう〔全〕

大名の火にくばつたやう〔全〕○大名火にくばる〔民のかまど〕

大名は地獄の下積〔全〕

大物はつりどり〔毛吹草同之〕

此諺は、萬の事、功を積み、久を経て成就すべし、速には成がたしと、いはんが爲に、大なるものは、少つゝはつりとれとは云ふ也、〔枚乗書〕に云、泰山雷穿石、彈極之繩斷幹、水非石之鑽、索非木之鋸、漸磨使之然也、是も久しく積て、自然に成るの喩也、〔嚴尊〕
大海は塵をえらばず〔毛吹草同之〕

〔戰國策〕李斯上書云、大山不讓土壤、故能成其大、河海不擇細流、故能就其深、〔全〕
大海を手にてせく○大海を手でせく如し〔毛吹草〕○大海を手でふせく〔本朝偉談〕

〔前漢書何武傳〕云、以一簣障江河、用沒其身、〔東坡詩集〕註云、諺有側手障黃河之語〔類書纂〕

要云、張徳曰、以一掌握江河〔蘇草〕○李鄴が李斯傳を讀む時に云欺暗常不然、欺明當自毀、

難將一人手、掩得天下目、諺此意に通すべし、
大海の一滴〔毛吹草〕○大海の一滴九牛の一毛〔和漢古語〕
大海は屍をとどめず

〔涅槃經〕に、大海の八不思議を説けり、其第七に大海不宿死屍とあり、
大行は細謹を顧みず

〔史記項羽記〕樊噲曰、大行不顧細謹、大禮不辭小讓、〔蘇草〕○〔愚按〕是は鴻門の會に於て、
樊噲が、一時變に處する權畧の語にして、常人の漫に引用すべき語にあらす、〔尙書旅旅〕に
云、不矜細行、終累大徳、〔陸賈新語〕に垂大名於萬世者、必先行之於纖微之事と、是不易の常
經なり、

大事は小事より起る〔毛吹草〕同之

〔老子〕に天下大事必作於細〔學友抄〕大事起小事、積家致過言、〔俳言集覽〕
大事の前の小事

何によらず大事を思ひ立たんには、必ず小なる用を缺くべしとの心なり、〔故事要言〕○論語に

云、見小利則大事不成と、其意相近し、

大をいけて小の虫をころせ〔毛吹草〕○小の虫をころして大の虫をたすけよ
大は小をかねる ○大は小をかねゆる〔毛吹草〕〔和漢古語〕

〔春秋繁露〕度制に、夫已有大者兼小者、〔俳言集覽〕
大隠は市に隠る

〔文選〕晋王康瑤、反招隱詩云、小隱隱陵藪、大隱隱朝市、〔蘇草〕
大富長者

俗に大に富める人をいふ、諸國に長者屋敷の跡とてあり、昔富農大賈の徒の、居たりし宅址
ならし、〔神相編〕に、手仇如顛瓦、必作大富長者、大富人を長者と云ふ事、佛書に見えたり、
〔全〕

大木一本のよはみは小木千本の痛みとなる〔俳言集覽引養輪草紙〕

大木の下に小木ろだつ〔俳言集覽〕
大丈夫かねのわきざし〔全〕

大敵を欺き小敵を畏れよ ○大敵とて畏るゝな小敵とて侮るな

〔太平記〕楠公出張天王寺に、大敵を見ては欺き小敵を見ては畏れよ〔全〕
大欲は無欲に似たり〔全〕

貪慾の徒は必ず非行を爲し、動もすれば一身一家を亡はすに至り、終に益する所なきを云ふなるべし、

大孝は孝ならず

此に孝ならずとは、孝の如くに見えぬをいふ、例へば小松内大臣が、父清盛を直諫するに、兵馬を徴したるが如し、孝は父母を愛敬し、其志を養ふの常經より見る時は、孝と爲し難し、然れども父をして不義に陥らしむるは不孝なり、直諫以て之を濟ふは、孝の大なるものなり、是も父子變に處するの、權道をいふなるべし、

大智は智ならず

是も前と語勢相同し、例へば大石良雄の如き大智の人も、君家に事なき以前は、愚かの如く見えしと云ふ〔老子〕に上徳不徳又大巧如拙、大辯如訥又大直如曲等の語あり、皆同一文法なり、推て知るべし、

大義親を滅す

〔左傳隱公四年〕君子曰、石碯純臣也、惡州吁而厚與焉、大義滅親、其是之謂乎とあり、此謔は漢土の古語と見えたり、州吁は衛の君莊公の子なり、莊公の嫡子を桓公といふ、州吁驕りて兵を好む、莊公死し、州吁軍を起して、兄の桓公を殺す、諸侯州吁を討す、州吁恐れて陳に走る、衛の大臣に石碯と云ふ者あり、其子石厚、州吁と共に陳に行く、石碯陳に人を遣はし云ひけるは、州吁石厚の二人は、我君を弑する罪人なり、我老て力及ばず、陳の國人謀て之を討てど、陳人州吁を殺す、石碯使者を遣はし石厚を殺せり、君子之を賛して曰、石碯は貳心なき忠直の臣なり、州吁を討して我子をも殺せり、君臣の大義を守りて、父子の私を顧みず、是古語に、大義には親を滅はすと云へる義に合へりと、〔愚按〕親は「しん」とよみて、親族の義なり、親を「おや」とよみて、父母の事と思ふは僻事なり、父母假令大罪ありども、子として父母をせむるの義古今必なき事なり、父母も親族なれども、此には眞屬親を主して言へり、彼の楠公父子の、舉族國難に徇するが如き、明の方孝孺の、反賊燕楮に屈せずして、宗族八百餘人を面前に殺され、遂に九族を滅せしが如きは、實に大義親を滅すの標準と爲すへきなり、

大食は命の取越又大食短命

〔備庵筆記〕有一士人頗事攝生、每食減其量、令不至腹飽、嘗以語某侯厨人、厨人連稱善、士人詰之、厨人曰、吾在厨中宰鳥多矣、凡衆鳥腸胃每滿、獨鶴常虛、所食者未嘗盈半、所以保壽者由是也、故云然、〔古處堂漫筆〕同 ○〔愚按〕小食の長壽を保つを見れば、大食の短命なるは理の當に然るべき所なり、蓋仙術に辟穀を以て第一とする所以なり、
寶は主よ、

〔空物語藤原君卷〕寶は、持主をえりさらひするをいふなり、〔皇朝古傳〕

寶は國のわたり物、〔俳言集覺引爲愚痴物語〕

寶は身の仇、〔全引北條時分隱世〕

寶をすりにあづくる

〔性理大全〕朱子曰、是猶家有明月之珠夜光之璧、委之衢路之側盜賊之衝也、〔本朝傳〕
寶の山に入てひなしく歸る、〔毛吹草〕〔隱草〕

〔三代實錄卷六〕中納言伴宿禰善男、奏狀云、悲寶山之徒歸、痛刀林之永割、〔正法念經〕閻羅王爲人說偈曰、汝得人身不修道、如入寶山空手歸、〔虛齋四書蒙引〕所謂入寶山空手回者也、〔五雜俎〕謝肇淛曰、余在燕都四度燈市日、以遊戲欲覓一古書古畫、竟不可得、真入寶山而空手

却回、良以自笑也、

寶は身のさしおはせ、〔毛吹草〕〔和漢古傳〕

〔吾吟我集〕「代かへてめいをつぎぬる腰刀けにと寶は身のさしおはせ」

寶の持腐り、〔俳言集〕

たからは國の本又たからは國の命

〔漢書〕に、貧者國之本也〔唐書〕に、財者國之命也と、世の中はと思ふやうにならぬものはわらじ、たから國の命たるをしらざる人は、みだりにつかひ捨て、代々の寶をも失ひ、又たからは國の本たるをしれる人は、吝かにして、たからたにあらはと思ひて、世のありさまわしくなりゆくをしらす云々、〔たはれ草〕

他人の食ひより親の泣より、〔他我身の上〕同之

〔文選〕廣絶交論云、愛合歡離、品物恒性、〔盡管錄〕に他人聚於食、親戚聚於哭、〔俳言集〕

他人の飯を食ふ、〔全〕○「他人の飯には骨がある」

他人の弓をひかざれ、〔大和故事〕同之

〔大唐俗語要畧〕云、他弓不挽、他馬莫騎、〔傳家寶〕云、他弓莫挽、他馬莫騎、註、無益之事

何必管、高忠開書類聚四百十七に他人の弓をひかざれ、と云事はあれども、此方より張て
出さば引て出すへし、〔全〕

他人の猿似〔全〕

他人の中をふむ〔全〕

他人の疝氣を頭痛にやむ

旅たちて三日がうち、庭をはかす櫛を見ず

〔萬葉集卷十九〕櫛も見じ屋中もはかじ草枕旅行君をいはふともひて〔仙覺抄〕人の物、ありき

たるわとには、家の庭はらはす、つかふ櫛もみすといふ事あるなり、〔皇朝古語〕

旅は道づれ世はなさけ〔毛吹草〕和漢古語

旅はういものつらいもの〔俳言集覽〕

旅のつかひはありあはせ〔全〕

旅の辱は辨慶状〔全〕

辨慶状とはかきすてと云事なり、此諺非なり、旅は通り一遍なれば、一度名譽を毀損する時
は終に回復の期なかるべし、却て慎まざるべからず、

玉みが、ざれば光なし〔皇朝古語〕〔毛吹草〕

〔學記〕玉不琢不成器、人不學不知道、

玉のさかづきこそなさが如し、○玉のさかづきこそなし、寶といへども用もあらず〔皇朝古語〕

〔金樓子〕に云、桂花無實、玉卮無當、〔抱朴子〕に云、無當之玉盃、不如全用之埴埴〔木朝傑語〕

○〔文選三都賦序〕且夫玉卮無當、雖寶非用、侈言無驗、雖麗非經、

珠にさすあるが如し、○玉に玼〔皇朝古語〕〔毛吹草〕

〔淮南子〕に云夏后氏之璜、不能無考、明月之珠、不能無類〔全〕

玉で鳥を打つ

〔類聚名物考〕に以玉抛鳥、玉をもて鳥をうち野の寂かな〔番禺雜記〕黎洞之人、以香代爨、

荆山之下、以玉抵鵲、

玉を淵に投る〔歌林拾葉七〕

立つ鳥も跡をけがさず、○立つ鳥も跡をにこごぬ〔毛吹草〕

〔史記〕に樂毅曰、古之君子、交絶不出惡聲、忠臣去國、不潔其名、是諺の意に同し、〔稗草〕

立ちよらば大木のもど〔毛吹草〕

〔吾吟我集〕「立よりは大木のかげとおち椎の敷を拾へる猿のかしこさ」〔傳家寶〕大樹底下好
遮陰、

立ち佛が居佛をつかふ〔民のかまど〕

立ち佛も居佛も且那はからひ

〔光廣卿職人歌仙〕「立居さへ檀那まかせの釋迦阿彌陀人をいかでか送り迎へん」〔偃言集〕

立ち白で目をつく

達者おもひきを嫌はず〔毛吹草〕和漢古塵

達磨に社杯を着せたやう〔偃言集〕

達磨の目を灯汁で洗つたやう〔全〕

田螺もなまぐさ物〔全〕

田もやらう畦もやらう〔全〕

田藝布子に裸麥〔全〕

貴い寺は門からしれる〔世語塵〕○貴き寺は門から見ゆる〔毛吹草〕

貴きは賤さがるねみ知者をば愚人が嫉む〔偃言集〕引活版會我物聞

貴からう好からう賤からう惡るからう〔偃言集〕

唐土の虎は毛を吝む〔毛吹草〕同之

此は何によらず、人の藝能に付て、其妙を得たる時、他人之を慕ひて、學はん事を願ふもの
あれども、其術を惜みて、妄に傳へざるを云、〔韓子〕に云、狄人玄豹の皮を、秦の文公に献す、
文公、皮の美なるを以て、罪を成す事よと宣ひて、歎息し玉ひけるとなり、此は〔列女傳〕に云、
陶大夫か妻の詞に、南山に玄豹あり、霧雨降る事七日すれば、豹も出食はさる事七日せり、己
か毛の美なるを惜み、愛して汚さじとてなりとあり、是より出たる詞なり、豹と虎とは、相似
たるを以て、通して云へるなり、〔故事〕

唐人は浴みせず

世人の諺に、唐人は浴するとを好まずとて、人のよこれわかづきたるか、物くさき性のもの
をば、唐人などいふことをおもふに、〔癸辛雜識續集〕に、蜀人未嘗浴、雖盛夏不浴、以布拭
之耳、諺曰、蜀人生時一浴、死時一浴とあり、これらのことを説りつたへて、唐人は湯のみ
さらひなどとは、いへるにやとおもひたるに、ある書に、李笠翁が一家言に、倪涵谷孝廉に
與へて、澡盆を借るの書あり、其文に、弟入都半載、塵垢滿身、未經一浴無其具也、北人都

不辨此、且謂多浴耗神、不審此地諸公得此養生妙訣、果能與彭越比算否、老年翁以南人居北、必能避此迂風、幸爲一假磁盆寓中儘有、但恐浴至好處忽然瓦解、喫驚致病則耗神之說驗矣、將爲北地諸公所笑、故必求其本者と見えたり今已に長崎にて、來船の清人ども、湯をみするごとくなく、熱湯に手巾をひたして、肌をふき拭ふのみといへり、この一家言の文を見れば、北人の迂風なるべし、〔世事百談〕

唐人のまうし子〔俳言集〕

竹の子親まさり〔毛吹草〕

竹八月に木六月

〔和訓栞〕に、八月竹を伐るの時とす、〔俳言集〕

狸寐入り〔毛吹草〕○狸ねいり鼠のそら死〔和漢古語〕

〔本草集解〕人好睡者、謂之貉睡、今俗に睡を装ふ者を狸といふ語同くして意異なり〔中村忠誠輯恒言〕

狸百匹棒百本〔俳言集〕

狸の澤渡り〔全訂鹿訓往來〕

鷹は死ぬれど穂を啄まず〔毛吹草〕同之

此諺の意は、義を守る武士は、たとへ飢に及ぶとも、不義の俸祿をは受けずとなり、〔李白詩〕

鳳飢不啄粟、所食唯琅玕、焉能與群雛、刺促爭一餐、世諺よく似たり、〔蘇東坡〕

鷹はかしてけれど鳥に笑はるゝ〔毛吹草〕

たふるゝ所に土をつかめ ○こけた所に火打石〔和訓栞〕

ころんでも、只起るなどいふ、諺に同し、〔古本今昔物語卷廿八〕受領は倒るゝ所に、土を蹴

めどころいへ云々、〔皇朝古語〕

たふるゝにたち山

〔遊糸日記〕たふるゝにたち山と、立かへる時もあり、〔全〕

短氣は損氣〔毛吹草〕同之

〔太田道灌の幕景集〕に、細川勝元朝臣より、短慮不成功といふ心ばえをとひたまひしかば、

『いろがすばぬれざらましを旅人のあとよりはるゝ野路の村雨』此歌諺にかなへり、〔本朝俳諧〕

短氣ハ未練の相〔世話書〕○短氣は未練のもと〔民のかまど〕○短慮未練〔故事要言〕

當意即妙〔俳言集〕引北條時分諺也

常住と隠居とは犬と猿〔俳言集覽〕

樂みあらんより憂ひなかれ〔毛吹草〕〔和漢古歌〕

韓退之が送李愿歸盤谷序云、與其有樂於身、孰若無憂於其心、
樂みは哀みのもとひ〔毛吹草〕

〔太公陰謀〕武王崩銘曰、樂極則悲、沉溺致非、〔淮南子道應訓〕物盛而衰、樂極則悲、日中而
移、月盈而虧、〔漢武帝秋風辭〕歡樂極兮哀情多、
多勢に無勢さじと腐

〔群書治要〕周書に云、寡不敵衆〔孟子〕云寡不可以敵衆、弱不可以敵強、〔書〕○〔吾吟我集〕
に「もとの花打ちらす雨風はた勢にふせい如何にふせがん」
多分につけ

〔尚書〕云、三人占則從二人之言、〔左傳〕云、欒武子曰、善鈞從衆〔全〕
高見から見物〔俳言集覽〕○高見のけんぶつ

高飛車で負を引出す〔全〕
たゞなりども食ふべき餅に飽〔世話書〕

只より山 郭公〔醒睡笑〕

欺に手なし〔毛吹草〕之

〔韓子〕に云、龐共と云へる人、太子を邯鄲に質として遣はし玉へと、魏王に勸る詞に云、今
人あり、市に虎ありと云はし、君信し玉はんや、王曰、信せじ、又曰、二回目に来る人、又
言はし信し玉はんや、王曰、信せずと雖も疑をなすへし、又曰、三回目に来る人も、亦言はし、
信し玉はんや、王曰、言三人に至らば信とせん、龐共曰、夫誠は市に虎の居るべき理なし、
然れども三人皆言とさは、終に市に虎あるに成る者也、君之に依て分別あれと云けるも此心
也、〔故事警言〕〔愚按〕此諺の意は、だまされるに、防ぎ方なしと云ふが如し、

だますしだまされる〔俳言集覽〕
たくらたの市立〔世話書〕同之

〔事文類聚別集廿一〕に云、秦に古を好む者ありて、上古の物とさへ聞けば、價を云はず必買
ひぬ、田宅資財も之か爲に盡きて、終に衣食の貯を失ひ、乞食するに至て、古器古畫の身を助
るなし、於是哀公の席を披き、太公の杖を持、舜の手つから作り玉ひし、陶器の碗を袖に入れ、
行々乞て曰く、太公の九府錢あらは、一文給はれと云けるとあり、云々〔故事警言〕〔和訓栞〕

たくらた、痴騷の徒を云俗語なり、たくらたの市に立といふ諺も、曾て分別なくて市井にたつは、何の用をか爲さん、されば、比較の意もて、たくらたといひ、下手のへを罾せしなるべし
たくらた猫の隣あるき〔俳言集引北條時分語〕
卵で石をうつごとし〔本朝俚語〕

〔墨子貴義篇〕以其言非吾言者、猶以卵投石也、〔荀子議兵篇〕以桀詐堯以卵投石〔淮南子主術訓〕人主執正持平、則群臣以邪來者、猶以卵投石以火投水、

卵に目鼻
棚から落た達磨（其地位を失ふを云）
棚からぼた餅
薪つきて火きゆる

〔法華經〕云、佛此夜滅度、如薪盡火滅〔本朝俚語〕
薪を抱いて火を救ふ

〔戰國策〕魏孫臣曰、抱薪而救火也、薪不盡則火不止〔醫草〕
壘の上の水練 又壘水練

〔女仙外史〕に、紙上談兵といへるも同意なり〔俳言集〕
壘の上のけが

蓼喰ふ虫〔毛吹草〕同之 ○蓼喰ふ虫はからさをしらす〔和漢古語〕○たてくふむしもすきく

〔晋左思魏都賦〕蓼蟲忘辛〔白氏文集自詠詩〕何異食蓼蟲、不知苦是苦、〔孔叢子蓼蟲賦〕是蟲幼
長斯蓼、不以爲辛、〔醫草〕○〔鶴林玉露〕木蠹不知寒、火鼠不知熱、蓼蟲不知苦、蝮蛆不知臭
蓼の虫は蓼で死し川立は川で死す〔六諭衍義大意〕

たばふ物を蝨が食ふ〔毛吹草〕（たばふは貯ふなり）
たゝぬも矢こゑ〔全〕
たらの木にもかゝるはよひぞ〔全〕 未詳
たびかさなればあらはるゝ

〔六帖〕「伊勢の海あこきか島に引鯛のたびかさなればあらはれやせん」〔俳言集〕
道理を破る法はあれども法を破る道理なし

〔浮世鏡〕に世俗に道理を破る法はあれども、法を破る道理なし」といへる事は、心得のある事なり云云〔全〕

手綱ゆるすな〔俳言集釋〕○心の駒に手綱ゆるすな。(ここの部を)

〔參同契の注〕に心猿不定意馬四馳、とあり、亦手綱ゆるすなの意なり、たのむ木のもとに雨もる〔毛吹草〕同之

〔太平記〕云、主上笠置を御没落の時、楯をはらふ松の風を、雨のふるかと聞しめして、木の蔭に立よらせ給ひたれば、下露のはら〜と御袖にかゝりけるを、主上御覽せられて、「よし行笠置の山を出しより天か下にはかくれ家もなし」藤房卿涙を押えて「いかにせんたのむかげとて立よれば猶袖ぬらす松の下露」〔藤草〕たゝかふ雀人をおろれず〔毛吹草〕同之

〔顔氏家訓〕云、窮鳥入懷、仁人所憫、諺云、に本つきたるか〔藤草〕〔愚按〕二雀相闘ふ時は人に捕らるゝをも恐れざるなり、一朝の怒に其身を忘るもの、諺となすべし、たらしがたらしにたらされた

〔東見記〕に云、候白男也、候黒女也、共盗人也、淮海集にあり日本に云、たらしがたらしにたらされたと云同意「案するに候白候黒皆」カタリ」とよめり〔傳燈錄〕に早候白伊更候黒とあり、〔俳言集釋〕

螻蛄が斧を以て陸軍に向ふ〔毛吹草〕雁作龍

此は己か分際を知らざる喻にいふ〔莊子〕云、猶螻蛄之怒臂以當車轍、則必不勝任矣、〔淮南子〕云、齊莊公出獵、有螻蛄舉足將搏其輪下段〔文選四十四〕欲以螻蛄之斧御陸軍之隊上段〔草〕

壇那のすきな赤烏帽子〔俳言集釋〕○すきに赤烏帽子

〔鹽尻〕に云、義教將軍の時、松浦肥前守、數奇物赤ぬりの烏帽子を着して、参りしかば、將軍其姿を、自ら圖して賜ひしを、肥前守薙髪の後、彼像を南禪寺におさめしとかや、當時のすきに赤糸ぼうしと云けるは、此故事なり云々とあり、古き諺なり、

塔は下からくめ〔井蛙地〕種のないはなしかはつかはれず、又まな玉も種なくてはつかはれず〔俳言集釋〕蝸の糞であたまへあがる

己れのみ誇れども、他より見るものは卑しめおもふにいへり、蝸の糞はあたまにあるもの故にいふ、〔全〕

谷の枯木は高しといへども、巖の小松に影ぞなす〔全〕

たうかかれても食へ〔全〕
鯛の尾より鱈のかしら〔全〕
だてのうすぎ

寛永中に書たる「翠草」といふ物に、當世のだてとて、遊女ぬめり男の、すぐれて夏の暑さに、
袷單物杯着をりて、汗びたしになる、冬の寒さに、すぐれて薄着するをいふ云々、〔續山井〕
「姫松のかたびら鳥やだてうすぎ」〔嬉遊笑覧〕

辰巳の門に戌亥の藏（吉方位をいふ）
たべ物と念佛は一口づゝ
橙が赤くなれば醫者の顔が青くなる。又橙が青くなれば醫者の顔が赤くなる。

是は春夏は病人多く、秋冬は病人少なさを云ふ、橙は春夏に青く秋冬の候に赤くなる故なり、

◎れ之部

連理の中にも断れる期〔世話畫〕
榎木で腹さる

◎そ之部

袖の振合せも他生の縁〔毛吹草〕

〔古今我集〕「野へにたつ尾花の袖のふりあはせこれも草かる百姓のえん」

袖の墨〔皇朝古語〕

損して徳どれ〔傳言集覽〕

損して辱かく〔全〕

そら念佛も三合どまり

そらをつかふ

蘇民將來の子孫

今俗、符章に記し、又諺の如くもいふ事なり、〔神代直指抄〕に〔神代外録〕を引て云、素盞鳴
尊、根の國に降り給ふ時、雨にあひ風に吹かれ、辛勞甚し、よりて宿を諸神に借たまへども
許されず、時にみたはの國に、蘇民將來、巨旦將來といへる、兄弟の者あり、蘇民は家貧し
けれども、心情愛惠なり、巨旦は家富めども心情不仁なり、素盞鳴尊先づ宿を巨旦に借たま
へり、巨旦貸奉らず、蘇民に借たまひしかば貸奉りぬ、且又奉養饗宴亦誰分の及ぶ所を盡せり、素
盞鳴尊いと痛うよろこひおはしめしむか、恩を謝せんとおはしめす、其夜あさわの

れろ之部

國より、暴疫鬼來りて、國民を亡さんとす、尊あらかしめ其事をしろしめして、蘇民に告て宣く、此夜此處に惡神來るへし、我其禍を除く方を知れり、汝等及家の内の者等、茅の輪を帶ふべし、福も榮着する事能はず、蘇民命に従ふ、其夜果して暴風通り、明日處の人民盡く病腦せり、尊蘇民に告て宣く、後世疫鬼流行せん時、汝が子孫も家門に題して、蘇民將來子孫の宿と誓し、且卵の輪を門楣に懸くへし、然らば疫氣の福を免かるへしと、世俗今に門楣に、蘇民將來子孫の處とかくは此故なり、〔或人云、蘇民將來、且將來は、琉球人なるへし、越來の親方など、名を付るなり、牛頭天王蘇民將來の事、重盛内傳にも載せたり、備後國風土記より出たる事なれば、古より言傳へたる事と見えたり、〔蘇草〕〇〔古事類苑神祇部〕に詳なり、〕 剃立三つ。

此は敵と思ふ人は、假令出家したりとも、うつが本意ぞと云ふ心なり 〔故事要旨〕
僧に法あり 〔毛吹草〕
孫は笛ふく 〔毛吹草〕 同之

此諺は、其先祖笛をふけば、子孫も亦必ず笛吹く者あり、是祖先の遺教に係る也、〔國史纂異〕云、唐國立本、見張僧繇畫日、名下定無虛十一、是異言同意のみ 〔蘇草〕

其罪を惡んで其人を惡まず 〔孔叢子之語〕
楚辭に梅なく萬葉に菊なし 〔俳言集〕

〔和訓栞〕に云、菊をもてあそびしは後世の事、其初延暦十六年に御製ありて、嵯峨太上天皇重陽の菊花の賦、經國集に載す、寛平の御時、菊合させたまひしより、名高くなりしといへり、諺に楚辭に梅なく萬葉に菊なしといへり、後水尾帝の御製に「ならのはの選みにもれし菊の

花残れる梅の恨やはある」

ろりつひりに綿帽子 〔世語塵〕
謗れは影さす 〔全〕 〇噂をいへは影がさす
惣領の甚六
ぞつと申せばぐわつと申す

◎ つ の 部

月盈れば缺く 〔毛吹草〕 同之

〔易豐彖傳〕に云、日中則昃、月盈則食、〔史記〕蔡澤曰、日中則移、月滿則虧、〔釋名〕云、月缺也、滿則缺、古歌に「おもへ只みつればやがてかく月のいざよふらや人の世の中」〔蘇草〕

月にひら雲花に風〔世語集〕

〔文子上徳篇〕云、日月欲明浮雲蓋之、河水欲清沙土穢之、叢蘭欲脩秋風破之、人性欲平私欲害之、

月夜の道徳坊

世の人の、心に只うつかりとして、阿房なる様なる事をいふ、又談叢に云云、道徳の妙を得ては、何時も月夜を見る事も、儘になると云心也、〔故津響言〕

月夜に挑灯も外聞〔毛吹草〕 ○月の夜に挑灯〔世語集〕

〔吾吟我集〕世間こそはりのなれと月の夜に挑灯ともす人も有けり

月の前の燈〔信濃集〕

月の前の一夜の友〔毛吹草〕

月夜に釜〔全〕 ○月夜に釜をとられた〔世語集〕 ○月夜に釜をぬく

月夜に米の飯〔全及和漢古歌〕 ○いづも月夜に米の飯

蜀山人の狂歌に「世の中はいづも月夜に米の飯さて又もふし金のほじとよ」
月をあらはれといふをいひ

〔竹取物語〕ある人の、月のかは見るはいひ事とせいしけれども、ともすれば人間には、月を見てはいみしくなき給ふ、〔後撰集總〕「月をあらはれといふはいひなるぞ」ひとりの有ければ「よみ人不知」ひとりの寐のわひしきまゝにおさむつゝ月をあらはれといふぞかねつる〔源氏宿木〕老人とも今はいらせ給ひね月見るはいみはへるものを〔白氏文集贈内詩〕「其對月思往事損君顔色減君年」〔皇朝古歌〕
月のかけとるましら〔全〕（猿猴が月を取るの條下参看）
月の升りに日の降り

月の升りと日の下りに、暈あれは雨ふるとなり、〔信濃の謠〕、〔信濃集〕

月とすつぼん〔全〕

月窟、天淵、雲泥、宵壤等は、皆大差懸隔なるにいへり、

月日の風

〔連集良材廿一〕是も無常の響なり、經に云〔略〕黒白二風は經論皆日月をいふ也、後京極攝政の歌に「後の世に彌陀の利生をかぶらすばわなわさましの月の風や」俊賴卿の歌に「我たのむ筆の根をばむ風ぞとおもへば月のうらめしき哉」〔全〕 ○〔和訓栞〕に云、月の風梵書に出たり、命を草の根とし、日月を黒白のねずみとし、世のはかなさをたとへしへり云々、

鶴は千年鶴は萬年

〔淮南子〕に云、鶴千歳極其游、〔廣五行記補〕に云、龜齡經萬歳又云、萬年訓靈龜、〔本朝傳記〕
鶴のはぎも切るへからず鴨のはぎもつくへからず、〔砂石集〕 ○鴨の足はつがれぬ、(かの部参看)
鶴の粟を拾ふが如し、〔毛吹草〕〔和漢古蹟〕
鶴は枯木に巢をくはず
鶴の一聲

〔三國志管輅傳註〕云、要言不煩、
つうといへばるうとさる
杖ほどかゝる子はなし

子は老親を扶けて、孝道を盡すべきなれども、世間には不孝なる子もありて、杖の無心、
自由につかひれて、違ふ事なきが如くならぬを云、〔詩學叢珠〕鈴竹詩品題、謾假扶持力、多惡
賛助功、とひへり、〔故津書〕
杖も孫ほどかゝる、〔毛吹草〕
杖にも柱にも

〔藤戸蟬丸謠〕に杖柱ともたのみつる、〔言俚集〕
杖の下からまはる子がかはゆい、〔全〕

聾の立聞
〔首楞嚴經疏〕云、猶如聾人逾百步外聆於蚊蚋、〔本朝傳記〕
聾に鐵砲、〔言俚集〕引參寺玉山卷、○聾に鐵砲盲に抜刀、
聾の早耳、〔言俚集〕

〔諺百人一首〕〔岡部〕あやにくに常は聞えぬ鐘の音のかなしき秋の夕つげける、
聾の大聲
爪に火ともす、〔毛吹草〕
爪の極樂火の地獄ひねりまはらで目かきはる、〔言俚集〕
爪に藍しむ

〔拾玉集四〕ニ賀茂法樂百雜「うれもいさ爪に藍しむことの葉のしるしどりおくだすき姿よ、」
〔類聚名物考〕
つらの皮あつし

〔五燈會元〕に恡麼説話、面皮厚多少、〔碧巖録〕に、面皮厚三寸、〔本朝傳〕〔吾吟我集〕「底こゝろどけずつめたき人はたゝむつかはつらの氷なりけり」
面の皮をむく

〔西京雜記〕に、曹元理計齒米數出、差一升、而中有一鼠、元理曰、遂不知鼠之殊米、不如剝面皮矣、〔斐氏語林〕に、賈充謂孫皎曰、何以剝人面皮、皓曰、憎其顔之厚也、
面は千枚張

〔小町踊〕冬、氷「川つらは千枚張の氷かな」〔俳言集〕
繋ぎ馬に鞭をうつ〔毛吹草〕〔世話畫〕
繋ぐ犬の柱をめぐる如し〔俳言集〕

〔童子教〕云、願惡人不避、維犬如廻柱、是佛書に本づけり、
つりあはぬは不縁のもど〔全〕
つり落した魚は大きし
妻こゝ鹿は笛に寄る
妻に密事を語るな

連がな三里廻らん〔毛吹草〕
つくりたいげん〔全〕

角直すとて牛ころす。○角をなとして牛をころす。〔毛吹草〕
是は少の瑾を去らんとて、懲にいらへば、大なる害を求むる喻也、〔郁離子〕云、東門之癩人、頭没于胛而癩代爲之元、口目鼻耳俱不能爲用、郢封人憐而爲之割之、人曰癩不可割也、弗聽卒割之信宿而死、國人尤焉、辭曰、吾知去其害耳、今雖死癩亦亡矣、國人掩口而退、〔癩草〕
弦なき弓羽ぬけ鳥

〔淮南子〕云、烏號之弓、鶻子之弩、不能無弦而射、又云飛鳥鍛翼〔本朝傳〕
強き木はむす折れ〔毛吹草〕〔和漢古語〕○強木はむすをれ柳は風にしなふ〔野蘭述説〕
〔和訓栞〕に、むすをれば力をも入れずして折るを云、按するにむす折の假字未考姑從栞〔小町踊〕冬、雪、「むす折の心の松や雪の枝」有哉〔俳言集〕
つち佛の水あろび。○雪佛の水あろび。

此は急に見切て、捨べき事を悟らずして、終には身を亡すの種となる様の事を云、〔徒然草〕に云、人間の營みあへる業を見るに、春の日に雪佛を造て、其爲に金銀珠玉のかざりを營み

堂塔を建んとするに似たり、其構を待て能安置してんや、人の命ありと見る程も、下より消る雪の如くなる内に、營を待事甚多しとあり、是土と雪との違あれども、無益の事をいとなひ内に、其元を失ふの理は一致なり、此心也、〔故事要〕

礎て庭はくやう〔俳言集〕(似つかぬ追従をいふ)

づなし者の節句働き又のら節句働き又づなしものゝ大仕事〔全〕

づは術歟未考得信濃にてはづくといふ、精を出すをづくを出すといひ、不精者をつくなしものといふ、此にづくといふも同意なるべし、

つむのをのされたやう

〔倭訓栞〕に、つむのを紡車絃也、事のたえて、あとのつがぬをいふ、〔全〕

つけやきは役にたはず又つけ焼又ははげやすし

頭寒足熱(平生の攝生法)

縷れを着ても心は錦

つまづく石も縁のはし

◎ね之部

猫の鼠をねらふが如し〔和漢古語〕

猫にかつはふし又猫のひたひに懸節又猫になまいわし

〔和訓栞〕猫に懸節あつけると云諺は、〔後漢書〕使餓狼守庖厨、飢虎牧牢豚、と云に同し、〔唐

話纂要〕に、猫頭上乾魚〔俳言集〕

猫にからさけ〔毛吹草〕〔和漢古語〕

猫の齒に蚤

〔吾吟我集〕「猫の齒にかみ殘されて飛蚤も虎の尾をふむ心なるべし」〔俳言集〕

猫を逐ふより魚をのけよ〔全〕

猫に小判〔全〕

猫の啼き食ひ〔全〕

猫手水耳を越せば雨がふる〔全〕

猫ばゝを踏だやう〔全〕

猫の鼻と傾城の心は常につめたい〔全〕

猫のひたひにある物を鼠がねらふ如し〔毛吹草〕〔和漢古語〕同之 ○猫の鼻先の物を鼠がねらふ

〔源平盛衰記〕云、賴朝義兵をおこし、安達藤九郎盛長を便として勢を灌ざる、盛長、須藤瀧口三郎、同四郎か方に相ふれけるに、三郎弟に向て、佐殿の當時の寸法をもつて、平家の世をどらんとし給ふことは、富士のみねとたけくらべ、猫の額にある物を、鼠がうかふたとへにやど、嘲りけるとあり、〔本朝傳記〕

猫に追はれた鼠〔傳記換覽〕

猫の晝寐に油断すな

鼠どる猫爪かくす〔毛吹草〕〔和漢古語〕〔野語述説〕

〔淮南子〕云、猛獸之攫也、匪其爪、〔說苑〕云、君子愛口虎豹愛爪、古諺云、將飛者翼伏、將

嚙者爪縮、

鼠取らず

〔鶴林玉露〕云、東坡曰、養猫捕鼠、不可以無鼠而養不捕之猫、余謂、不捕猶可也、不捕鼠而捕

雞則甚矣、〔本朝傳記〕

鼠のろら死〔毛吹草〕

鼠の卸取薬師通夜〔世語畫〕

鼠の鹽を引くやう〔傳記換覽〕

念力岩を通す〔毛吹草〕〔和漢古語〕〔漢語大和歌〕同之

〔韓詩外傳〕云、楚熊渠子、夜行見寢石以爲伏虎、射之沒金飲羽、視之石也、因復射石、矢摧無迹、〔漢書〕云、李廣守北平出獵、見草中石以爲虎、射之中沒鏃、視之石也、明日復射之石不能入矣、〔後周書〕云、李遠營校獵莎柵、見石叢薄中以爲伏虎射而中之、鏃入寸餘、就見乃石也、是皆至誠心之一念力を以て、岩を通す事かくの如し、劉向曰、誠之至也、金石爲之開、

况人乎、朱子曰、陽氣發處金石亦透、精神一到何事不成、〔韻草〕

念に念を入る〔傳記換覽〕○念には念を入れよ

〔淮南子〕云、漆不厭黒、粉不厭白

念の過るは無念〔全〕

禮は中を貴ふ、過るは猶及ばざるか如し、〔論語〕云、事君數斯辱矣、朋友數斯疏矣、の意なり、

念佛申せば金がはづれる〔全〕

念佛と食物は一口か大事〔全〕

念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊、〔全〕〔日蓮宗四ヶ格會〕

根を掘て葉をからす〔俳言集引賀西野事記〕根を絶ちて葉をからす

根はど枝ひるがる〔俳言集〕

根を深くし、蒂を固くする

〔太平記〕義貞藤山門「根を深くし、蒂を固くする、謀と成て云々、〔全〕○〔老子〕有國之母

可以長久、是謂深根固柢、長生久視之道〔晋書劉頌傳〕建諸侯而樹屏藩、深根固蒂則延祚無窮、

根切り葉切り疾ひ切り再び面をつんだすな

此は小兒の灸畢りて後、艾箸を以て灸の痕を押へなから、かくいふてまじなふ也、〔全〕

根ふと押て三年仲違ふ〔世語集〕

寐耳に水入るが如し〔毛吹草〕和漢古語○寐耳に水

〔吾吟我集〕時雨「夢さます板屋の時雨もらねども寐耳に水の入る心地する」

寐入る小僧に粥かくる〔世話集〕

寐た牛にあぐたかくる〔全〕

寐てはく睡で身にかゝる〔故事集〕

子に臥し寅に起き〔野守語〕北條早雲廿一ヶ條

〔八雲御抄〕「子にふし寅にをきつしらなみ」〔吾吟我集〕に「待かねてひとりねにふしとらに

おき我ころ戀の山伏の行」

子の年は藪みのらす

〔續日本紀卷五〕詔 朕聞舊者、相傳云、子年者穀實不宜、〔皇朝古語〕

子の日爪さらす

〔土佐日記〕正月廿九日の條に、つめの長くなるを見て、日をかそふれば、けふは子の日なり

ければさらす〔俳言集〕

眠るも奉公〔毛吹草〕いねふりも奉公〔い之部参看〕

眠りは賢人王を見て來る

是は寐たる間の樂、富貴の果報を、身に得たるやうなるものと云心なり、〔異聞集〕に云

淳平、廣陵に住めり、宅の南に古き槐樹あり、禁或時、酔て其下に臥したりしに、夢に二

人の使來りて云、槐安國と云ふ國の王より、召さる、間、只今御迎ひに参りたりと云ふ、

禁使と連立ちて行きけるに、其國を大槐安と號し、其帝を南柯の神と號す、王、夢に逢て宣

はく、國の政事に理あらざるが故に、公を納れて、南柯郡の主となすと、言おはりて印綬を
禁に授け、拜して大守とす、禁行きて南柯の守とな、事數日にして夢さめたり、禁彼の古槐
の本を見れり、一穴洞然としてあり、夫をほりもて入りけるに、始て知る槐安國は、此木な
る事を、國王は大なる蟻の、此木の虚に住みけるが、仕業なりけるとぞ、是を楠柯の一夢と
云ふ、諺此心なり、〔故事要言〕
粘上戸。

好酒家に種々の癖あり、粘上戸といひ、冗舌を吐き、長飲するを云、又無左と惡埋窟を云ひて
人に忤ひ飲ましめんとする杯の、癖あるを云ふ、〔音韻字海〕酒の條に云、衛の元規、酒に酔
ひて丁僕射に忤ふ、醒て後に書を寄せて、謝して曰、茲より酒星を天獄に囚へ、醉籍を秦坑
に焚かんと云ひけるとあり〔同〕
願ふたり叶ふたり

◎ な之部

七日にして家に歸るを思む

〔水鏡下〕 桓 丙戌日行幸は有て、けふはみつのえ辰の日なれば、七日といひしにかへりたま

へりぞぞ、おほえ侍る、此頃はいひなと申とかや〔皇朝古蹟〕
七日やむ

〔榮花物語〕 浦々別おとこは、日七日夜むとかいふらんやうに、〔全〕

七日通る漆も手に取らねばかふれぬ〔世語彙〕

七日語れば尼か法師か〔全〕

七日の説法屈一ツ〔毛吹草〕○七日の説法も無になす

七日關白〔粟田關白をいふ〕〔傳言集〕引榮花物語

七日七夜

〔山城風土記〕に 神集集而、七日七夜樂遊、〔靈異記〕小子部栖輕が事を記せる條に、栖輕卒也、

天皇勅留七日七夜、詠彼忠信、〔傳言集〕

七重の膝を七重に折る〔毛吹草〕

〔吾吟我集〕 述懐「まじらへば七重の膝を八重に折る袴のひだのむつかしの世や」〔犬子集〕わび
て折れ七重の膝を八重櫻

七の子はなすとも女に心ゆるすな〔毛吹草〕○七の子中なすとも女に心ゆるすな〔和漢古蹟〕

〔難波記〕太閤秀吉公十三ヶ條の中に、七人の子を持とも、女に心ゆるすべからずとあり、七ツ目

〔貞丈隨筆〕に我が生る年の支より七ツ目の支、例へば子年生なれば、午に當る、依て馬を畫して常に見れば、福來るといふ俗説、近年行はる、〔俳言集覽〕

七度尋ねて人を疑へ〔毛吹草〕〔和漢古蹟〕〔漢語大和故事〕全之

此は物をうしなひたる時は、靜に之を尋ね求めて、漫に人を疑ふ事なかれと也、〔列子〕云、人有亡鐵者、意其隣之子、視其行步竊鐵也、顔色竊鐵也、言語竊鐵也、動作態度無爲而不竊鐵也、俄而捐其谷、而得其鐵、他日復見其隣人之子、動作態度無似竊鐵者、これ人を疑ふ時は、する程の事、皆盜みせしやうに見ゆ、諺に疑心生暗鬼とは、此事なるべしと、列子の注にあり、〔四草〕

七度半の使ひ立つ、〔和漢古蹟〕

〔毛吹草〕七度半の使は留か遅櫻

七ころび八おき

是は貧富福禍、轉變の速かなるを云ふ、或書に云ふ、七度倒れ七度起さんには、如何して可

なるや、或人答曰、初倒れ居る者か起るなりと、蓋當座の戲言なり、夫人變故に遭遇し、艱難困苦を経れば、智を長し勤勉に堪るを以て、必ず興るの理あり、故に倒るるより、起る方速かなりと云ふ義なり、

長くいつげ、〔毛吹草〕○長くは續げ短くは断れ己がたばかり〔俳言集覽〕

長居の驚は汁になる〔俳言集之北條時分醒留〕

長居する驚ひき目にあふ〔俳言集覽〕

長居は畏れあり〔四草〕〔漢語大和故事〕長居は畏れ〔盛長監〕〔民のかまど〕○長居は無用

〔鷹筑波〕長居はおそれありと云う聞けと云句に折捨よ貴人の前の高揚枝

長居をすれば物を見る〔全〕

長さにはまかれよ〔毛吹草〕○長い物にはまかれよ〔和漢古蹟〕○長き物にはまかれよ太き物には

のまれよ〔民のかまど〕

〔鷹筑波〕長き物に月はまかれな雲の帯

長し月日に短し命又長し浮世に短し命

〔文選古詩〕生年不滿百、常懷千歲憂、〔俳言集覽〕

長生は辱多し〔全〕（命長きは辱多しの條下參看）
長し短し

兩ながら間に合はざるをいふ〔跡道四十八〕「大小や長し短し月の劍」〔全〕
生兵法大疵のもどろ毛吹草同之○なき兵法大怪我の基〔野蘭述説〕

〔續博物志〕云、費長房得符靈公、以是服百鬼、其後鬼竊其符、因以殺長房、此説諺にかなへり、生とは未熟なり云々。〔本朝俚言〕○〔吾吟我集〕「中々にやめよ鬼の生兵法大にかまるゝ疵の基ぞ」

生物誠堀へはまる〔世語盡〕

生物誠地獄に落る

生壁を算盤で扣いたやう〔俚言集覽〕

生海鼠を藁でつなぐ〔全〕

なまこに藁は劇毒なり、故に箝制の自在なるに喩ふ、

生木若味附若世帯（損失の多きといふ）〔全〕

生ころしのへびにはかまれる○へびの生ころし（危険なるを云ふ）

無いらは入れぬ〔世語盡〕○なき袖はふられぬ

〔韓非子〕云鄙諺曰、長袖善舞、多錢善買、言多賈之易爲工也、

無し物くはう又無しものねだり〔俚言集覽〕○ない物くはうが人の癖

無し時に辛抱ある時に節儉〔全〕

無いとこつもの高天が原

つもりとは、酒終て納めんとするをいふ、高天が原とは、徳利を鈴のやうに振て見るを云ふ〔全〕

無くて七癖〔全〕○難なくて七癖〔故事考言〕○なくて七癖有て四十八癖

〔和訓栞〕七癖、諺に難なくてなくせといへり七難より出たる辭なるべし

無いがいけんの惣じまひ

鍋墨のやうによこれる

（枕草紙）黒物の品々、鍋墨のやうによこれつゝ〔俚言集覽〕

鍋蓋と隠

〔正章千句〕「鍋蓋に似て残る有明」と云句に「すつばんが秋の汀に浮わがり」〔全〕

な之部

鍋蓋で鼠を押へたやう〔全〕
鍋いかけが吊鐘の請合〔全〕
鍋に耳、壘に目、徳利に口、

〔宋史〕太祖叱雷德驪語云、鼎鑪尙有耳、俚諺瓶兒罐兒尙有耳、桑本於此、通俗篇に出づ
鍋の三つ足

是は甕前に在て、鍋の三つ足のみ見るといふ、世間見ずといふが如し、
鳴く鹿も夢合せのまゝに

〔日本書紀 仁徳天皇三十八年〕俗曰、昔有一人、往兔餓、宿于野中、時二鹿臥傍、將及鷄鳴、牡鹿曰、吾今夜夢之、白霜多降而覆吾身、是何祥焉、牝鹿答曰、汝之出行、必爲人見射而死、即以白塗其身、如霜素之應也、時宿人心裏異之、未及昧爽有獵人以射牡鹿而殺、是以時人諺曰、鳴牡鹿矣、隣相夢也

啼く子も目を見る〔毛吹草〕○啼く兒も目をわけ〔民のかまど〕○なく子も目を見よ〔世話話〕
啼く兒もわれは笑ふ兒もある〔俚言集〕
啼く兒と地頭には勝たれぬ〔全〕〔地頭に法なしの條互看〕

啼き猫鼠とらず〔全〕

泣き面、蜂か螫す〔全〕

〔常言道〕云、屋波更遭連夜雨、船運又遇打頭風、

泣き辨慶 又 涙辨慶 又 泣き意地

關西にては、人に負る事きらひにて、泣勝者を云ふ、〔全〕

泣く口へは食はれるが笑ふ口へはくはれぬ〔全〕

泣いて育て、笑ふてかゝれ

泣いて暮らすも一生笑ふて暮らすも一生

夏犬

夏は犬の病むものなり、狂犬にたどへて、口さがなきをろしりいふなるへし〔空物語〕あて

みや左大臣殿御つばねいと近し、殿上人ののゝしるを聞て、例の夏犬なれば、あつまりてか

まうせにはあらずぞや、〔皇朝古語〕

夏の火は女に焚せよ、冬の火は總に焚かせよ〔俚言集〕

夏の餅は狗もくはぬ〔全〕

夏は日向を行け冬はひかげをゆけ〔古〕
名をどらんより徳をどれ〔民のかまど〕同之

是は進みて名をどらん事をおもはず、退いて徳を脩めよといふ事なり、〔東萊博議〕云、名不
可以幸取也、天下之事、固有外似而中實不然者、幸其似而竊其名、非不可以欺一時、然他日
人即其似而求其真、則情見實吐、無不立敗、名果可以幸取耶〔本朝俚語〕○伊勢貞丈曰、名を取
らんより徳をどれと云諺い、徳といふを、世人は財寶の利を取事とおもふは誤也、徳は利徳
の事にあらず、人倫の道を行ふの徳也、仁義禮智を人の徳と云ふ、取とは我物にする事也、仁
義禮智の徳をどれは、求めずして名をも取るなり、〔伊勢貞丈手記〕
名の下空しからず

〔國史纂異〕云、閻立本見張僧繇曰、名下定無虛士、〔蘇軾〕○〔晉書裴憲傳〕石勒曰、名不虛
也、〔孝友傳〕帝見李密陳情表嘆曰、士之有名不虛然哉、〔陳書姚察傳〕劉臻、訪漢書疑事十
餘條、並爲剖晰、臻謂所親曰、名下定無虛士、
名のりするは木の丸殿

〔清輔か良儀抄〕に云、天智天皇、世につゝみたまふ事ありて、筑前國上座郡、朝倉山と云所

の山中に、黒木の屋を作りて、おはしましけるを、木の丸殿と云ふ、丸木にて作れる故なり
用心をし給ひければ、入來る人、とはぬになのりをしつゝ入ける也、御製「朝くらや木の丸
殿に我をれば名のりをしつゝゆくは誰か子ろ」〔蘇軾〕

名高の骨高〔俚言集〕

〔本朝俚語〕骨高の條に、世俗聞しはどになきものを、名高の骨高と云へり、古語に、聞て千
金見て一毛とあるか如し、凡諸道ともに、其藝を得たるを、骨を得たりといひ、骨法骨氣な
どといふ、得ざるを骨高といひ、又は無骨と云ふ、生れ付器用を天骨といふ、天性其骨を得
たるの謂なり、東國にて、無骨なる者を、てんこちないといへるは、天骨なきの謂なり、天
然の骨法を得ざるの謂なり、

菜の葉に鹽をかけたやう〔俚言集〕
菜種の二葉

〔平家物語〕願立に、仲胤法印、其時いまだ仲胤ぐふと申しが、高座に上り、かね打ならし、敬
白の詞に曰、我等が菜種の二葉より、おひしたて給ひし神たち、後二條關白殿に、鎗矢一ッ
放ちあて給へ、大八子權現と、たからかにころ祈誓たりけれ〔古〕

菜種ナヅナの十七大根種ナヅナの老女ナヅナ

菜種は、早く穫取てよし、大根種は、晩く穫取てよし〔全〕
繩ナヅナ暖ナヅナ籬ナヅナに、もたれるやう

山茶花ナヅナ 名の句に「暖籬にもたれかゝつた御相談」〔全〕

繩ナヅナ張ナヅナおナヅナくも盗人の爲め〔世語集〕

繩ナヅナにも葛ナヅナにもかゝらぬ ○索ナヅナにも杓子ナヅナにもかゝらぬ〔傳言集〕

是は老人などの歩行、おもふまゝにならざるをば、家内に繩を張り、ろれに取つかせて、あゆ

まする也、足立たざれば、ろれも、叶はざるをいふ也〔日本紀〕云、清寧天皇詔曰、老嫗ナヅナ

〔目〕 俗傳ナヅナ羸弱、不便行歩、宜張繩引繩扶而出入、繩ナヅナ懸鈴無勞、請者入則鳴之、朕知汝到

又云、置目老困、乞還云、氣力衰邁、老髦虛羸、要假扶繩、不能進歩〔本朝傳〕

投遣り三寶ナヅナ

人の勤むべき道三つあり、衣服、食物、住所是なり、之を三寶といふ、此三つに事欠かぬ爲

には、士農工商共に、日夜勤むべき業あり、是を怠りて、物事大事に掛る心なきを、投遣り

三寶といふ云々〔故事集〕

投頭巾

〔枕草紙〕引物の品々に、投頭巾にて、御茶を引く〔ばせを句解〕深川八貧「米買に雪の袋や

投頭巾」〔傳言集〕

投所を投たら落所を見るな〔民のかまど〕

一旦決意して、抛棄したる物、又は人に施したる物には、其成り行きに目を懸くべからずとい

ふ事なり〔後漢書郭符許列傳〕孟敏字叔達、鉅鹿揚氏也、客居太原、荷甕墮地、不顧而去、

林宗見而問其意 對曰、甕已破矣視之何益、林宗以此異之因勸令遊學、十年知名、三公俱辟

並不屈云

南天手水

南天燭の葉を、常に懷中して、手洗ふ水なき時に、塵手水をするを云〔伊勢貞丈隨筆〕或は

物の氣にかゝる時、南天を見、又は南天にて身を打はらひなとし、まじなひに用る事は、南

天の機能にはあらず、是は南天を難轉と取なして、難を轉するといふ意にて、まじなひに用

るなり、是は物いまひにてする事なり〔傳言集〕

南柯の一夢〔全〕 眠は賢人主を見て來るの條下參看

な之部

直すは一時見るは未代〔全〕

直き木に曲る枝〔毛吹草〕同之

高津内親王歌「直き木に曲れる枝もあるものを毛を吹き疵をいふろわりなき」〔全〕

情は人の爲ならず〔葵上御仲談〕〔傳言集引北條五代記〕

〔世話盡〕情は人の爲ならず身にまはる〔沙石集〕子孫いよ／＼繁昌せり情は人の爲なら

す

情は質におかれず〔故事要言〕

なさは仁なり、其仁は人に備はる徳なれば、他人に與ふる事能はず、又他人之を奪ふ事能

はずといふほどの心ならん、

なぐさみ學問〔傳言集覽〕

なぐさみ半分〔全〕

習はぬ經は讀めぬ〔全〕○習はぬ經を逆さによむ

習ふより馴れよ○習はんよりなれよ〔毛吹草〕〔淺淵のまるべ〕

〔開元天寶遺事〕に云、唐の玄宗の愛し給ひし鸚鵡は、貴妃の毎朝金剛經を讀むを聴き、學ばず

して能く讀誦す、是より毎日讀みて怠る事なしとあり云々、〔故事要言〕
なれ／＼なすび

〔小町訓〕夏、茄子「植しうへはいつもなれ／＼茄子畑」又「なれ／＼茄子、せとやのなすび、

ならねはよめの名のたつ、」〔世話燒草〕おりかけはよめの名のたつ茄子哉、」〔鷹築波集〕舞

事はへたになれ／＼茄子苗」〔卜卷狂歌集〕茄子形の茶入に漬けりなれ茄子、なれ／＼茄子、

茶入にもあらずはこれのかけものと、なれ／＼こうと／＼、〔傳言集覽〕

薙刀挨拶及薙刀あしらひ

此はうけつ流しつすると云事なり〔吾吟我集〕寄長刀戀「ある時はやりとめにしつある時は

つらきなきなたあひしらひかな」〔犬子集〕鋤おどかひの人はあやにく」と云句に」とだへつ

と問ふを長刀あしらひに」重頼〔世話盡〕「梅ちらす雨もや繼子あしらひに」と云句に「大長

刀に遊る鶯」〔全〕

何でもない事百申さう〔全〕〔鏡舌を戒しむ〕

繪は酢でもて男は氣でもて〔全引森等玉山詩〕

鳴神も桑原を恐る〔世話盡〕

施に癩の蟲が死ぬ〔全〕
なふれば兎も食ひつく〔全〕
流れを汲みて源をじる〔毛吹草〕同之

〔荀子〕に君子養源、源清則流清、是諺と語異にして意同じ〔尊草〕
なげきの中のよるこび〔毛吹草〕
涙の出ぬを思ひ

〔榮花物語〕鳥邊野 御涙のいでませたまはぬも、是はゆゝしき事にころわれ〔皇朝古塵〕
なせの神が奴を振る〔なせは何なり〕〔俳言集覽〕
なまづを瓢箪でれさえるやう

〔守武千句〕「へうたんを見れば山からなまづにて」〔全〕
なまづけしの節句働き文のらの節句働き〔全〕
形に似せて經寺をまげ〔長のかまき〕
茄子の香の物の食ひざしをくふと中がたがふ〔俳言集覽〕
怠惰者の食いさぎ

難行苦行昔の行
なれこ舞

習ふにあらざれども、自然と目になれ心にろみて、舞事を悟ると云心にて、何にても人の心の
移り易きものなれば、其馴るゝとを慎めと云心也、〔故事要言〕○〔類聚名物考〕に云馴講舞な
り、法華八講をもほけはこと云ひ、無禮講をも、ふらいこと云ふ例にて、互に心安く馴染ま
んとて、寄合講をして、舞ひ遊ふなり、今世俗にも、何々講と云て、合交する、皆寄合て舞
かなで遊び樂むをいふなり、一向宗の家にては、即御寄講といふと聞えたり、昔も無禮講を
企てし時も、玄惠に韓文の講談をさせて、それを言ひ草にして寄合たり、もと夫よりして講
どはいふなり、古日記を見るに、講といふは今世の講釋にはあらず、大に異なり、講釋の式
あり、台記にも庚申の夜毎に、老子を講せられし事あり、寄合て物語し聲明唱ふる如くに、
中の要文を唱ふると聞へたり、平家物語の鳥にて流人の仲間入講の寄合なり、今江戸の風
俗に小兒の遊ふにめかくしこといひ、やらすこ、とらすこ、といふも、講の意にて樹を結ひ
約束をかたむる意にて、皆小にもあらず、子にもあらずなり、
なれはしたふ

〔竹齋物語〕誠に他人なれども、なるればしたふ習ひにや、〔俚言集〕
馴ぬ米商より馴た米商

〔新序〕云、利不什不易業、功不百不變常、

媒口ナカチケチ ○なかうどらうらこと〔吹毛草〕 ○仲人七嘘〔又ハラソ〕

俗に言の相違多きを媒口といふ〔袁氏世範〕云、古人謂周人惡媒、以其言語反覆、給女家則

曰男富、給男家則曰女美、近世尤甚、〔塵事〕○〔犬子集〕「らうらことも只世の中の習ひにてな

うど人そ縁を定むる」〔重頼〕

なかうど宵のはど〔毛吹草〕

成らぬうちが頼み〔故事要言〕

人各志望あり、其未だ十分に満足せざる間が、最も頼もしきものなり、葦花は半開、酒は微

酔を賞する所以なり

成らずばろしれ〔小林元備金剛談〕

成るもならぬも次第〔俚言集〕

なすやうにならいでなるやうになる

世の中の事は、よくなるも悪くなるも、皆目に見えぬ神の御しわざなれば、いかに力を盡し
ても、よく爲し得かたき事のあるを、強て爲さんとするは、神の御心に違ふ事なる故に、い
よ／＼あしくなり行くべければ、其すちは止めて、又別事を爲すべし、力を入れずして、速
に成るもわれは、さる心して、強ひたる業せざらんそよき、〔細講の一るべ〕○〔孟子〕云莫之爲
而爲者天也、莫之致而至者命也、〔愚按〕古に云爲之在人其成在天と、左れば人は惟其當に
爲すへき事を爲し、爲すへからざる事を爲さるにあり、運拙きものは、何事を爲すも意の
如くならざるなり、是を長鞭馬腹に及はすともいへり、

◎ら之部

老後のおもひで〔世話塵〕

〔續拾遺集〕平宣時朝臣「おもひ出のあるにはあらぬ古への遠ざかればや戀しかるらん」又藤原秀成

「思ひ出る我世の程の昔だに思へは遠し山のはの月」又源光行「思ひ出る道ころかはれ人毎に

しのふは同じ昔なりけり」

老人の子は影なし

〔錦繡萬花谷〕云、老人之子無影、

老僧が堀にはいる〔世語集〕
老僧の暮にからまつたやう〔俳言集〕
老少不定は世の習ひ

〔新古今〕 暹羅「末の露本の車や世の中の後れ先たつためしならん」〔全〕
老人の冷水 又としよりの冷水〔全〕
老馬道しる

〔二宵話〕 云、九郎判官義経、ひよ鳥越せんとて、路の案内議せらるゝに、武藏の國の住人別府小太郎清重が教へ候らひしは、たどへは山越のかりをせよ、又かたさにもたろはれよ、深山にまよひたらんする時、老馬に手繩むすんで打かけ、先にねつ立て行時は、必道へ出るぞと、教へ候と申けり、判官殿やさしうも申たるものかな、雪は野原をうつめども、老たる馬ぞ道はしるといふためしありとて、白あしげなる老馬を、先におつたて、まらぬ深山へ入たまひし、此は管仲が昔を思ひよられたるか、袖しはられていとやさし、下畧老馬かへつて駒となる。〔俳言集〕○(八十の三歳兒と同意) 老婆心

〔傳燈錄〕 臨濟自黃檗往參大愚、述三度被打話、愚曰、黃檗與麼老婆心切、樂するわるからう、苦するよからう〔俳言集〕引北條時分語

樂は貧にあり〔故事要言〕
〔唐話纂要〕、云賢人多財損其志、愚人多財益其愚、樂は苦の種、苦は樂の種

〔明心寶鑑〕云、逸出於勞而常休、樂生於憂而無厭、〔俳言集〕
樂われは苦あり 又樂にも苦あり〔全〕
樂は身の毒〔全〕
樂が身にあまる〔全〕

落花狼藉〔毛吹草〕同之
〔後江相公詩〕云、落花狼藉風狂後、啼鳥龍鐘雨打時、〔全〕
落花枝にかへらず
〔五燈會元十三卷〕落花難上枝、破鏡不重照、〔嚴草〕
落書に名筆なし

來年をいへば鬼が笑ふ〔世語〕○來年の事言へば鬼がわらふ○あすの事いへば鬼が笑ふ

〔南史〕に云、劉伯龍少くして貧薄なり、武陵の守となりし頃、貧尤甚し、左右を召て什一を

營をまんとす、金を隠し利足忽一鬼あり、手を撫ちて大に笑ふ、遂に止めて曰く、是を管子に聞く

釜鼓滿れば人是を概す、概はどかささいふ物にて樹の外へあまるをかきをさすなり人滿れば天是を概す、夫貧にして安んずる事

を知らず、鬼の爲に笑はる、富んで足るを知らざれば、天の爲に概せらる、只よく貧富に居

るもの、天概を施す所なし、鬼も亦いづくんぞ擲捨せんや、〔荒井野民談資〕

來年の春鬼をつるやう〔傳言集〕

猥子野心をさしはさむ〔全〕

勞して功なし

〔管子形勢篇〕云、強不能告不知、謂之勞而無功、〔三畧〕云、釋近謀遠者、勞而無功、又見

〔荀子〕〔莊子〕、

◎む之部

むけんの鐘をつけば金錢が涌き出る

〔筆の儘〕白鶴門人遠江國佐野郡無間山を、あはが嶽といふ、毎年二月初午の日近里の老若此山

に登はり、中略 彼鐘を埋めたる跡とて、山の頂に岩石二ツ三ツあり、苔滑に、木の葉道をふさ
き、木の根岩角に取つき、登る事堂より五丁計り、極の枝を伐て、逆まにさし侍れば、鐘を
ふきたるに同じとて、參詣の日は、數多鐘をさし、散米散錢を蒔ちらして、人を誤らしむ、余
むかし、〔日本鹿子〕とかやいふものを見侍りしに、當國の名産、名所、社等の由來等を著はし
此鐘の事を書して、撰者の評を加ふ、いつれの世にか有けん、住僧法印つくくもへらく、
菩提を發し迷ひの雲を拂ひて、衆生に善心を勧むる功德を失ひ、慾心を起して、地獄の縁を
求むる事、此鐘のある故なりとて、井の中へ埋むとせん、さもわるべき事なり、彼撰者は、
元祿の頃、余か父兄子弟の困あるを以て、開版の書東武より到來す、其後火災の爲に失て、
鐘に覺せず〔中畧〕按するに、慶長年中より古への百姓町人、金銀をば見る事も稀なり、猶寺院
とて、田舎は鐘を鑄て、鐘樓を立る事もなきに、此寺適々鐘出來て、高き山なれば、五三
里の間へ鳴響く、兒童怪み、此音は何ぞと父母に尋れば、あれは、今迄は見た事もなき、鐘と
いふものぞといふを聞て、あて字交の、無間の鐘ともおぼはぬらん〔秋齋問語〕に、無間の鐘の
事、平生米を喰はず、飯を蛭の如くにおそれ、鹿食をたべ、此心を以て、ままつ儉約すれば、
間なく富有になるとの事のよし、鐘は金の字の和訓をかりしものなりと、慈眼院殿日録にあ

り、此書今、京の相國寺塔中、慈眼院にありとかや、
無明の酒に酔ふ。

〔秘藏寶鑰〕云、徒縛妄想之繩、空醉無明酒、〔本朝〕○〔太平記松岡城周章〕赤松最期の酒盛
の所に、無明の酒の酔の中に、近づく命を哀なりける、
無理が通らば道理引込め。〔俳言集〕

〔梅園叢書〕物は理によりて服するやうにありてこそ、そのわかちもあれ、百姓の水論しける
を聞きしに、一人の男何やらん云ひて、此の事が目にはかゝらざるか、目は何の爲のものな
るやといひければ、我か目は面の文りなりと、少しも負る色なし、かくいはんには、肝心の
理言はんとも、瓢箪にて鯨押さゆる類なるべし、人食犬の様なるものなれば、僻事いはんと
も除て通すべし、

無理に行かずのくせ馬をせむ。〔世語〕
無我無心又無我無中
無鬱大食
無筆の讀める顔

心に手をあてゝ寝ればうなざる。〔俳言集〕

うなざるゝは壓をよめり〔説文〕に、夢驚也〔類篇〕に、眠不祥也とあり

心に針をうつ。〔全〕

心に一物がある。〔全〕

心の炎をさます。〔全〕

麥飯にて鯉をつる。〔毛吹草〕

麥としようどめは踏むがよ。〔全〕

〔倭訓栞〕俗に慈花の芽、踏の蓋としようどめといふ、俗諺も是をいへるなり、めは芽の義な
り、〔俳言集〕

麥は百日の播期に三日の刈句。〔全〕

麥の出穂には火をふらせ。〔晴を好といふ〕〔全〕

昔の劔今の茶刀。〔毛吹草〕〔大和故事〕同之

是は古きものは今の用に立ち難き陰なり。〔俳言集〕

昔の因果は皿のはたまはる、今の因果は針の先をばる。〔毛吹草〕○昔は車の輪今は錢の輪。〔俳言集〕

昔のなにかし今の金貸し〔俳言集〕

昔は昔今は今

蟲くひも蚤擇の便〔世語集〕

蟲くひ箇に物のはさまるやう〔全〕

蟲も踏み殺さぬ人

〔花千句〕に「こはいかに燗め酒の酔狂」と云ふ句に「常は虫をもふまぬ心根」〔俳言集〕

娘一人に七藏あけた〔全〕

〔陳蕃上疏〕に、盗不過五女門、

娘一人に聲八人〔全〕

聲は座敷からとれ、嫁は登所からとれ

むかふ顔に矢たさず〔俳言集〕

〔唐語彙要〕虎不食伏肉

向ふ三軒兩隣

是は遠き親類より近き他人と云に同じく、隣保相助くる所以なり、予東京に寄寓し其實況を

見るに、住居數年未だ隣人の面を識らざるものあり、甚しきは、對門に死喪あるも、我は祝

旗を掲げ、歌舞管絃毫も相憚らざるものあり、蓋異流の人雜居するに由るへさる謔に相反せり

むぐらもち日をろねむ〔俳言集〕引蟬打追加〕

むぐらもちの岩に當つたやう

むくろと三年磨いても黒い〔俳言集〕引蘇寺玉山彦〕木槩子は白くならず〔民のかまど〕

紫はさめやすし

蒙古高勾麗の鬼

後宇多天皇弘安四年の秋、蒙古國より、六万艘の兵船を浮かべて、日本を攻む、高勾麗の者案内

者となり、筑前國博多まで着船す、八月一日俄に神風夥しく吹て、蒙古の兵船悉く破損す、是を

世にむぐりの鬼とて、怖ろしき事に言ひ習はせり、蒙古は元朝の本の名なり、高勾麗は高麗の

事なり、康富の記にこぐりと訓せり、國裏と書くは誤なり、〔草〕○小兒の暗さを止るにいへり

六日の菖蒲〔漢語大和故事〕同之○六日の菖蒲十日の菊

時におくれて用に立たぬ事をいふ、菖蒲は五月五日に用ふる物なれば、六日に至ては無用の物

となる也、〔夫木集〕表内大臣「いかにせん今は六日のあやめ草ひく人もなき我身なりけり」〔全〕

○〔平家物語卷十一〕四國をば九郎判官せめ落されぬ、今は何の用にかわふべき、六日の葛蒲
會にあはぬ花、いさかひはてのちさき木かな、とそ笑はれける、
心さし所をせよるとみづづが出る〔俳言集覽〕
武藏野八百里〔全引太平記〕

◎う之部

馬の耳に風〔毛吹草〕全之

〔東坡六言詩〕青山自是絶世。無人誰與爲容。説向市朝公子。何殊馬耳東風。〔騷草〕
馬に道まかする

〔韓非子〕云。管仲從桓公伐孤竹、春往冬還。迷感失道。管仲曰。老馬之智可用也。仍放老馬而
隨之遂得道〔朗詠詩〕雪中放馬朝跡跡〕歌「夕されは道も見えぬとふるさとほもと來し駒に
まかせてそ行」〔全〕

馬には騎つて見よ人には傍て見よ

〔史記〕云。相馬失之瘦。相士失之貧。是俗諺と語勢相似たり〔全〕
馬にのるまでは牛にのれ〔毛吹草〕

馬屋があけば小牛をつなく〔俳言集覽引藤寺玉山巻〕
馬疲ては毛長く人貧くしては智短し〔全引雜打〕

〔朝野僉載〕に人貧智短、馬疲毛長、
馬にまじりたらん牛

やくにたゝぬ事なり〔空物語國讓上〕われは馬にまじりたらん牛のやうにて、何事をかは〔皇朝古
語〕

馬を鹿鳥を驚〔俳言集覽〕

馬の頭に、牛の頭〔全〕

馬は赤馬、牛は黒、牛、猫は雉猫、犬は白犬、(是を良とす)〔全〕

馬方船頭御乳の人〔全〕

是は世に制すべからざるものをいふ、凡て人を要して強丐する類、御乳の人とは乳母附の者を
いふ、嬰兒を質にとりて跋扈する故なり、〔堯山堂外記〕に元柏子庭詩可惜、世間何物最堪憎、蚤
虱蚊蠅鼠賊僧、船脚車夫并晚母、濕柴爆炭水油燈、
馬のまじりつやうまづつにのをか中くほれいりくれんどう

〔徒然草上〕資季入道へ具氏宰相の問ひし、其頃の謔なり、抄物にも其名さだかならざるよりいへり、今おもふに馬結鬃狐尾敷、中窪折入俱轉倒なるべし、是は謎字隠語の類にて、おさやかならぬ事もとよりなるべし、〔類聚名物考〕

馬を壁に乗かくる〔俳言集覽〕

火急なる喻なり、〔和漢珍書考〕云、唐志七卷劉禹錫が辭に、其難如頻策馬進壁面、馬腹持の人腹しらす

摩食既飽道人朝飢。〔文選〕郭泰機答傅咸一首。况復已朝餐。曷由知我餓。〔全〕馬の頭さは家に懸るものあり

〔萬葉集〕監津山打越去者我乘有馬曾爪突家戀良霜〔夫木抄〕に「馬家路には石ふむ山もなきものを我まつ君か馬のつまつま」〔全〕

馬の止動狐の困快

倒置の喻なり〔韻鏡九弄和解〕に、世人皆言、狐に困快の差わり、困々却て吉、快々却て凶、馬に止動の誤わり、止々却て走り、動々却て止る、愚案するに俗に吼噓の字を用ゆ、俱に信用するに足らず、〔全〕

馬に念佛又馬の耳に念佛〔全〕
馬を牛にかゆる

〔事林廣記〕云。得一牛還一馬。〔本朝俚言〕

牛の前にしらぶる琴〔毛吹草〕同之 ○牛に琴をかする〔本朝俚言〕

〔野客叢書〕云、對牛彈琴、謔是に本づけり、〔雜草〕○〔明心寶鑑〕云、四皓謂子房曰、向獸彈琴、徒盡其聲、

牛の角を蜂がさす如し ○牛の角を蚊がかぢる

〔五燈會元〕云。阜州根慶院道匡禪師曰。蚊子上鐵牛。無汝下紫處。又見禪家求。是謔に同し、

〔本朝俚言〕

牛にひかれて善光寺参り

〔養草〕に云ひかし信濃國善光寺近邊に、七十にあまる姥ありしが、隣家の牛はなれて、さらしをける布を角に引かけ、善光寺にかけ込みしを、姥おひゆきて、はしめて靈場なる事を知り、たび／＼参詣して後世をねがへり、これを牛にひかれて善光寺参りと言ひならはす〔犬著聞集〕に延寶年中、牛の善光寺に参りしことをのせたり、〔全〕

牛は牛づれ馬は馬づれ〔毛吹草〕全之

〔列女傳〕云。齊襄王曰。夫牛鳴而馬不應。非不聞牛聲也。異類故也。〔誠齋雜記〕云。韓憑爲宋王舍人。妻何氏美。王欲之捕。舍人築青陵臺。何氏作鵲歌。々曰。烏鵲雙飛。不樂鳳凰。妾是庶人不樂宋王。〔本朝僊傳〕 ○〔吾吟我集〕「觀音や天神参りする日ころ牛は牛づれ馬は馬づれ」

牛はねがひから鼻を通される。○牛は願ひによつて鼻を通す〔僊言集〕

〔淮南子原道訓〕故牛岐蹠而戴角。馬被髦而全足者天也。絡馬之口穿牛之鼻者人也。〔類聚名物考〕 牛を馬に乗りかへた〔僊言集〕

〔愚案〕馬にのる迄は牛にのれと云諺あるを見れば、牛を馬に乗り替へたるはよき方なるべし、〔故事成語考〕に、牛を以て馬に易ると云は、晋の元帝を諱るなり、注に云、晋先帝名容、係瑯琊王觀之子、初瑯琊王妃、與小吏牛金相通、而生容、是爲元帝、雖姓司馬而寔姓牛也、とありて、語相似たれども、諺とは其意全く相違せざるが如し、

牛の籠ぬけをするやう〔全〕

牛のしりがひはづこれなし〔全〕

うしの日の長引き

〔振河狂歌集〕「丑の日に思ひうめてやだらう」とわはて長引戀もするかな〔全〕
内のさゝやき外のさよみ ○始のさゝやき後のさよみ〔はの部に出づ〕

〔管子〕云、不言之言、聞於雷鼓、註、常言之言則無不聞故曰聞於雷鼓、〔本朝僊傳〕
内股〔世語〕 内股〔世語〕 内股〔世語〕

〔吾吟我集〕「物の氣につくはどならば内股の膏藥のごと我もはなれし」〔愚按〕 兩可にして決斷なきを、内股膏藥といふ、例へば、善にも就き、惡にも就き、理をも是とし、非理をも是とするが如く、打ちつきべつたりなるをいふなるべし、

内胃を見ぬ〔僊言集〕
〔堀河歌狂集〕「今はとて思ひの緒がされて内胃をや人に見られん」〔吾吟我集〕「うちかぶと今は忍びの緒をどきて降参しつゝ思ひはらさん」

内〔學友抄〕云、以小兒未練頭父母耻辱、以父母緩免露登山始席、内不掃巾馬、外方振毛是、〔全〕
内はだかりの外すばり〔全引藤寺玉遊山〕 又内〔全〕ひるがりの外すばり〔すばりはすばまりの約なり〕

内から火を出す〔俳言集覽〕
 内は火がふる〔全〕挑灯はどの火がふる〔て之部参看〕
 内劣りの外めでた〔全〕
 内の前で瘠犬が吠る 又 内の前の瘠犬〔全〕
 内を外にする
 後の目壁の耳〔俳言集覽全引天正太平記師直著修〕
 後神にひかざる〔全引通盛監〕
 後暗いは鬼の餌食〔全引北條時分隠留〕
 後暗ければ尻餅つく 全上
 後あてがひ〔俳言集覽〕
 運の矢が空から落る〔世語盡〕
 運命は人を問へ、天心は人の心に示す〔俳言集覽引初井系日記〕
 運は天にあり〔天和故事〕○運は天にあり鎖は胸にあり〔一笑記〕
 〔論衡〕云、人命總於天、吉凶存於時

運は子にあり
 運盡ければ智慧の鏡もくもる
 魚を猫にあづける

〔史記刺客傳〕云、是謂委肉當餓虎之蹊禍必不振矣〔木朝隱〕
 魚の木にのほる如し〔毛吹草、和漢古語〕
 魚の目に水見えず人の目に氣見えず〔全〕

〔埤雅魚龍篇〕に陰陽自然變化論曰、龍不見石、人不见風、魚不見水、鬼不見地、
 魚の水にはなれたやう〔全〕
 魚心あれは水心あり

〔小町踊〕春上、春水「水心知りて流るゝ氷哉」〔全〕
 鶺鴒の目鷹の目 ○鶺鴒の目鷹の目の中

目高の人々の中と云事なり〔毛吹草〕○〔世事百談〕に、目かぞをつけて人を見るを、諺にうのめた
 かの目にて、油断のならぬ杯いふ事あり、此二鳥は、目の鋭きもの故に、たとへて言へる事
 どのみ思ひたるに、〔六俳園立路隨筆〕に、世の諺に鶺鴒の目といふ事あり、いかなると事

も思ひわかたでありしに、硫黄にうの目たかの目といふありて、いつれも上品なり、是にて思へば、劣らざるを言ひ侍るなるべし、硫黄うの目、鷹の目、ひくち、此三種の外なし、ひくちといふは、附木などに用る硫黄なりといへり、かゝれば硫黄の黄なるが、彼の鳥の目の色に似たる故なるべし、

鵜の目になつてさかす〔俚言集覽〕
うのまねをする鳥かならず水をくらふ

〔宗祇法師廻國雜記〕に云、上野國烏川にて宗祇「とりもぬぬ魚の心もはぢもせでうのまねしたるからす川かな」〔本朝俚語〕

瓜の蔓に蒚子はならぬ

〔唐話纂要〕云、種瓜得瓜、種豆得豆、〔山谷詩〕涇流不濁渭、種桃無李實、注俗諺云、種李不成桃、種瓜不成豆、〔俚言集覽〕○〔事林廣記〕種麻得麻、種豆得豆、天網恢々、疎而不漏、〔愚案〕此諺子の親に似るに喩ふ、然れ共漢語の意は否らす、善に福し惡に禍するをいふ、即ちまかぬ種ははへぬと云に同し、
瓜をこはううつはものをまうけよ

〔大鏡關白道長公傳〕に、瓜をこはううつはものをまうけよと申す事あり」と、其頃の諺なるべし、〔本朝俚語〕

瓜を二ツにわりたる如し〔毛吹草 和漢古語 民のかまど〕（顔のよく似たるを云）
氏よりうだち〔毛吹草〕〔世語叢〕〔俚言集覽引北條時分撰〕

〔史記陳涉世家〕に、侯王將相寧有種乎、と此意に近し〔論語〕に犂牛之子騂且角、雖欲勿用山川其舍諸、〔吾吟我集〕油斷なくこやしかくればよきおんの茶もや宇治よりうだちなるならん」
氏なうして玉の輿〔世語叢〕 女は氏なうして玉の輿にのる〔遠之部參石〕
氏神のやうにおもふ〔俚言集覽〕
うそ八百

〔八百のうそを上手にならべても誠一つにかなはざりけり〕〔圭從心得草〕
うろはあとからはげる〔俚言集覽〕
うろから出たまこと〔全〕
うそは泥棒の始まり
うろらしき誠はいふとも、誠らしきうそはいふな

歌にばかりうたふて居る〔毛吹草〕
歌物がたりの歌わすれ〔和漢古語〕

〔孔子家語〕云、魯衰公謂孔子曰、有人好忘者、移宅乃忘其妻、孔子曰、有人好忘甚於此者、
樂紂之君忘其身、

歌のかへしをせされは蛇になる〔世語蓋〕

歌ひ長じて舞となる〔伊保物語〕

うたふも舞ふも法の聲〔毛吹草〕同之

〔後拾遺集〕選女宮木「津の國のなにはの事かのりならぬ遊び戯れまでとこそさけ〔拾玉集〕慈圓

「いつくにか我法ならぬ法やあると空吹風にとへと答へす」〔無草〕

上米をどる〔世語蓋〕

うへしらす〔和漢古語〕

上を下へかへす

〔源平盛衰記〕に、頼政化物を射落しければ、貴賤上下女房男房、上を下へかへし、今より百年
ばかりも以前、江戸東叡山の花、見さかりなりし頃の句に、「上を下へエイトウ山の花見哉」

〔俳言集〕

上見ぬ鷺

鷹は、鳥を一口食ふては、空を見しする、鷺の來るかど氣づかふなり、鷺は其用心なし、

よてかくいへり、〔和訓栞〕

上を見ればはうづがない〔俳言集〕

古歌に「上見ればはよばぬ事の多かきりさ笠着てくらせん己が心に」〔唐話纂要〕に、比上不足、

比下有餘、

兔も七日なぶればくひつく〔全〕

兔兵法〔和漢古語〕

〔吾吟我集〕「獅子奮迅虎らん入をや真似ぬらん同じたぐひの兔兵法」

兔の毛の末程も

毫末の義なり、兔は其毛至て細し、よりに譬とせり、うれにたまる塵を兔塵と云ふ、梵書に
見えたり、秋毫は秋に至ていよゝかれるをいへり、〔和訓栞〕

海の物とも川のものともつかぬ〔俳言集〕

海に千年川に千年〔全〕○山に千年川に千年とも云
鶯の谷渡り

〔鷹筑波〕大和田又三郎氏滿「鶯も尺八吹て谷渡り」〔全〕

鶯の巢の郭公〔全〕

賣物に花をかされ〔毛吹草〕

賣みては長者

「みて」とは崇也、終也、はハわと呼、賣終の物は、價を低折して賣るもの故に、賣者の心長
者の如し、〔俳言集覽〕

賣り詞に買ひ詞〔全引、カナ、ホシ、大徳故事〕

閨年は片袖足らぬ〔俳言集覽〕

閨年は猫も杓子も子を産む

陸奥出羽にては、賣女を杓子と云、〔全〕

有爲轉變の世の習ひ〔全引太平記〕

有想無想

俗に取まじへたる事を云ふ、〔法華經〕に云、世界六趣四生、衆生、卵生、胎生、濕生、化生

若、有形、無形、有想、無想、非有想、非無想、無足、二足、四足、多足、〔嚴華〕

うさぎ物は宵に喰へ、腹の立つ事はあらず言へ〔世語集〕

うさぎ物に砂のはいつたやう〔俳言集覽〕

腕なしのふりずんばひ 又腕なしの振角力〔全〕

うでくびをにぎる

人にねもねり取入るをいふ、〔盛衰記卷十三〕諸亭にうでくびをにぎらす、〔全卷十四〕事に相
傳の主を捨奉て、今更平家に腕くびをにぎらん、〔皇朝古語〕

卯月の中の十日に、心なき者にやどはれるな〔民のかまど〕

卯腹、辰股、寅脊中、

是は灸するを忌む事なりといへり、卯の日は腹に灸せぬもの、辰の日は股、寅の日は背部に
灸せぬものといひ習はしたり、

樽をいへば主が来る〔北條時分器器〕樽をいへば影がさす〔以上俳言集覽〕

うぶの薪に下女の迷惑（うぶはなま木をいふ）〔全〕

獨活の大木蓮木刀〔全〕○獨活の大木柱にならず。
漆千桶に蟹の足〔全〕

蟹は漆に毒なり、少量を入れは漆忽腐敗すと云ふ、是人の悪事は小と雖も、人を傷くる事大なるに喩ふ、
浮世は神國、身はまじなひ

〔日本紀神代卷〕云。大己貴神與少彥名神。爲顯見蒼生及畜産。則定其療病之方。又爲攘鳥獸昆虫之災異。則定其禁厭之法。是以百姓至今咸蒙恩類。〔神代直指抄〕云、大己貴少彥名二神の病をれさめ、生類の災をはらひるふ一流、今の世まであり、病をれさめたまふ術は、中ごろ異朝より、醫書渡り來りて、すたりしよし、神代外録に見えたり、一書に云、孫子邈か千金方、日本に渡りて後、日本療病の方絶えたりと云、又神代のまじなひの法も、今は絶えて傳はらず、〔本朝世説〕
初子持は山の坊主もれどろかす。〔俚言集覽〕(大盛りの飯を食するの形容にいへり)うつれはかはる

〔新古今集〕「袖の露もあらぬ色にぞ消かへるうつれはかはるながめせしまに」〔群書類〕

梁の燕は子故の闇にまよふ。〔世語類〕
梅を伐らぬ馬鹿もあり、櫻を伐る馬鹿もあり。〔俚言集覽〕
梅といへば唾がたまる

世の諺に、口の渴たる時梅子といへば、唾のたまると云事は、世説に云ふ、魏の曹操の梅山の故事に出たりといふ、然るに〔首楞嚴經〕にも出てたり、何れを先とせんか、但楞嚴經は佛説にて、前に在りし事は明かなれども、譯者元魏の人なれば、其前後知る可からず、〔首楞嚴經〕云、阿難譬如有人談說酢梅、口中水出、思蹋懸厓足心酸澁。〔類聚名物考〕
打出の小槌

應養隱笠は、古歌にもあまたよみたれども、打出の小槌の事を、しるしたるもの少なし、しかれども、〔平家物語〕祇園女御の段に、是ぞ誠の鬼とれはゆる、手に持ちたるものは、さこゆる打出の小槌なるへし云々、〔盛衰記卷之二十六〕にも、打出の小槌の事見えたり、是ど同談と見られたれば、ふるく云ひ傳へたる事なるべし、〔康頼の寶物集卷之一〕に、されば人の寶には、打出の小槌といふ物こそ、よき寶にて侍りけれ、廣野に出て居よからん、家や面白からん、妻男や遣ひよからん、從者牛馬食物衣物など、心にまかせて、打出してあらんこそ

中略 又人、傍より指出て云ふ様は、打出の小鎗は、目出度き寶にてあれども、口惜き事は、物を打出して、楽しくて居たるほどに、鐘の聲をだに聞つれば、打出したるもの、皆ころころと失る事の侍る也、されば目出度て居たりとは思へども、左様の時は廣き野中に、只獨り裸にて居たらんこそ、淺ましかるへけれ、中略 昔より隱袋の少將と申物語も、有間敷事を作て侍るどころ承はれ云々、と見ゆたり、是則〔酉陽雜俎續集〕の、旁色の得たる金椎子と、和漢相似たる談なり、〔狹衣〕にかくれみの、中納言やればすらんと云事あり〔寶物集〕にかくれみの少將の物語と云事あれば、かくれみのといへる物語、ふるくありしなるべし、今傳はらず、〔晉書集〕

乳母の乳のわがりたるが如し、〔和漢古語〕
うてはひびく、たうけばなる、わたればくなく、〔全上句〕民のかまを
飢にのそみて苗をうゆ、〔全〕
うまれぬ先の襪襟定め、〔毛吹草〕同之

〔莊子〕 見卵而求時夜、見彈而求鴟炙者乎、是此の諺と意相近し、〔蘇東〕○〔吾吟我集〕「冬にたつかすみの衣はさは姫のうまれぬ先のひつぎさためか」

生の恩より育ての恩

憂きは心にあり、〔世語〕

怨みは恩で報せよ、○わたは恩で報せよ、〔世語〕

雲泥萬里、〔世語〕○雲泥の遠ひ

〔李白詩〕會面隔雲泥、〔橋正通詩〕花月一窓交昔陸、雲泥萬里眼今窮、雲泥、霄壤、天淵、月

離等皆懸隔の謂なり、

優曇華

希にして遇がたき事の喩也〔楞伽經疏〕云。優曇華於世間中。無人曾見者。依中國此樹直從條出菓。其大如椀。其爲香美而無華故。過去未來无見者。〔法華經〕云。其人甚希有。遇於優曇華。〔源氏若菜卷〕に「うどんげの花待ねたる心地してみやまざくらにめぐらうつらね」〔久安百首〕に、安藝玉椿光をみかく君が代にもくかへりさくうどんげの花〔東鑑〕に云、日本にては芭蕉の花をうどんげといふ、〔蘇東〕

の之部

の之部

能ある鷹は瓜かくす

〔老子〕云。知者不言。言者不知。是諺の心に叶へり〔本朝便覧〕
能なし犬の高はえ

〔莊子〕云。狗不以善吠爲良。人不以善言爲賢。〔全〕

能なしの口たゞさ〔便言集引北條時分語〕

能化つく

佛家にて師を能化といひ、弟子を所化と云ふ、世俗、いやしき者の、ねめぬふりしてはせま
はるを、かれに比していへる諺なり、〔便言集〕

能書筆を擇まず

〔留青日札〕に、能書不擇筆、能飲不擇酒、〔清暑筆談〕に、或謂善書者不擇筆紙、〔全〕○〔唐書歐陽傳〕褚遂良亦以書自名、嘗問虞世南曰、吾書孰與詢、答曰、吾聞詢不擇紙筆皆得如志、君豈得此、〔又裴行儉傳〕行儉常曰、褚遂良非精筆佳墨未嘗輒書、不擇筆墨而妍捷者、余與虞世南耳、〔王肯堂筆塵〕能書不擇筆浪語也、古來唯稱率更令不擇筆、然晉人滄意至歐陽漸失矣、能書のよめぬ所にさゝめあり

野に臥し山を家とす

是は何の道によらず、修行するの劫をいふ、〔法華經提婆品三〕釋尊の求法ありし事を説きたまふ所に、採草汲水拾薪設食とあるも、求法の爲、山に入りて、阿私仙につかへ玉ひしありさまなり、〔故事警言〕

野らの節句働き〔便言集〕

野中て鐵砲打たやう〔全〕

芥の眼に蚊のまつげ〔世話書〕

蚤の息さへ天へあがる ○農民の息か天に上がる〔隠草〕

〔アンラカス〕に「及はぬ戀をするぞをかしま」と云句に、「蚤の息も天にあがると打なげき」、愚按するに、農民の説非なるべし、「蟻の思ひも天へあがる」、又「蝦蟇の息さへ天へ上かる」などいふに同じかるべし、〔便言集〕

蚤蚊の夜づめ、蠅の朝起さ〔全〕

飲みも截らず噛みもさらす〔毛吹草〕〔和漢古語〕同之

是は、愚鈍暗昧の人は、常に言ひ聞かざる事をも、一往や二往にては、合點をする事能はず、

心に吞込なきが故に、兎角の應諾を得せぬ様の事を云ふ、元の王元福が〔醫方大全〕に云、丹溪曰、痰に數種あり、熱、濕、酒、食、風、寒、老、の七種なり、酒痰の症に、痰飲と云ふわり、其病、咽に痰纏ふて、吐けども出せず、飲めども入らず、喘々として、呼吸坐臥に、促迫して安からずとあり、人の愚鈍にして、不合點なるに喩へて、是より言出せる詞なり〔故事

要言]

飲むには減らず吸ふにへる〔俳言集覽〕

飲まねば薬も功能なし

鑿といはゞさい槌もだせ 又のみとゞへは槌〔俳言集覽〕○のみとゞいはずさい槌〔淺淵のいるへ〕

鑿先三寸の運〔金堀の諺〕〔全〕

暖座と腕推し〔全〕 ○のれんと相撲

のうれんにもたれるやう〔全引森寺玉山書〕

糊氣かはなれた

腹のへりて、力のなきを、のりけがはなれたとも云、〔韻會小補〕。餽字注。今人以薄粥塗物。

謂之餽紙餽帛。則餽者以餽食口之名。故云餽其口也。愚按、餽糊音同、〔俳言集覽〕

糊賣婆の糊をこぼしたやう〔全〕

のいて通せ酒に酔ひ〔全〕

呪咀事も口から呪咀

〔上略〕〔吳志〕に云、丁固、或夜、吾腹の上に松生たりと夢みけるを、或人占て、松の字は十八

公と書けり、君十八年を経て、公の位に封せらるへしといへり、果して公となりけると也、

又〔酉陽雜俎〕に云、孫望と云者善く夢を占ふ、或人戸前に松生したりと見て、是を問ふ、孫

望か云、松は人の塚の間に植るもの也、汝死すへしといひしに、違はずやがて死せしとあり、

是松を圓せする事は一ツにて、中る所死生を殊にしたり、皆人の口より極めたる証なり、〔故

本要言]

後の親を親とせよ

〔授業編〕に出づ又〔源氏筆本〕にまうどの後の親中略にげなき親をもたるかな〔俳言集覽〕

後の千金より今の百文

是は飢渴を濟ふの急なるをいふ、〔莊子雜篇外物〕云、莊周家貧、故往貸粟於監河侯、監河侯

曰、諾、我將得邑金將貸子三百金可乎、莊周忿然作色曰、周昨來、有中道而呼者、周顧視、車

轍中有鮒魚焉、周問之曰鮒魚來。子何爲者耶、對曰、我東海之波臣也、君豈有斗升之水而活我哉、周曰諾、我且南遊吳越之王激西江之水而迎子可乎、鮒魚忿然作色曰、吾失我常與、謂我無所處、吾得斗升之水然活耳、君乃言此、曾不如早索我於枯魚之肆云云、
咽がかはく

身に應せざる、美服を着たる者を嘲りて、喉が渴くであらうといふ諺、今も老人は常に言ふ事なれど、其原は服の事にあらず、〔醒睡笑〕五の卷に、小性給仕するに、金作の脇差さしたる人ばかり、茶をしげくはこび、餘の方へは目をかけず、未坐の人、彼が心を推し、我脇差を一二寸抜き、ろこな若衆、この鉋にも、ちと茶を香ませあれといふた、といふ事あり、按するに此落し咄、むかしは普く人口にありし故、金作りの刀をさしたる者を、喉がかはくかど、戯れに謂ひしなるべし、是れ茶を人の香ますへき料に、金作りをさしたるやと、咎むる意なり、夫が遂に美服の事にうつり、喉がかはくかといふべきを、喉が渴くであらふと、訛りしとおぼゆ、〔醒睡紙料〕○〔世説故事苑〕に云、他を羨むを咽か乾くと云ふは〔藝文類聚七十〕二、晋東晰餅賦曰、擊器者紙唇、立侍者乾咽、此語を取て云へるなり云々、
咽もど過ぎればあつさを忘る〔俳言集〕

鑿屑もへばふ〔和漢書〕全之 ○ ながくづもいへばいはるゝ

〔鷹筑波〕に「いへば言はるゝことこの葉の末」と云ふ句に「木の枝にのこぎりくづをかきませるゝ」〔俳言集〕
のるかろるかやつて見る

○く之部

口故に身はたす

〔淮南子〕蘇秦死於口、〔帝範〕口者關也、舌者兵也、出言而不當自傷也、〔明心寶鑑〕高皇帝御

製曰、一星之火、能燒萬頃之薪、半句之非言、折盡平生之福、〔本朝俚語〕

口ふたつで物をいふ

〔居家必用〕兩口二舌、飾虛造謔、〔國語〕言爽日反其信、〔全〕

口のはにかかる

〔榮花物語〕花山院、妻子珍寶及王位といふ事を、御口の端にかけさせたもふ、〔御撰集〕ある所にみやつかへし侍りける、女のわたなたちけるが、もとよりれのれがうへは、そらになん口のはにかけていはるるなど、うらみ侍りければ、よみ人しらす、「あはれてふこところつねの

口のはにかかると人を思ふなるらむ」〔全〕
口・乳・臭・し

〔漢書高祖紀〕口猶乳臭、注師古曰、乳臭言其幼少〔釋名〕○〔又高帝紀〕王問、魏大將誰、曰柏直、王曰、是口尚乳臭、不能當吾韓信、
口・わ・猶・黄・なり〔和漢古語〕

〔淮南子〕古之伐國、不殺黃口、〔北史崔暹傳〕崔悛竊言、文宣帝爲黃口小兒、
口・は・禍・の・門

〔童子教〕口是禍之門、舌是禍之根、

口から先に生れたやう

口に年貢はいらず

口と財布はしめるに利あり

口車にのせる

火車婆ハキヤ

京師江府などにて、悪心の老婆を、火車婆とよぶ、〔因果經〕云、今身作後母、設尅前母兒

者、死墮火車地獄中とあり、末世にては、必火車地獄に落べき婆子なりとて、火車と名付けたるものなるべし、〔謚名録〕に、武后を鬼婆といへるたぐひなり、〔本朝俚語〕
火車は江戸の花

江戸には、火災多きのみならず、徳川時には大名火消杯、そのいでたちの美々しき故に、
云ひしなるべし、

火事後の火の用心

火事場へ燭

火事と葬式にゆけば勘當もゆるさる

君臣合體

〔明心寶鑑〕夫臣以君爲体、君以臣爲心、君安則臣安、臣安則君國安、君上愁臣下不樂、心有
愁体外無悅、〔類聚名物考〕

君父の仇には共に天を戴かず〔俚言集〕

〔禮記曲禮〕云、父之讐弗與共戴天〔同檀弓〕云、子夏問於孔子曰、居父母之仇如何、夫子曰、
寢苦枕干不仕、弗與共天下也、遇諸市朝不反兵而鬪、〔靖獻遺言〕に朱子、戊午黨議序を載す、
く、ノ、部

曰、君臣父子之大倫、天之經、地之義、而所謂民彝也。故臣之於君。子之於父。生則敬養之。沒則哀送之。所以致其忠孝之誠者。無所不用其極。而非虛加之也。以為不如是。則無以盡乎吾心云爾。然則其有君父不幸而罹於橫逆之故。則夫為臣子者。所以痛憤怨疾而求為之必報其讐者。其志豈有窮哉。故記禮者曰。君父之讐。不與其戴天云々。〔同疏義云〕此二句出于曲禮。但彼文單稱父之讐。而此乃添一君字。人或疑以為背經意。然周禮地官曰。國君之讐。抵父。則朱子之言。固有據矣。切勿拘看。

君子二言なし〔民のかまき〕 ○十二言なし〔便言集覽〕

〔法句喻經〕口無二言〔越語〕王曰、無是貳言也、吾已斷之矣、君子之交りは淡くして水の如し〔民のかまき〕

〔禮表記〕云。君子之接如水。小人之接如醴。君子淡以成。小人甘以壞。〔習是編〕云。君子之交也。以道義合。以志氣親。淡如水。故能久。小人之交也。以勢利結。以酒食親。甘如醴。故易怨。

君子は危きに近よらず。薬なければ病なし。

〔傳燈錄〕藥是病、病是藥、到頭兩事須拈脚、亦無藥無病、正是真如多性覺、〔本朝便覽〕 藥人を殺さず醫師人をころす〔和漢古語〕

〔東坡文集〕蜀諺云、學者紙費、學者人費 藥九増倍

薬は九層倍の利ありと云ふ事なりといへり、又一説に、麻醫の薬を服すれば、苦楚を倍するをいふともあり、〔便言集覽〕

薬能がさほとさかず 國に二君なく、民に兩主なし〔十七意法の語〕

〔日本書記〕天無二日、國無二王、〔禮記〕天無二日、土無二王、家無二主、尊無二上、國にぬすびと、〔毛吹草〕 ○家に鼠國に盜〔い之部抄〕

國郷談〔全〕 ○處習ひ國郷談〔和漢古語〕 苦をせねば樂はならず

〔金蓮子現教民要録〕吃盡苦中苦、方爲人上人〔本朝便覽〕 苦樂は生涯の道づれ

苦すらふからう、樂するわらう。

苦界

何事も、十年勤苦すれば、必功效あるをいふ

朽繩にどりつくが如し。○くさり繩杖につく如し。〔毛吹草〕和漢古語

〔尙書〕予臨兆民、臨乎若朽索之馭六馬、是諺に叶へり。〔歴代〕

くさり繩にも取どころ。〔毛吹草〕和漢古語

くさりても鯛ちきれても錦。〔全上〕

くものむに馬をつなぐ如し。

〔説苑〕〔淮南子〕並に云如以腐索御奔馬。〔古今六帖〕人の心をいかたのまむと云句に在原し

げはる「毛の未にはねつく馬はつなぐとも」紀貫之「ある馬をくちたる繩につなぐとも」〔本朝

俚語〕○〔俚言葉覽〕に、くものむ蜘蛛のあみの約りなるべしさればくものむなるべしむに

わらう

脚のあみに風たまたす。

〔和泉式部家集〕「れもはしよわれたる宿にかきくらすくものむかきに風したまらば」〔古今六

帖〕紀友則「脚のあみに吹來る風はどめつとも人の心をいかたのまむ」〔皇朝古語〕

脚の巢で石をつるやう

蜘蛛の子を散らすやう〔全〕

くらげも骨にあふ。〔毛吹草同之〕

〔博物志〕云、東海有物、狀如凝血從廣數方員、名曰鮓魚、無頭目處所、內無藏、衆蝦隨其東

西、人煮食之、是くらげなるべし、今いふ諺の意は、天性受得ざる幸にあふは、くらげの骨

にあふにひとしど、いへる意なるべし、〔夫木抄〕仲正「我戀は海の月をぞ待わたるくらげの

骨にあふ世なりやと」是は俗に、海月と書て、くらげとよむによりて、かくはよめるなり、又

増賀上人「みつわさす八十あまりの老の波くらげの骨にあひにけるかな」〔歴代〕

くらげは蝦を目とす。

〔文選木華賦〕水母目蝦、〔爾雅翼〕水母不能動、蝦附之則所往如意、〔嶺表紀異〕水母有足無口、

眼大如覆帽、不能動、蝦或附之則能往、〔八天眼目〕水母何曾離得蝦、〔淮南子〕に云ふ、ひか

しある國より、敵せめ來れる時、瞽者ありしが、盲者がもとへ、かくどつげしかば、盲者や

がて來りて、瞽者を負ひて逃けしかば、兩人ともに命をたすかりぬ、其得たる所を以てすれ

ばなり、もし盲者につげしめて、瞽者に走らしめは、何ぞたすからんやとあり、是も水母目
蝦と同談なり〔本朝俚語〕

くらげの行列

愚者の一得

〔史記淮陰侯傳〕廣武君曰、智者千慮必有一失、愚者千慮必有一得、〔後漢〕

愚人は夏の虫、飛で火に入る如し。○愚人は夏の虫〔毛吹草〕

〔大智度論〕愚癡多者、如燈蛾赴火、又曰諸欲樂甚少、憂苦毒甚多、爲之失身命、如蛾赴燈火

〔法苑珠林〕如飛蛾見火投之、〔寄歌續集〕「何事もむくひの罪はもれがたし火に入夏の虫もわ

れから」〔本朝俚語〕

愚にもつかぬ

光陰矢の如し〔毛吹草同之〕○光陰矢の如し、時節流るゝ如し、時人を待たず〔和漢古歌〕

〔山谷詩〕日月過箭疾〔邵子詩〕歲華如箭止堪吁、〔古今集〕躬恒「あつさ弓春たちしより年月の

射るか如くにおもはゆるかな」〔全〕

光陰に關守なし

軍中に禮なし

〔史記周亞父傳〕介冑之士不拜、注に、應劭曰、禮、介者不拜、〔俚言集覽〕

軍門に君命なし、戰場に兄の禮なし

〔太平記〕芳賀兵衛入道軍條に云、六韜に、軍中之事、不聞君命、〔全〕

くさき物はふたをせよ〔和漢古歌〕○くさき物に蓋をずるやう

くさき物に蠅がたかる

〔五燈會元〕僧問慧然、如何是祖師西來意、曰、臭肉來蠅、又了元偈曰、蠅了解尋腥處走、芥蠅

偏向臭邊飛、

車は三寸のくさきを以て千里の道をかける〔世語〕

此語〔童兒教〕に出づ曰、車以三寸轄遊行千里路、人以三寸舌破損五尺身、と然れども、諺の

意は稍轉じたり、〔論語〕に、人而無信不知其可、大車無輓小車無軌、其何以行之哉、といへ

るに近し、即ち信を以て萬事を貫く所以なり、

車の兩輪〔毛吹草〕

二者相待て、用を爲すをいふ、〔翁問答〕に、文武は車の兩輪、鳥の兩翼と、申習はし候云云

唇つくれば齒さむし。〔本朝傳記〕

見〔文子上德篇〕又〔左傳僖五年〕宮之奇曰、諺所謂輔車相依、唇亡齒寒者、虞虢之謂也、〔哀八

年〕子洩對吳王曰、夫魯齊晉之屏、屏亡齒寒君所知也、〔按〕戰國策言、唇揭齒寒、揭猶掀也

〔莊子胠篋篇〕唇竭齒寒、竭不可解、似亦揭字之訛、〔通俗篇〕

唇薄きものはよくものいふ。〔漢語大和故事〕同之

〔靈樞逆順肥瘦篇〕妓伯曰、瘦人者皮薄色少、肉廉々然、唇薄輕言、〔靈樞

くせものぞら笑ひ、〔世語盡〕

くせわる馬にのりあり。〔俳言集續引北條時分斷語〕

食はず貧樂

人に諂はず、非義の利を受けず、心を高く、行を正くして、貧なれども憂へざる心也、論語

の一簞食一瓢飲にして、其樂を改めずといへる、顔回の記事より出たり、〔故事類考〕

食はずきらひ

櫛を投れば他人となる

〔東鑑卷四十〕令投櫛之時、取者骨肉、皆變他人之由稱之、〔皇朝古語〕

櫛の齒をひくが如し

使のしげく往來するをいふ、櫛の齒はしげきものなれば、たどふるなり、〔文選景福殿賦〕何

卒叔 既櫛比而橫集、又宏璉以豐敵、〔類聚名物考〕

草むすび

和俗男女婚姻の約をなすを、くさむすびと唱ふ、〔左傳〕に云。魏顆父武子有嬖妾。武子疾曰。

嫁是 疾病則曰。以殉。及卒顆嫁之。曰。疾病則亂。吾從其始也。及敗秦師于輔氏獲杜回。顆

見老人結草以充杜回。回躡。故獲之。夜夢老人曰。余而所嫁婦人之父也。爾用先人之治命。

余。是以報。〔搜神記〕〔搜神披覽〕〔冥報錄〕〔勸懲記〕等に見ゆ〔貞觀政要〕に云預代結草之誠、

これらをもつて見れば、恩を報する事をいふは可なり、男女の縁結のみをいふは不可なり、

思ふに、魏顆が父の妾を嫁せしことによりて、あやまりとなるものなり〔本朝傳記〕。〔類聚名物

考〕に、草結ひとは、旅行く人の、山野の道にまどはじとて、行くべき方の草を結びて、しる

しとすれば、後にゆく人も、夫に隨ひてまどはぬ故なり、或は木の枝をも折る故に、しをり

ともいへり、新撰萬葉集に、柴折と書かせたまふは、假字なり、

草づとに國かたぶく。〔毛吹草〕○草づとに國かたぶく、麥飯にて鯉をつる。〔和漢古語〕

紅は園に植てもかくれなし。〔頼政議〕○紅は園生にかくれなし、櫻は花にあらはる。〔和漢古語〕
くがにまよふ

〔源氏物語〕に、水鳥くがにまよふ心地といへり、〔本朝文粹〕散樂に、莫泥於水鳥の陸歩と見
ぬたり毛詩註にも離渠水鳥而在原、失常處といへり、〔和訓栞〕

竟馬

〔戰國策〕諺曰、以書爲御者、不盡馬情、これくらかけ馬と云ふと異域同譚なるものなり、〔陸軍〕

○〔和訓栞〕に警に作るなり、曰、竟馬といふ警は、木馬稽古をいへり、戰國策に以馬云云、
履新といへども冠とせず

是は貴賤上下の差を、亂るべからずと云喻也。〔史記儒林傳〕云。黃生曰。冠雖敝必加於首。

履雖新必關於足。又〔說苑奉使篇〕云。冠雖敝宜加其上。履雖新宜居其下。〔陸軍〕

管の穴から天をのぞく

〔史記扁鵲傳〕云。若以管窺天以新視文。又云。少見之人。如從管中窺天。〔前漢書東方朔傳〕

云。以管窺天。以蠶測海。〔全〕

會稽の恥をすく

〔史記貨殖傳〕勾踐十年國富、遂報強吳、刷會稽之耻〔全〕○越王勾踐、吳王夫差と戦ひ、夫
椒に敗れ、會稽に保棲す、吳王以て之を圍む、勾踐范蠡の議を用ひ大夫種を使として和を
乞ふ、種膝行頓首して吳王に言ひ曰く、君王の亡臣勾踐、倍臣種をして、敢て下執事に告げ
しむ、勾踐請ふ臣となり、妻は妾となり、遂に悉く其寶器を入る、吳王越を赦し兵を罷
む、勾踐國に反り、身を苦しめ、思ひを焦し、膽を座に懸け、坐臥之を仰き、飲食も亦膽を
嘗む、曰く汝會稽の耻を忘れたるかど、居る事十數年にして、國富み兵強し、是に於て吳を
伐ち太子を殺す、一旦和を講し、後四年にして亦大に吳を破り、城を圍む事三年、後吳王を
姑蘇山に棲せしむ、吳王公孫雄をして成を越王に乞はしむ雄肉袒膝行して曰く、孤臣夫差敢
て腹心を布く、異日曾て罪を會稽に得たり、夫差敢て命に逆はず、君王と成ぎ以て歸る事を
得たり、今君王玉趾を擧て孤臣を誅す、孤臣惟命是聽かん、思ふに亦會稽の故事に倣ふを得
んやと、越王、范蠡の言を用ひ、終に赦さす、吳王自殺す、勾踐會稽に於て屈辱を受けしよ
り、辛酸二十二年にして、其怨を報する事を得たり、是よりして、大耻を雪くに、言ひ習は
したる諺なるべし、

くわはうは寝てまで〔毛吹草〕○報は寝て待て天道人を殺さず〔和漢古語〕

報と果、因果報應の謂にして、善を爲せば善報あり、惡を爲せば惡報あるをいふ、寢て待てとは、求めずして自然に至るをいふなり、世人、果報を利運の事とのみをもひ、利運は勤めすとも得らるべしと思ふものあり、あやまれりといふへし、蒔かぬ種は曾て生へず、天道貴誣ゆべけんや、禍福はあざなへる繩。

〔福冠子〕禍與福如糾纏、〔文選鵬鳥賦〕夫禍之與福兮、何異糾纏、注、字林曰糾兩合繩、纏三合繩、株を守る〔偃書集覽〕

世故に通ぜず、事理に暗きをいふ、〔韓子〕宋人有耕田者、田中有株、兔走觸之、折頸而死、因釋其耒而守株、覬復得兔、兔不可得、而身爲宋國笑、くじらよる浦にゆく〔毛吹草〕和漢古語、雲にかけはし、○雲にかけはし、霞に千鳥〔世語畫〕

雲に梯とは物の及はざるにたとふ、昔大唐に周生と云者仙術ありしが、八月十五日夜、客を招きて月を見る、時に浮雲四方に霽て、月色晝の如し、周生客に語りて云、我よく雲に梯し

て月を取來らん、仍て數百丈の繩を持って、これを虚空になげうち、我是を梯して明月をとるべしとて、繩に駕して天にのぼり、俄にして下り、手を以て懷中をさぐりしが、忽に明月を取出す、大さ一寸ばかり、清光照かゞやきて、寒氣肌にとほりしとなむ、〔世語燒草〕○〔愚按〕霞に千鳥のかすみは、水露なるべし、露をかすみとよむを以てなり、千鳥の聲の、水飛よりもれ聞ゆるをめづるなり、之を雲に梯に對しいふは、意味なきが如し、只雲とかすみと相對して、句となしたるものなるべし、

黒犬にくはれて灰の和滓に怯る〔毛吹草〕〔唐傳奕〕曰、懲沸蕘者吹冷壘、傷弓之鳥驚曲木、是異言同旨の語なり、〔釋草〕ぐりはま

今物の齟齬することを、ぐりはまといふ、はまぐりをぐりばまといひては、聞ぬがたきより出て、言前後なし、義をなさざる譬にいふたるが、轉じて、彼の物のくひちがふ事となりしなり、〔俳諧破邪顯正〕に云清水の瀧を、瀧の清水なといはゞ、作意にもなるべし、祇園林を林祇園といはれまじ、中略 是を連歌にては、半の山とて、大きにさらふ、俳諧にてはぐりはまといふとあり、山の半を、半の山といひては義を爲さず、蛤をぐりはまといふに同じ、下畧〔偃書集〕

蝸の角の争ひ

世のはかなさわざに喩ふ、「莊子」云。有國于蝸之左角者。曰蠻氏。國于蝸之右角者。曰触氏。時相與争地而戰。伏尸數萬。逐北旬有五日後反。「白樂天詩」云。蝸牛角上争何事。「釋草」勸學院の道は蒙求を嚙る「毛吹草」

勸學院は藤原氏の人、學問する所の名なり、「日本後紀」を考るに、天長三年三月に、藤原冬嗣始めて立ちる、「拾芥抄」に勸學院は、三條の北壬生の西にありとす、今其遺址を雀の森と云、うのかみ勸學院にて、盛に學問の行はれし時は、其近林にある雀までも、蒙求を嚙りしと云事なり、是只學問の甚盛に行はれし事を、いはんが爲にいふ諺なり「名〇(和訓栞)に云笑苑千金に雀讀論語と見えたり諺語にいふ勸學院の雀蒙求をさへつると意同し洛の四條大宮の西に更雀寺あり此勸學院學趾なりよて雀の森ともいふ寺號は實方の故事によれり知更雀の故事天寶遺事に見ゆ

窪い處へ水たまる、ひきゝ處に水たまる「釋草」〇窪い處のわくた

「詞不可疑」云大海はくぼきに依て水たまり候やうに「俳言集覽」
鞍馬に福神無く八幡に武所無く多賀に長壽無し

「鹽尻」いつの世の俗諺にや知りかたし中略 是は貧富壽夭皆天にあり祈り求むる事能はずとの譬詞なり「全」

くゞの火は前で焚け風呂の火は奥でたけ「全」

空腹なまわくひ寒さの小便「民のかまど」

くらやみから牛を引出す

首切八丁

九十九久保に百本多(徳川幕府の臣の數多きもの)

公家の位たふれ

關東の食ひたふれ上方の着たふれ

元日市民門戸を閉づ

「藝園日涉」元日市民皆不開正戸、世傳在昔僧狂雲、元旦掛觸髅於杖頭、行示市人曰警悟々々、市人皆閉戸回避、三朝不開正戸蓋自是始、「王世懋民部疏」曰、閩俗重歲首民間不開正戸「俳言集覽」

◎や之部

やノ部

山は富士、瀧は那智、橋は帯、〔和訓栞〕

富士山は高さ一萬四千百七十尺あり、那智の瀧は紀伊國那智山中に在りて、高さ八十四丈、

錦帯橋は周防國錦川（一名岩國川）に架し、長さ百二十五間あり、皆有名のものなり、

山見之ぬさかをいふ〔毛吹草〕

山の神にこれ世見するが如し〔全〕

〔犬子集〕四方を見て慰みたまふ山の神」と云句に、^た櫛や^た廣く海に住らん

山の神には疫神が恐るゝ〔傳言集〕

山に千年川に千年（甘苦を嘗め劫を経たるをいふ）〔全〕

山が崩れても

〔江戸廣小路〕かげ涼し山が崩れよと岩枕 關係〔全〕

山出の事をわすれたか（炭のはねる時呪ひの詞）〔全〕

山のまはれれ獨（私龍斷の意）〔全〕

山の芋が醜になる

〔塵添垣糞抄〕龍蛇争に、魚も龍にこそ、或は蛇のうなぎになるとも、山の芋のうなぎになる

どもいふあり、〔全〕

山の芋で足をつく 又長芋で定をつく〔全〕

山の芋で箸をはるやう〔全引新安手簡〕

山がらに柿ふんぞし〔世話書〕

山がらの胡桃まはす〔全同之〕

〔めのとの草紙〕今参りなごの物したて候やうだいやがて見ゆるもの也山がらのくるみまはすやうにあちこちどりまわしたるばかりにてかいしやうらしく物ぬふなまをしらざれば見かくもさのにて候光俊一山がらのまはすくるみのかくに〔傳言集〕

山からの利根〔世話書〕

山から里 又寺から里ども云〔て之語互看〕

受くべき方より贈るべき者の方へ苞直もたらしたるを云ふ也〔毛吹草〕折くるや山から里へ

すいぢへち〔傳言集〕

山師の玄關前〔全〕 ○齋者の玄關前

山師山ではてる

瘦馬鞭に驚かす〔毛吹草〕〔野語説〕

〔鹽鐵論〕瘦馬不異鞭、弊民不異刑法、

瘦馬の道いろさ〔俳言集〕引他我身の上

瘦馬に十駄〔民のかまど〕

瘦馬に荷が過ぎた〔俳言集〕

瘦我慢貧から〔民のかまど〕

瘦兒にも産神〔全〕

瘦兒にもかゝる〔毛吹草〕〔和漢古語〕

瘦兒にはすね〔毛吹草〕〔和漢古語〕同之

「はすね」は鱗棋頭と云ふ、俗、更瘦の字を用ふ、〔俳言集〕

瘦兒の物をひひしがせびる〔全〕

瘦兒の聲高〔全〕

瘦法師の酢このみ〔世話書〕○瘦兒のすこのみ〔俳言集〕

瘦坊主の齋についたやう〔全〕

瘦・鰯・を・鏡・で・は・ぐ〔全〕
瘦・地・の・豆・の・猿・な・か・せ

〔職人盡歌合〕三十五番 豆賣「戀すれば瘦地の豆の猿なかせ涙の川は我ぞましける」〔俳言集〕

瘦鳥にもへをうつけよ〔和漢古語〕

〔吾吟我集〕「焼鳥にへをどはいへと我はたゞ猫につなでをつけんぞおもしろ」

焼面火に懲りす ○やけど火にこりす〔民のかまど〕 ○やけどして火におちる

〔堀川狂歌集〕早蕨、「やけつらのこりぬたぐひか灰になる山のあたすにもゆるわらひは」〔俳言集〕

〔集〕

焼ばこり〔延焼の事也〕〔全〕

焼ぶどり〔和漢古語〕

〔愚按〕焼肥りは、人家火災を経れば、勤儉を力むる故、家産肥ると云事に川來れり、焼ばこりの轉訛せるにや、

焼野の雉夜の鶴〔俳言集〕○子をおもふ夜の鶴

是れは子を思ふ心の切なるの比喩となせり、〔下河邊長流の歌〕に「夜の鶴焼野の雉子とり」

の思ひもひとつおもひなりけり」又古くは〔詞花集〕高内侍「夜の鶴都の内にこめられて子を戀
ひつゝも鳴わかす哉」〔新千載集〕後三條前内大臣「子を思ふ涙くらべば夜の鶴われれどらもやね
にたてずども」

燒石に水かくるが如し。〔毛吹草〕和漢古語。○燒石に水。

燒木杭に火がつきやすし。〔俳言集〕

燒跡の釘ひろひ。(放埒の後に簡畧をするを云)(全)

燒餅をやく

川柳の句に「燒餅はあつくなつたりふくれたり

藪にも香の物○やふに剛のもの。〔毛吹草〕○野夫に功の者。

〔十訓抄卷三〕藪にはかうの物といへる、兒女子がたとへ、むねをたがへざりたり〔皇朝古語〕

○〔南嶺子〕云、藪にも香の物と云ふ事は、庸醫にも功ありと云ふ諺とのみ思ひしに、予尾張
にありし時、名古屋より津島へ行くとて、海東郡を通りしに、阿波手の森と云所に、藪の中
に壺をふせて、往來の、瓜茄鹽の買人、ろの我が賣る物を納め置き、香の物自然と熟して、
瓜茄子に蓼種を少し加へて、毎年極月廿五日、熱田社の煤拂と、二月初午の日、神供に献す、

兩所より献して、其數も委しく記し置たれども、無川の事なれば畧しぬ、此香の物より、いひ
ひろめたる事に云云〔和漢珍事考〕に云、武備志三十二、司馬達の詞に、野夫功ある者、豈大
丈夫といふべけんやと云へり、又劉長卿か詩にも、韓信何忍意、勿懷野夫功などもいへり云
々〔愚按〕藪に香の物の事、兎園小説に、中井乾齋の筆記最も詳なり、又義等雨談、牛馬問
等、各異同ありといへども、要するに、此諺は、此を假り彼をいふものにして、野夫に功、
又は藪醫に功なるとに、通ずべし。

藪醫師○藪くすし。〔民のかまど〕

〔醍醐隨筆〕或云、くすしのつたなく、わびたるを、藪といふは、藥師かひ求める事なりがたき故
に、藪のあたりをたづねて、あけびすいかづら、せうがひげやうの物、取あつめ薬となして、
病人にあたふる故ならむ、〔底訓往來〕に云、雖相尋醫骨之仁候、藪樂師者、問見來候歟、〔古
今醫統〕云擊鼓舞超、祈穰疾病、曰巫醫、是則巫覡之徒、不知醫藥之理者也、故南人謂之巫醫者
此也、
以巫醫故曰巫醫也、是醫にて巫
をかゝる也、田舎にまゝこれあり
此説を以て見れば、野巫醫ともいふべし、〔本朝怪談〕

藪醫にも功の者〔民のかまど〕
藪醫者の手柄咄〔俳言集〕

藪にまぐは〔和漢古語〕○藪にまぐはをいふ〔毛吹草〕
藪に目くばせ

〔太平記細川清氏背義詮〕佐渡判官入道道譽、是を聞てすはや憎しと思ふ相模守が過失は、一ツ出来にけるはと獨笑して、藪に胸し居たる處に〔長門本平家物語十〕藪に日壁に耳〔俚言集覽〕
藪入

或云、我朝俗、婦女爲官者、謂歲一再歸寧曰藪入、〔唐書〕三、上元二年詔、婦人爲官者、歲一見其親、又〔温大雅傳〕三、火禁中野狐落、野狐落者官人所居也、婦女昔比野狐是可藪人之證也、〔郭氏玄中記〕三、千歲之狐爲淫婦、百歲之狐爲美女、今俗淫婦、曰古狐此據、〔本朝俚語〕
藪に杖入り〔皇朝古語〕
藪の耳のされたる如し〔世語畫〕
藪を突いてへびを出す

〔酉陽雜俎〕王魯爲常途令、頗以資産爲務、會部民連狀訴簿貪賄、魯判曰、汝雖打草、吾已驚蛇、藪から棒出す〔民のかまど〕

〔俚言集覽〕藪から棒、雄長老百首狂歌「竹の子をぬすまれんとてする磐固藪から棒をつきた

すつもと」

柳は緑花は紅〔世語畫〕〔山姥話〕同之

〔粟田口猿樂記〕に、惟本覺の一理なれば、柳は緑花は紅にて、禪教共に異なる悟あるからす〔俚言集覽〕

柳は風にしなふ〔毛吹草〕

柳の枝に雪折れなし○「柳に雪折れなし」〔和漢古語〕

〔淮南子〕云、木強則折。革固則裂。齒堅於舌。而先之敝。口義云。木強則折。如藤如柳則難折云々。〔諺〕○「老子」云。長直之木有折傷。弱垂之柳無折損。〔淮南子〕云。欲剛者以柔守之。欲強者以弱保之。積於柔則剛。積於弱則強。〔科註原人論講義〕〔岸山歌嶺〕保雌守弱の條に云、昔由井正雪、擊劍の術を脩行せしとき、湯島の天神に詣て、七日を要期して、妙處を授け玉へと祈りければ、其満日に至り、社壇の前にて、暫時坐睡の夢に、一時大雪の降り來て、大木の枝に、其雪次第に積て、時々析るゝものあり、然るに、其邊に一株の柳ありて、其條に雪の積らんとすれば、風にて拂ひ落し、柳には柳も雪折れの枝なしと見て、忽夢さめたり、正雪は豁然として、劍法の秘要を悟りたり、剛強なる大木の枝は、雪に折られ、柔弱なる柳の枝に

は雪折なし、腰剣も亦此の如しと、大に悦び、遂に所願を果せり云云。
柳に蹴鞠(書の取合せ)〔俚言集覽〕
薬師の前に地藏の後

昔の常言に、薬師の前地藏の後と云事あり、是は暗き夜の事なり、薬師の縁日は八日、其前は七日まで、地藏の縁日は廿四日、其後は廿五日よりなり、〔南華咄〕(貞享年)に曰、昔八月十五夜の頃、去る山寺の上人、同宿を連、野はつれを御通りなされしに、此所は、ろうじて日くれば、盗人出て人をなやますよし、申すほどに、ひらに此道は御通りなされなと云、上人の曰く、古より薬師の前に地藏の後と云程に、今は盗人は出まじ、苦しからじと仰らるゝ、同宿また云、薬師の前と地藏の後とならでは、盗人出まじさかといへば、上人わざわらひ給ふと云事あり、上人が月夜なる故に、盗人出まじといひしを、同宿の心得たがへしたる也下畧

〔用捨種〕

薬代は銀一枚衣配りは小判〔風俗文選四季辭〕
薬袋なし

〔和訓栞〕に醫師にして薬袋なくしては、人を療すべからず、因て假に所詮なき事にいへり、是

は秦の夏無且の故事に本づくといへり、荆軻が始皇を刺さんとせし時、群臣寸鐵をも持たず、せんすべなかりしに、侍醫夏無且、其持つ所の藥囊を荆軻に投し、因て纒に其危害を濟ひたり、○〔俚言集覽〕に藥帶なし、大阪にてヤクタイチャとばかりも云、〔諸禮筆記〕平人とても常に新しき鼻紙一折、新しき手拭一ツをたしなむべし、用いたつ事多し云云、かやうの物をたしなまざるを無藥帶といひならはせり、

薬罐信心又薬罐學問又薬罐道心(とめ易きといふ)〔俚言集覽〕

薬罐に七五三張〔全〕

薬罐で蛸をゆでる〔全〕

安い物は高い物〔全訂咄大全〕

安物銭うしなひ〔毛吹草〕民のかまど ○安物買の銭うしなひ

安はたごの善き馳走(氣味わるく油断ならぬ事)〔俚言集覽〕

安からうわるからう、高からうよからう、〔全〕

暗夜に飛礫

〔莊子〕云。今且有人於此。以隋侯之珠。彈千仞之雀。世必笑之、〔鄒陽上書〕明月之珠、夜光之璧、

やノ部

以投於道〔書言故事〕謂不遇識者、明珠投暗、〔本朝傳記〕

暗夜の錦〔和漢古語〕同之

無用なる事の喻なり〔漢書〕云、富貴不歸故郷、如衣錦夜行〔蘇武書〕云、語曰、夜行被緇、不足為

榮、〔隱草〕

暗夜の灯

〔高野物狂謠〕に暗夜の灯、河水の渡に舟を得たる心地、〔俚言集覽〕

暗打の拾ひ刀〔世語盡〕

病は口より入る

〔禮記〕云、小人溺於水、君子溺於口、此云小人は賤者、君子は貴人なり〔國語〕云、厚味寔腊毒、〔本朝傳記〕

病なをりて醫者忘る〔毛吹草〕同之

〔說苑〕云病加於少愈、是諺の意に同し〔隱草〕〔愚按〕是は恩を忘るゝをいふ、咽元過ればあつさ

忘るゝ、又暑さ忘れて陰忘る、など皆同し意なり、

病足に腫足〔民のかまど〕

〔詩小雅巧言篇〕既微且臄、朱注、疔瘍為微、腫足為臄、

病む目より見る目〔毛吹草〕○病む身より見る目〔故事要言〕
雇人身にならす

〔倭訓栞〕につくのひ人、倭名抄に、客作兒をよめり、雜纂必不來、醉客逃席、客作偷物去、

と見えたり、諺にやとひ人身にならぬと云も是也、

雇人に利なし〔毛吹草〕〔大和故事〕

〔愚按〕雇人は、雇主の手足となりて、行働するものなれば、其行爲はすべて、雇主の責に歸

するを云ふ、蓋古の法律語なるべし、

雇人は日かぎり〔世語盡〕

雇乞食は冷飯をくはぬ 又やとふ法師は味噌をさらふ〔俚言集覽〕

やふれても小袖

〔穀梁傳〕云、朝服雖敝、必加於上、弁冕雖舊、必加於首。〔本朝傳記〕

弊れ紙子に紙頭巾

〔鷹筑波〕「かさぬるや破れ紙子に紙頭巾」と云句に「不弁するがの安部川に住む」〔俚言集覽〕
やふれ頭巾耳にかゝる

〔和歌民のかまき〕破頭巾で耳にかゝる「身のあしき辱をつゝめはよき事の聞いく度にさはるどもなし」〔全〕

やふれ隙子て骨ばかり〔全〕

鎧に衝手なし棒に打手なし〔全〕

鎧持鎧をつかはす辨當持辨當つかはす

〔鄒子〕云。屠者食糞。造車者多步行。鬻扇之翁手避暑。畜妓之夫恒獨處。〔全〕

養ひ得ては花の父母〔世語〕

養由に弓をいふ〔毛吹草〕〔和漢古語同之〕

〔淮南子〕云。養由基楚將善射。去楊葉百步射之。百發百中。楚恭王獵。見百猿遠避箭。王命由基

射之。由基始調弓矯矢未發。乃抱樹而號。〔俗諺の起こゝに出たり、かゝる射術の達人に對して、

弓の事を言ふは、却て笑を取の媒なり云々、〔釋草〕○〔太平記〕養由に弓を教へ養之に筆授け

んとするに似たり

養子兒の痢の出たやう〔俚言集覽〕

矢も楯もたまらぬ

拒み止むへからざる時云詞也〔森寺玉山書〕十二支寅「矢も楯もたまらぬほどの我なれど江戸

淺草で張貫になる」〔全〕

矢張野にわけ蓮華草

是は野人卑族の、高位高官に居るへからざるに喩へたり、

役に立たすの門立〔俚言集覽引北條時分辭〕

役人どこのばは立てるはどよし

やる時に着物をぬげ取る時に着物を着よ

此は船人の諺なり碇をやる時は烈しくして事ある時なれば裸になるよし取る時は無事故着服

して危ふからすとなりヤルトハ碇をおろす事取るとは碇をおぐる事也〔俚言集覽〕

やしやがよめいり〔毛吹草〕

やしやが馬〔民のかまき〕同之

此諺に二義あり、或は云ふ、夜又は鬼神の名なり夜又は馬を好む故夜又鬼の馬見し如くといふなり又或説に云ふ、傳へ言ふ織田信長公の徒士に梶川高盛といふ者ありよく馬を相せしより起ると此事書充字者に出づと云へり〔類聚名物考〕

疫病神で響を取る。

〔尤草紙〕とらるゝものゝ品々に「疫病の神にてもかたきとらるといへり」〔俳言集〕
約束へんがへ常の如し〔世語集〕
楊枝一本削らず

〔狂言記三〕佛師「某は楊枝一本削た事がござらぬ」〔全〕
宿屋の鼻に狐の魅たやう〔全〕
やまとたましひ

〔菅家道誠〕凡國學所_レ要、雖欲論涉_ニ古今_一究_ニ天人_一其自_レ非_ニ和魂漢才_一、不能_レ闕_ニ其闕_一與_ニ矣
〔源氏物語〕處女の巻に 猶さえをもととしてころ、やまとたましひの、世にもちわらるゝ事も
つよう侍らめ、「今昔物語第廿九卷」善澄才は微妙かりけれども、露和魂無かりける者にて、
此る幼き事を云て、死する也とぞ云々、「愚管抄三」内大臣伊周ぞ、人がらやまとのこゝろば
へはわるかりける人なり、からざえはよくて、詩などいみじく作られけれども云々、「同四」
公實は和漢の才にとみて、北野天神の御跡をもふみ、知足院のものには、人からやまとたまし
ひの増りて、識者も實資などやうに、思はれたらはやあらんする、「玉かつま」からたまは、

漢學を云へるなり、さねとは學問ある事をいへり、

◎ま之部

松は二葉より棟梁の思ひあり〔世語集〕○松は一寸より棟梁の性わり〔俳言集〕
松の木柱も三年〔民のかまど〕
松の木柱に竹の垣〔俳言集引森寺玉山恋〕
松の實ばえの白になるまで

〔芭蕉の句〕「此松の實生せし世や神の秋」〔俳言集〕

松へ雪がかゝると七度降る〔正月の飾松に雪かかゝるなり〕〔全〕
松は千年竹は萬年

圓い物はころび易い 又あまり丸きはころびやすい〔俳言集〕
圓くとも少し角あれ〔全〕○丸くとも一と角あれや人心
圓いをこけに角の蓋（をこけは麻績桶也）〔全〕
負るが勝ち〔全〕

〔一宵話〕に云、或人因坊道策に、先生終身、十分の勝利は、いづれの碁にて候ぞと問ひしに、

されば算哲に一目まけし事の候、是をこそ二度有まじき様に、思ひ候へといふ、是は先生ま
け基に候よ、されば勝負は基の主意にて候へども、勝負も勝負、對手も對手によるものにて
候、算哲は當代の逸物、古人に恥ぢず、後來また稀なるへく、また其時、算哲が手段、每若妙
ならぬはなかりしを、某も亦思ひを極め、巧を盡し、一手のねくれをとらず、終に一目まけ
にせしは、生涯の得意にこそ候へと申さ、すべて何事も、至極の地に至れば、言々皆妙とこ
ろればゆれ、云々

負相撲の小保とる如し【毛吹草】

負博奕のしきり打【世語集】

負愛のへらす口【俳言集】

量ではかつて箕でこぼす又爪でひるふて箕でこぼすとも

【文選養生論】或益之以吠澆。而泄之以尾閭。【全】

曹ではかるほどある

【大學衍義補十二】都下有車載斗量。權樵盤脫之謔。【愚按】車載、魯連、斗量、王嫺の語あり、
康熙字典、權字注に唐武后官濫。時人爲之語曰。權樵侍御史。腕脫校書郎。とわり腕字是也【全】

孫かはんより狗かへ【毛吹草】○孫かふよりは狗かへ

【吾吟我集】「孫よりも狗かへとはむば玉の夜々おもふ用心のため」

孫子に手をひかれて半室【俳言集】

眉かゆければ思ふ人を見る

【遊仙窟】云。昨夜眼皮瞶。今朝良人見。【全】

眉につばをぬる

眉に唾をぬれば、狐に魅せられぬといへり、因て人に欺かれぬ、用慎に言ふ詞なり、彼を狐
狸に比して云也、【全】

眞綿で首をしめるやう【全】○ねは綿で首をしめるやう【全引森寺玉山書】

【和訓梨】に眞綿て頸をしめるといふ俗諺は道春が述懐に、言下暗生消骨火、咲中儉鋭刺人刀、

といふが如し

眞綿に針をつゝむやう又綿に針をつゝむ

唐順之楊敬師餘歌、目上中眉猶自晒、綿中裏鐵那能見、【全】

正宗の刀も持手による【六論衍義大意附録】

正宗もやきか落れば釘の價〔俳言集引北條時分語也〕
枕を碎く

是れを、物の思案のくたく事に云ふは〔漢書劉向傳〕云、淮南有枕中鴻寶苑秘書と見へたり、
是れより出てたるなり〔類聚名物考〕

枕の下の海

〔紀友則集〕「まきたへの枕の下に海はあれど人を見るめはおひするありける」〔全

貧しきはへつらふ〔毛吹草〕○富てば驕り貧しきは諂ふ（と之部参看）

貧しきには親知少なく賤きには故人疏し〔拾遺〕

待ては甘露の食を得る○待ては甘露の日和あり〔毛吹草〕

〔維摩經〕云、甘露法之食、什日、諸天以種々名藥著海中以寶山摩之令成甘露食之得仙名不死

藥〔本朝傳〕。〔故事要言〕に「待ては甘露」、注に、甘露ありて、天より下る事ある時節をも、心

長く待ては、待ればするとの心なり、〔續晋書〕に、隋郡より甘露を上つる、是攝陽縣に降り

しと申せし由を記せり、

待ては海路に日和あり〔民のかまど〕

待たるゝとも待つ身になるな

萬能一心〔世語盡〕同之

〔說苑〕詩云、尸鳩在桑其子七兮、淑人君子其儀一兮、傳云、尸鳩之所以養七子者一心也君子、

之所以理萬物者一儀也。俗諺、本此意に同じ、萬の藝能も、唯一心よりすると云事也、然る

に、今の諺を説くもの、萬の藝能ありとも、一心不善なれば、無用の人となると云事に用ふ、

〔竹馬抄〕心の誠なからん人は、何事につけても、入眼の侍るまじきなり、萬能一心など申も、

かやらの事をや申らんとわれは、俗説の如く義を取る事久し、原來佛書、萬法一心の語より、

出たるなるへし、〔俳言集〕

萬能足りて一心足らず○萬能足りて堂のすみ

猛虎檻に籠り窮鳥翅を鏝る

〔太平記〕天下時勢粧事に猛虎檻に籠り窮鳥翅を鏝たるが如くに成ぬれば〔俳言集〕

猛虎檻に入れば尾を掉かして食を求む〔世語盡〕

蒔かぬ種は生ぬ〔毛吹草〕同之

〔山谷願軒詩〕云、涇流不濁渭種桃無李實。註ニ俗諺曰、種李不成桃。種禾不生豆。〔醫草〕

曲らねは世に立れず

〔世説〕云。王光祿如屏風。屈曲從俗。能蔽風露。〔是諺の意と同じ〕〔全〕○〔老子〕云。曲則全。〔山居四要〕に直如弦死道邊。曲如鉤得封侯。〔古今著聞集三〕爲輔中納言口傳に書れて侍るなるは、人は屏風のやうなるへき也、屏風はうるはしう引のべつれば、たふるゝ也、ひだをとりて立てば、たふるゝ事なし、人のあまりにうるはしう、なりぬれば、ぬたもたず、屏風のひだあるやうなれば、實うるはしきかたもつ也と、侍るときや〔便言集〕

優るを羨まざれ劣るを卑まざれ〔志賀〕

祭の渡九跡のやう〔全〕

参る所の多きに山上参り、食物の多きに河豚汁

芭蕉の句に「ふぐ汁や鯛もあるのに無分別」〔全〕

馬士にわんば〔民のかまど〕

馬士にも衣裳 又人形にも衣裳〔便言集〕

慢心鼻をはじかる

〔犬子集〕貞徳、まんじてや風にはじかるはなのとき〔全〕

餒頭手のの

豫て仕覚えたる事を、人のあつらへたる時言ふ詞なり、〔全〕

迷へは凡夫悟れば佛〔全〕

盲龜の浮木〔毛吹草〕同之

〔法華經〕佛難得値如佛受波羅華、又如一眼之龜值浮木孔、〔涅槃經〕及〔雜阿含經〕に詳なり〔龍草〕

蝸牛も一軒の主〔卷々圓の義なるべし〕〔便言集〕

回り持 ○天下回り持

〔御成敗式目、第四十六〕、一所領得替時、前司新司沙汰事、諺解十六丁五任限すきて、前國司は退き、新國司は赴く、替り目の事也、是以まはりもちの寺社なども、是に準して知るへきを爲すの法也、〔全〕

まづげをかぞへらるゝ

〔係詞集〕に睫毛をかぞへらるゝとは、身にありながら、得見ぬ故なり、〔全〕

町には事なかれ、乞食も世界よかれ〔和漢古語〕上句〔毛吹草〕同

眼は天をはしる。「毛吹草」全

〔大倭故事〕まなこは天をはしる、達人の他を見定むる事、天に目わりて、天より給ふ所の貧富
休佳を見るの神變もあるやうなりとの心なるべし、是世にいふ見通しといふ心なり〔學友抄〕
畏懸天之眼隠勿犯一切、愚按懸天之眼とは即此の諺の意なり、隠の字は犯字の上にあるべし、
不文にて倒錯したるなり、「全」
まづものになぶどり

〔和歌民のかまど〕「うき事は数ろうものを世の中によきはつもらぬならはしにして」〔全〕
まぐよりのばせ

阿波海船人の諺なり、是は帆を巻くより帆足をのはせといふ事なり、「全」
まかせ米はくひあく「全」

繼母の朝笑ひ
前杖をつく

◎け之部

下衆のわと智慧「和漢古語」○下衆の智慧はわとにつく「毛吹草」〔故事要言〕

〔吾吟我集〕に「げすの知恵後につきぬるはかなとよ身ころは主の供をするとも」
下衆の子と種園子は三つまで「世語集」○下衆と園子は三つまで「無言集」

下衆の樂は寢樂「全」
下衆のなう上藤はならぬ「和漢古語」○「げすない上藤はならぬ」〔毛吹草〕

〔野語述説〕云。雖有上下尊卑之分。何特尊敬上位。而犯侮下位乎。
下衆も三しき上藤も三しき「毛吹草」

下衆の一す戸「無言集」○下司の一すのふまの三す白痴の明ばなし」
〔梧窓漫筆〕に云、戸障子を閉るに一す残し、草履を踏ちらして脱置人、皆敗家の人なり

下衆の又使ひ「全」
下衆の誇り食ひ「全」

下衆の唇と夜着の袖
下戸は上戸の被官「毛吹草」

〔徒然草野槌〕に云酒を飲む者を大戸と云ひ不飲者を小戸といふ白氏文集に見えたり日本にて
は上戸下戸と云云〔江家次第〕正月三朝、定御樂後取並用高戸者上戸を高戸ともいふなるべ

し〔齊東俗談〕

下戸とばけものはなし〔毛吹草〕

下戸の酒うらみ〔俳言集覽〕

下戸の肴わらし〔全〕

下戸の平強ひ〔全〕

下戸のたてたる藏もなし〔雜書漫筆〕

下駄に焼味噌〔俳言集覽〕

下女腹よければ主腹しらす〔全〕

下馬雀

此は馬丁従僕などの下馬所に在て、饒舌するをいふ、井戸端會議などいふに同じ、

下食に紙らるゝと髪落る〔世事百談〕

下筋は口のさがなきもの〔俳言集覽〕

賢臣二君に事へず貴女兩夫にまみれず〔和漢古語〕○〔毛吹草〕に賢臣を賢人に作る〔忠臣云々
ちの部參看〕

賢人を寶とす

〔臨鐵論〕云、聖主以賢爲寶、不以珠玉爲寶、〔禮記〕云、楚書云、楚國無以爲寶、惟善以爲
寶、〔類聚名物考〕

賢人は危きを見ず〔世語集〕○君子は危きに近よらず

賢人は賢人を以て索め、盗人は盗人を以て求むべし〔雜草〕

賢者ひだるし伊達寒し〔大和故事〕○軍者ひだるし儒者寒し〔俳言集覽〕

〔和訓栞〕だての條に云、だて風、だてををする、などいふは男だてなど、いふより出たる詞なる
べし、治容を譯す、男を立てるといへば、立の義なるべし、俗諺に、賢者ひだるしだて寒しと
いへり、

喧嘩過ての棒ちぎり〔故事要言〕○いさかひはてゝのちぎり木〔い之部參看〕
喧嘩兩成敗

〔和訓栞〕に云、喧嘩兩成敗とは、時宗の頃より始めるといへり、〔徂徠の政談〕に云、喧嘩
兩成敗の事、當時の常法にて聖人の道に叶へり、但聖人の法は兩成敗せず、罪の有無を正して、
討ちたる人に罪なき時は、討たれたる者の子を四夷の地に移して、敵打をせぬやふにするな

けノ部

り、是は父の誓には共に天を戴かすと云て、四夷の地は天子の御持はづしにて、天下の外なる四夷の地に移す事なり、されば喧嘩兩成敗にはあらず、五倫の道を重く立て敵打を免ず、敵打をさせぬために、如此委細なる仕方あり云云、

喧嘩にまけて妻の面はる〔全〕

喧嘩に毛かはへた〔世語集〕

傾城と辻風にはあはぬがひみつ〔世語集〕

傾城買の練みる汁〔全〕

傾城買と灰吹は青い内が賞術〔全〕

傾城の千枚起請

藝は身を助くる〔毛吹草〕〔野爾説〕〔塵草〕

〔顔氏家訓〕諺曰 積財千萬不如薄技在身、技之易習而可貴者、無過讀書〔近古史談〕云、

稻葉伊豫守一徹、既服從織田氏而信長意未釋然也、乃設茗室、延之茶室、竊使其臣三人託伴

接以圖之、一徹從容入室朗誦壁間所桂詩曰、雲橫秦嶺家安在、雪擁藍關馬不前、三人就問其

義、一徹一一分解并說其典故甚詳、信長隔壁傾聽、忽然走出、謂一徹曰、我初謂汝一武勇男

子也、今乃知其有文學如此、猜疑之心頓消矣、一徹頓首而謝、於是命三人各取匕首於懷以示

之、一徹亦袖裏出一刀、笑謂三人曰、今日之事、僕亦期不徒死耳、〔全〕

藝者百石無藝高なし〔世語集〕

藝はぬきなり御意は重し又下地は好なり御意はよし〔全〕

外法の下り坂〔毛吹草〕〔和漢古語〕

外法を行ふ者は、人の目をくらますを、趣意とす、若わやまちて仕損する時、仕直す事能はず、ひとへに下り坂に車をやるが如し〔抱朴子〕に吳王、將軍、賀齋をつかわして、山賊をうたしむるに、かたきの中に、禁を能するもの有て、戦ふ毎に、官軍刀劍を抜き得ず、射る矢却て御方に當る故、毎度利を失へり、賀將軍思案して、かれ又わるものを禁すとも、又物なきものをば、禁し得まじと云て、多くの棒を作り、強力の者五千人を擇び、棒をもたせて先に進ましむ、山賊、禁をよくする者をたのみて、弓油しける所に、官軍棒をもつてうちしかば、禁をなすもの、れこなふ事叶はず、打殺さるる者、數萬に及べりと見ゆたり、是右に云、外法の用に足らざるしるし也、〔増鏡〕にも、外法とかや、まつるものとあれば、日本にも、久しく渡來れる事也、今此たぐひの者を、護摩の灰、鳩のかいよと、云ひならはせり、今俗間、

頭の中くはきものを、外法わたまを唱ふ、「西域記」に云、屈支國其俗生子、以木押頭、欲其
區區「胎餘雜錄」に區區は、今の外法かしら也とあり、「本朝傳記」
外法がしら○外法わた

「胎餘雜錄」に區區をよめり、「西域記」に云云（前條）と見ゆたり、眩法頭なり、「増鏡」に、太
政大臣藤公相、面首區短也、妖術者其首を得ん事を欲す、葬る時其塚を發さ、首を斫て去と
いへり「和訓栞」

外題學問 又本屋學問とも云「俳言集覽」
螢雪の功を積む

「檀道鸞音陽春秋」云。車胤字武子。學而不倦。貧而不常得油。夏月則練蠶盛數十螢火。以夜
繼日焉。「孫子世錄」云。孫康家貧無油。常映雪讀書。「此二人の故事によりて、勤苦して學
問するを、螢雪の功をつむと云習はせり、「螢雪」
螢火を以て須彌をやく

「圓覺經」云。如取螢火燒須彌山。「本朝傳記」
芥子に須彌をかくす

「念佛三昧經」云。取三千大千世界內於口中。能以須彌內於芥中。「佛祖通載」云。須彌內藏芥
子。「聯燈錄」云。納須彌於芥子。擲大千於方外。「鶴林玉露」云。唐太子渤、問歸宗禪師曰。
須彌納芥子。僕即不疑。芥子藏須彌。恐無是理。歸宗曰。學士讀萬卷書是否。渤曰然。歸宗
曰是心如椰子大。萬卷書從何處著。「全」
けしを千にわる如し「毛吹草」「和漢古語」
稽古に神變あり「全」

是は物を習ふて、心に面白しと思ひ、一向好て忘れず、常々工夫を巡らす人には、必ず人の
及ばざる、一得となはるものぞと云心也、「故事要言」
怪我の高名「故事要言」

「吾吟我集」に「人しれすころひてつきしむかふ疵いえぬる後やけがの高名」
變にもはれにも又變にもはれにも歌一首

變はけごなどいひて、はれのうら也、打とけたる詞なり、「俳言集覽」○「和訓栞」に、變は
けがれなりといへり
毛を吹て疵を求む「大和故事」

〔漢書武帝紀〕に推抑諸侯王。奏其過惡。吹毛求疵。應劭曰。求索多端。曰吹毛求疵。〔新論傷
 譏篇〕。洗垢求痕。吹毛覓瑕。〔後漢書〕高津內親王。直木に曲れる枝もあるものを毛を吹疵
 をいふぞわりなき。〔麗草〕。○〔蓮性疎狀〕に毛を吹て疵を求められ候事ぞ。〔職人歌合〕廿五番
 に、左右ことなる難なし、あなかに、毛を吹て疵を求むべからず。〔大倭故事〕に云、この語
 は、我身の過ちを、求め出すの喻也、毛を吹けは我身の疵あらはるべきに、人の惡を知らん
 とて、餘り吟味すれば、反て我身のわやまちに、落る事あるべし、其時、始のまゝにて置た
 らば我身の惡はあらはれまじきと、悔む事あらん、是毛を吹て疵を求るもの也云々、愚按此方
 の諺は、大和故事の説の如し、漢書、并韓非子等に、此語あり、此は察し難きを、察する、義
 にて、人の陰事を檢廉する事也、俗諺と、言同して義異なり。〔俚言集〕
 系圖侍不庖丁。〔世語〕
 系圖上戸。

或曰丹波の人の話に、醉後に我家の系圖格式を自負して語るものを、系圖上戸といふ。〔俚言集〕
 見物ならば笠着よ。〔全〕
 けびぬしにあひたるみすのへり。〔皇朝古語引榮花物語見はてぬ夢〕

けんにようきされてむぬしはらす。〔毛吹草〕 未詳
 刑鞭蒲朽

〔小野國風詩〕に刑鞭蒲朽螢空去。諫鼓皆深鳥不驚。是は劉寛が、蒲鞭の故事を用て、無爲に
 して治まる事を作れり、或曰大江〔麗草〕
 獸雲にはゆる。〔毛吹草〕 同之

〔事文類聚〕云。淮南王安、臨仙去。餘藥在鼎中。雞犬舐之。並得飛昇。故鷄鳴雲中。犬吠天
 上。此説もと神仙に傳出たり。〔全〕
 けふは人の上あすは我身の上。〔毛吹草〕 〔和漢古語〕 同之

〔平家物語〕に惡源太義平、死に臨て、平家の土に對して、云たる詞なり、〔新古今集〕に加賀
 少納言、「なき人をしのぶる事もいつまでそけふのわはれはあすの我身を」〔全〕
 けふかあすか。

人の老境に及て、殘齡のはななきを云諺なり、〔朝忠家集〕「人の世の老をはてにしせましか
 ばけふかあすかもなげかさらまし」〔全〕
 けら腹たてばつくみよるこぶ。〔毛吹草〕 〔和漢古語〕 同之

つぐみは鳥名なり、百舌鳥をよみ又〔本朝食鑑〕鵲〔釋名〕馬鳥、鳥馬也、鵲站をつなぎ置て此鳥を取、東國にて鳥馬をまはすといふ、又諺にけら腹たてばつぐみよるこふといへるも、かゝる事をいふにや、京師にて除夜毎に、是を炙り食ふを祝例とすに見たり、又つぐみ五畿内の俗つむぎといひ、關東にてうまといひ、加賀にてかめて、遠江にてつぎめ、仙臺にてつぐといふ、以上〔物類稱呼〕

けらつぐみの子は卵からうなつく〔毛吹草〕

鵲站才〔釋名〕い之部石白鵲の條參看

鯨鯢の腮にさらす 又腮にかゝるとも〔傳言集〕

〔義經腰越狀〕或時漫々大海凌風波難、不痛沈身於海底、掛骸於鯨鯢之腮、〔同合狀〕切敵徒首

曝鯨鯢之腮 權も發露落〔故事要言〕

忠直剛正の言下には、奸佞邪曲なる人の權柄は、脆く碎かるゝをいふ、趙の藺相如が、澠池の會に於けるか如きは、權もほろゝの振舞と謂ふべし、試に此に附記す〔史記〕に云、秦王酒酣にして曰く、寡人竊に聞く趙王音を好くすと、請ふ瑟を奏せよ、趙王瑟を鼓す、秦の御史之

を書す、趙王の臣藺相如前みて曰く、趙王竊に聞く、秦王善く秦聲を爲すと、請ふ盆甌を秦王に奉らん、以て相娛樂せられよ、秦王怒つて許さず、於是相如前みて甌を進め、跪て秦王に請ふ、秦王敢て甌を撃たず、相如曰く、五歩の内相如請ふ頸血を以て大王に灑くを得んと、左右相如を双せんと欲す、相如目を張り之を叱す、左右皆靡く、於是秦王懼ばす、爲に一たび甌を撃つ、相如趙の御史を召し書して曰く、某年某月日、秦王趙王の爲に甌を撃つと云云、〔大倭故事〕ケンモホロ、ケン〜スルなどいふ、よりてもつかれぬやうなるあしき詞などを、權威と雉の聲とにならうへ云々、

嬰袋で尻拭ふ〔世語盡〕同之

是は物の洒落にして、自墮落なるをいふ也、〔古今著聞集〕に無沙汰の何とかなや、いひける僧に、或女、古今集を書て玉はるへしとて、古今一部と、料紙とを彼僧に預げると、心易く受取て、後久しく音もせずなりければ、心もどなくて、一向に責をけれど、まだ〜といふて果さねは女も今はうらみ、腹立て云やう、今はよし其本の古今を、返し給へと云はれて、詮方なければ、答て曰、何某先頭腹を病み侍りしが餘り、度と泄瀉ける故に、紙も悉くつかひ切てはへる程に、古今の料の紙は、皆遣ひたりと云、女も興ざり乍ら責て、紙ころはつかひ給はめ、

古今は返し給はぬかと云れて、僧の云、されは古今も、落し紙に皆遣ひたりといひけるぞ、
誠に紙ころは、恐しなからも遣はめ、古今にて尻を拭ひける僧なれば、袈裟にても、拭ふま
じきものにあらず、仍て此に記す、〔全〕

けいわん者のろら笑ひ〔俚言集覽〕

けいわん口 又媒口〔な之部参看〕

〔世事百談〕に云、今世にて人の口入するをけいわんといひ遊女の口入するをせげんといひ、
これらのことを媒するをすべて肝煎と云、俗語をねもふに、慶安といふは、江戸木挽町に大和
慶安と云醫師ありけるに、又同じ頃に伊達三郎兵衛、長谷川助右衛門といふ浪人、かの慶安
と參會し、入魂の上にて世間の人の出入あるは男女婚姻の媒約など、右三人して肝煎す、
然るにある諸侯の縁邊を取持、其息女金五六十兩持參の筈に相定め、彼三人の者ともいひ合せ
て其中を二千兩はかりかすめ取るたくみをしける所に、此事世上にあまぬきこと、寛文五
年巳巳八月廿四日かの三人の奴原追放たれぬとかや、其頃よりして人の世話するものを慶安
といひけると、諸家深秘録にいへり、又せげんと云は女術の轉訛なるよしかけるものあるを
見たり云々〔戰國策〕 燕王謂蘇代曰、寡人甚不喜訛者言、〔杭州謂蘇代對曰、周地賤媒爲兩譽〕

也、之男家曰女美、之女家曰男美云云、

けはひ化粧して水風爐の御馳走〔水風爐は今居風爐と云水溜 三才圖〕 〔俚言集覽〕

桂馬の高上り歩の餌食〔全〕

結構は馬鹿の唐名〔全〕

眷屬同士の率并び〔全〕

建長寺の庭を竹帚で掃いたやう〔全〕

現世後世を取はず〔全〕

賢女のかたかけ〔世語集〕

賢人は危きを見ず〔全〕

けむる座敷には居られぬ

けむにまかれる

敬して遠ざく

〔論語〕敬鬼神而遠之可謂知とあるより出づ

◎ふ之部

けふノ部

富士の山はど

三百六十六

凡て澤山なる喻也、〔鷹筑波〕「ちい文や富士の山はど書ぬらん」と云句に「戀に心は浮島が原」〔俚言集覽〕

富士の山はど願ふて蟻封はど叶ふ又「富士はど願ふて摺鉢はど叶ふ」〔全〕
富士の山と長くらべ

〔源平盛衰記〕富士の峯とたけくらべ猫の額にゐる物を鼠のうかがふ喻へにや〔全〕
富士の山を蟻かせる

〔傳家寶〕云。蟻蟻兒搬倒泰山。〔全〕

富士の山を張ぬく〔全〕

富貴の家に災難多し〔世話盡〕

富人は世間の重寶〔長壽秘傳抄〕

富人は貧者がうらむ

〔常言道〕富者宛之藪

分別の上の分別〔俚言集覽引大友興廢記〕

分別盛〔俚言集覽〕

分別臭い〔全〕

分別の分が百貫する〔全〕

分別なきものにおぢよ

分相應に風が吹く〔天和故事〕同之○分々に風が吹く〔世話盡〕

此は人の貴賤貧富、夫々の分際に隨て、作業の外に、義理恩愛の爲に、世話多きを云ふ〔故事要言〕

佛法あれば世法あり〔世話盡〕

佛法は飢渴なし〔全〕

佛法どわらやの雨は出てきけ〔俚言集覽〕

佛ども法どもしらぬ

〔詞不可疑〕佛法と云事だもしらすして、わかしくらさん人をや、〔爲愚痴物語〕佛ども法どもしらぬ人〔全〕

佛種は縁より起る〔藤草〕同之

〔法華方便品の偈〕に云。佛種從縁起。〔太平記廿九〕藥師寺公義、遁世事の條に佛種は縁より

起る事なれり、かやうに次を以て、浮世を思ひ捨たるは、やさしく優なる云々、〔全〕
佛祖の誕ねぶり

〔似我蜂物語〕初發心の時は色々の言句をも借り、さまじの事を言ひ侍る、是を佛祖の誕
ねぶりといふ、〔全〕

船の先やり〔毛吹草〕〔和漢古語〕

船盗を陸で追ふ〔世語集〕○船盗を陸歩で追ふ〔俳言集〕

船は帆で持つ帆は風で持つ〔俳言集〕

船姿三里帆姿九里 又船すがた一里帆姿三里〔全〕

船て船をこぐ

船は船頭に任せよ

船をささむ

〔呂氏春秋〕云、楚人劍自舟中墜水、遽契其舟曰、是吾劍所從墜也、舟已行而劍不行、不亦感
乎、〔感草〕

古きをたつねて新さを知る〔毛吹草〕同之

〔論語〕云。温故而知新。可以爲師矣。〔感草〕

古川に水たえず〔毛吹草〕〔和漢古語〕

〔小町冊〕冬、氷、「古川に水をたやすすあつ氷」江戸忠重〔俳言集〕

古家の造作〔世語集〕〔大和故事〕

舊名三年〔俳言集〕

舊札と年寄親は置所がない〔全引北條時分語〕

札とは神符をいふ、置所なきは、鹿略にすべからざるをいふなり、〔源氏物語〕いともかしこ
は、おさどころも侍らず、

夫妻は輪廻のきつな

〔不住同心物語〕に親子は三界の首枷、夫妻は輪廻のきつな〔俳言集〕○「きつな」〔倭名抄〕

に、鬚、又綵をよめり、犬にいふ也、牽綱の義也、維も同じ、今世鷹家に木綱あり、山椒の
木をもて作るをよしとす、くさりに代へ用ふといへり〔涅槃經〕に犬を枷する是也、馬にいふ
は騎綱の義、懸綱也といへり、〔和訓栞〕

夫婦は二世〔大和故事〕○夫婦は二世のちぎり〔毛吹草〕〔於之部親子は一世の條參看〕

夫婦喧嘩は犬も食はぬ。又犬も構はぬとも〔俚言集覽〕

夫婦の前は近盃〔全〕

夫婦も元は他人
二つ子をなすとも女に心ゆるすな〔俚言集覽引北條時分語〕○「七人の子をなすとも女に心ゆるすな」
二人前ははたらけぬ

〔品字箋〕充字註諺云。一身難充二人役。〔俚言集覽〕
二つよき事なし

〔野客叢書〕云。腰纏十萬貫。騎鶴上揚州。天下美事。安有兼得之理。夏侯嘉正喜丹竈。又欲為制詰。嘗曰。使我得水銀銀半兩。知制詰三日。平生足矣。二願竟不遂而卒。白樂天棄冠冕而歸。鍛鍊丹竈未成。除書已到。世事相妨。每々如此。蓋造化之工。不容兼取。既欲為官。又欲為仙。安有是理耶。〔本朝俚語〕
糞さたなしとて黄金を捨る事なかれ〔俚言集覽〕〔爲愚痴物語〕
糞の物をさぐるが如し〔俚言集覽〕

〔五代史南唐世家〕李穀謂韓熙載曰、中國用吾爲相、取江南如探囊中物耳、

糞の鼠〔全〕

糞撲フノロタノキ

〔史記〕云。秦王政糞撲二弟。又說苑。に見ゆ是は袋に入れて、たゞきころすなり、東國にて俗語に云へり〔全〕

鮎の水を呑むやう〔全〕

鮎のごみに酔たやう〔全〕○「鮎の泥に酔たるやう」

鮎の念佛

〔大倭故事〕に、莊子鰍魚の喙を引く又俗に小聲なるを云ふ〔全〕

福祿壽の市立〔世語蓋〕

福徳三年 ○ 福徳の三年目

〔類聚名物考〕ニ云、此事明徴なし、鎌倉光明寺は紀主上人開基なり、勅額二枚今に什物として有、其一枚に福徳の年號あり、或人云、山名細川か戦の時分、都鄙大亂にて、年號の改元ありと雖も人知らず、只堂上にのみ用ひられたり、此の福徳の三年目に、細川山名死して亂しつまるより云出せる辭なり、尊氏より八代義政の時より、百四代後土御門天皇應仁元年五月

より、文明九年十一月まで十七年の間なり、

福の神を祈るより人の口をへらせ。

淵に雨〔和漢古語〕同之○淵に鹽〔世語集〕

物事に折角を觸み動むといへども、必竟何の益もなきといふ、〔故事要言〕
淵は瀬となる

〔古今集序〕云。淵變作瀬之聲。寂々閉口。歌に「世の中は何か常なるあすか川さのふのふち
はけふの瀬となる」〔本朝御覽〕

淵の端に兒を置く〔俳言集傳引藤寺玉山巻〕

冬の雨は三日降らず〔世語集〕

冬の雨か三日降れば猫の顔か三尺延ひる〔是は冬の雨の暖なるを云ふ〕〔俳言集傳〕

冬編笠に夏頭巾

〔寶藏〕冬編笠に夏頭巾は、世をたてがまじき事にいへと、やもすれば夏もかぶりて持病中
じなふぞせんかたなき〔全〕

風前の塵

〔梅松論〕に、頼尙御前にて命を捨候は、敵は風前の塵たるへし〔全〕

風炉と客とは立てたがよし〔全引北條時分殿留〕

藤をもて錦につぐ

〔萬葉集卷十七〕忽摩芳音 中畧 俗語云。以藤續錦。云〔皇朝古語〕

藤は樹に綴り人は君による〔俳言集傳引大友興隆記〕

文をかへすをいひ

〔源氏物語〕浮舟巻 殿の御文はなごでかへし奉らせたまひつるぞゆこしくいみはぐるものを

〔皇朝古語〕

ふみをやるにもかく手はもたず〔俳言集傳〕

文福茶釜へ毛がはへた〔全〕

文錢を伽羅鋸でわる〔全〕

武士は食はねどたかやうじ ○さすが士食はねど高楊枝〔民のかまど〕士食はすと高楊枝

〔和訓栞〕たかやうじ、鷹楊枝の義手一束にして水を吹く時に用ふといへり、世諺にくはねど
たかやうじといふ是也○鷹は飢ても稻を啄まずといふに同じ意なり

武士に二言なし。○士二言なし。〔俳言集〕

〔國語越語〕王曰、無是貳言也、吾已斷之矣、

武士は相見互ひ

普天の下率土の濱

〔詩北山篇〕溥天之下莫非王土、率土之濱莫非王臣。〔釋〕
蟬遊の一期

世のはかなき事に喩へていへり。〔大戴禮夏小正〕云。蟬朝生而暮死。〔爾雅〕云。蟬渠畧。
郭璞注云。似蜻蛉。身狹而長。有角叢生。燕土中。朝生夕死。〔白樂天詩〕云。長生無得者。
舉世如蟬。〔全〕

筆は諸藝の上盛。〔世語〕

太きにはのまれよ。〔毛吹草〕○太きにはのまれよ。長きにはまかれよ。〔和漢古語〕

ふむとくくばむ。〔全〕

ふくびやうたごみにあがらす。〔全〕未詳

ふるなの辨舌。〔全〕○富婁那の辨舌舍利弗の智慧

〔謔百首〕立板に水「かひく」に富婁那がとける法の弊せつりもすたもあはれとぞさく」
河豚は食ひたし命はをし。〔全〕

〔花陣綺言〕食楊梅又怕齒酸、不食楊梅又須口渴、〔本草綱目〕河豚有油麻子脹眼睛花之語、而

江陰人鹽其子槽其白、埋過治食、此恒言所謂捨命喫河豚者耶、

ふぐの横飛をしたやう。〔俳言集〕

ふくどうの馬に蹶られたるか如し。〔毛吹草〕

布施無い經に袈裟を落す。〔全〕

〔吾吟我集〕「蟬ころもたと一重にて鳴聲や布施ない經にけさ落すらん」
不信の龜は甲破れる。○信なき龜は甲をわる。〔し之部に出づ〕

〔古本今昔物語卷五〕世の不信の龜は甲破れてと云は此事を云ふとぞ。〔皇朝古語〕

ふんや石とり。未詳

〔空物語〕たつのむら鳥ふんや石とりとか、いふなるとのたまへり。〔全〕
降て涌たやう。又ふつて出たやう。

〔犬子集〕「降て涌たる事もころわれ」と云句に「誰が世にかたくみ出せるあられ登」貞徳

〔俳言集〕

降らぬ先の傘（よ之部用心は前にありの條參看）
泉の宵たくみ〔俳言集〕

深く取て深く渡れ〔全〕

無性者の一時はたらしき 又ふしやうもの隣はたらしき〔全〕
ふられて歸る果報者〔全〕

◎こ之部

子ゆゑの間にまよふ〔毛吹草〕同之

〔大學〕云、諺有之曰、人莫知其子之惡是諺の意に同じ、〔後撰集〕兼輔朝臣「人の親の心は聞
にあらねども子を思ふ道にまよひぬるかな」〔醒草〕

子捨る藪われども身捨る藪なし○子を捨るども身を捨る藪なし〔毛吹草〕○子を捨る藪はわれ
ども身を捨る藪はなし〔大和故事〕

〔金葉集〕捨子を見てよめる「身にまざるものなかりけりみどり子はやらんかた無く悲しけれ
ども」〔全〕

子をうらみ身をかこつ〔世話盛〕

子は三界の首かせ〔毛吹草〕（是は僧家に言へる詞なるべし）

子を一人そたつれば尿を一升食ふ〔俳言集〕

子を持って知る親の恩 又子を持って親の恩をしる

〔徒然草〕に孝養の心なきものも、子を持ってころ、親の志はおもひしるなれ、〔傳家寶〕云當家

總知柴米價、養子纔知父孃恩、〔唐話纂要〕養子方知父母恩、立身方知人辛苦、〔全〕○〔六帖詠草〕

小澤蘆庵「子を思ふ道にまよひて今をしるちよふの山のふかきめぐみを」

子に迷ふ親心 又子にひかるゝ親心〔全〕

子寶〔全〕○萬の寶より子寶○千の倉より子は寶

〔萬葉集〕山上憶良「白かねもこかねと玉も何せんたまはれる寶子にしかめやも」

子寶脛がほろる〔全〕

子を知るものは親〔全〕

〔韓非子〕云、知臣莫若君、知子莫若父、〔史記李斯傳〕吾聞之明君知臣明父知子、
子供は訓へ殺せ馬は飼ひ殺せ〔全〕○（一に飼を使に作るは非なり）

〔一言草〕と云書に云、偃諺に子供は教へ殺せ馬は使ひ殺せといふ事あり、去れば世絶と云書に人の事ある須らく教へ業とすることあらしむべし、貧賤なる者業あれば飢渴に至らず、富貴なる者業あれば彌之を勵むによりて、酒食に耽るいとまなしと記せり、人の親たるもの教ふべし、子たる者勉むへし、怠るへからず、

子供喧嘩が親喧嘩〔全〕

子供の喧嘩に親が出る、人立中立御醫者立、

大指と小指とを打合せて、是を子供の喧嘩に親が出ると云、五指の内、人指中指薬指残り立也、

是を人立中立御醫者立と云、戯の中に戒を寓するなり、〔全〕

子を想ふ夜の鶴〔全〕(や之部焼野の雉の條參看)

子供狂ひは泣くるひおとな狂ひは死くるひ〔全〕

子供が火なぶりすると寐小便をする〔全〕

子持の腹へ馬の脊(乳母の肉食をいふ)〔全〕

子持を雇ふよりびつこをやとへ〔全〕

子に使はると身ころつられけ〔全〕

子は夫婦の間の鏝カスガヒ

子煩惱に子なし

心内に動けはことば外にあらはる〔和漢古語〕○心内にわれば詞外にあらはる〔故事要言〕

心はどの世を歴る〔毛吹草〕〔本朝偃諺〕〔故事要言〕

心なき子は親の故郷をかたる〔民のかまど〕

心がけある士は轡の音に目をさます〔偃言集〕

心なしの人怨み〔大和故事、故事要言〕

心を師とせされ ○心の師とはなれ心を師とせされ〔毛吹草〕〔和漢古語〕〔偃草〕

〔陸象山語録〕云。學者大病。在於師心自用。師心自用。則不能克己。不能聽言。〔新撰六帖〕

此「たろかなる心の師にはなりぬともれもふれもひに身をばまかせし」〔本朝偃諺〕○〔諺草〕涅

槃經第二十八卷云、願作心師、不師於心、

心の駒に手繩ゆるすな ○心の駒〔鳥朝古語〕

〔瀟山警策〕云。如惡馬不以轡、將當牽人陷於阨陷。必不相賺。古歌に「ひかれてハあしき道に

も入りぬべし心の駒に手繩ゆるすな」〔全〕

心の鬼か身をせむる。○疑心暗鬼

〔列子〕云。諺言、疑心生暗鬼。〔天台軌範〕云。心迷生闇鬼。〔大智度論〕に云ひかし山中に寺あり、其内の別房に、鬼住て住僧をなやます故、皆房をすてて遁出しかば、後には住せんといふものなし、かゝる所に、他所より、一人の僧來て、此房にすまんと云、所の人、此房には鬼ありといへば、何ほどの事かあらん、我彼を伏すへしとて、房に入て住す、其折ふし、又ある僧、此房に鬼ありと聞て、かれをまたかへんと云て、房に行き、戸を開きて入らんとす、前に來りし僧、夜陰の事なれば、すはや件の鬼よと、驚きて戸をおさえて、入れどよせぐ、後に來りし僧は、内に鬼ありて、我をこばむと心得、まきりに入らんとあらうふに、終に戸を押やふり、双方こふしを以て打ひくみあふに、夜漸く明しかば、故舊同學の僧なり、互におどろきはずて、あきれ居たり、人多く集り見て、笑ふ事限りなしとあり

〔謙徳公家集〕に「我ためにうとま心のつくからにかつは心の鬼も見ゆけん」〔新六帖〕に「かくれみのうきなをかくすかたもなし心に鬼をつくる身なれば」〔古〕

心ざしは髪カミの筋スジ ○志は木キの葉ハにつツむム 〔毛吹草〕〔和漢古語〕

今俗心ざしは松マツの葉ハといふに同し〔古今著聞集卷十八〕彼卿ニ條中納言は雪ユキくひにて候やと申

ければ、すなはちの頑ふたにもりて出されにけるを、つかはしたりければ、彼卿のかへしに「心

ざし髪カミのすぢスヂともればしけりかしらの雪か今の此雪」〔皇朝古語〕

心ココロからカラ乞カキ兒キとなる

佛説に因て、人の果報を説くに、多く不仁の身、貧困の報應を集めて、過現の二世を附會する事あり、世俗是に迷ひて、千人に悪まれたる者、癩病カサカサを受るといへり、云云〔故事要言〕

心ココロなしナシのかつカツたい

〔宇治拾遺〕鼻長僧、これのはまがしかりける心もちたるもの哉心なしのかたむとばれたのれがやうなるものをいふぞかし〔俳言集〕

心ココロは面オモての如ごとし

人の心は各々異なるものにて、十人寄れば十心といへる如く、經文にも人々如面各々不同とも説けり、云云〔毛吹草〕○〔左傳〕子産曰人心如面、

心弱ココロさものは筋スジなし子コを産ウむム 又またささののよよいいものものは筋スジなし子コをウららむム 〔俳言集〕

心ココロなき者モノには乞カキて食クハへヘ 〔故事要言〕

心ココロに垣カキをウせセよ